



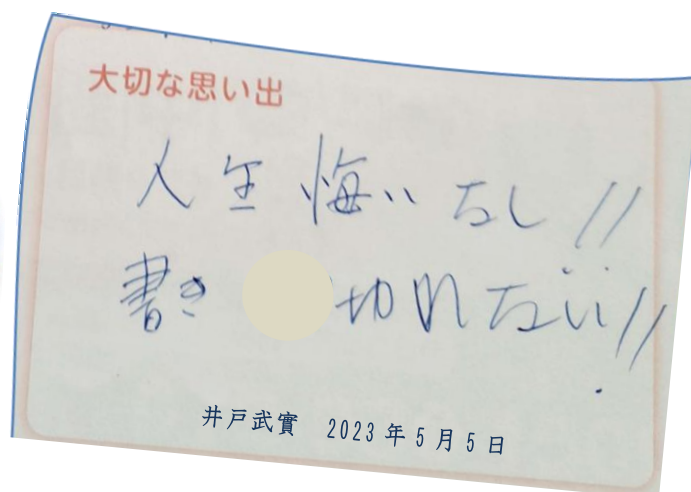
| | |
|--------------|---|
| Title | 井戸武實の歩みと追悼集 |
| Author(s) | 井戸武實追悼集作成委員会 |
| Citation | |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/100706 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

い ど たけひろ
井戸武實の歩みと追悼集



井戸武實追悼集作成委員会

目 次

I. はじめに

| | |
|----------------|-----------------------|
| 井戸武實追悼集作成委員会代表 | 高 鳥 毛 敏 雄・・・・・・・・・・ 4 |
|----------------|-----------------------|

II. 追悼文リレー

| | |
|------------------------------|-----------------------|
| 井戸さんを偲ぶ思い | 有 馬 和 代・・・・・・・・・・ 6 |
| 結核健診機能もここへ移転ですよ！大前進です！ | あ り む ら 潜・・・・・・・・・・ 8 |
| 故人をしのんで | 今 田 光 三・・・・・・・・・・10 |
| 井戸さんと西成労働福祉センターの関わり | 海 老 一 郎・・・・・・・・・・12 |
| 井戸さん ありがとう | 逢 坂 隆 子・・・・・・・・・・14 |
| いつも笑顔だった井戸さんへ | 河 崎 洋 充・・・・・・・・・・16 |
| あいりん地域と結核を愛された井戸さん | 工 藤 新 三・・・・・・・・・・17 |
| スーパー・コーディネーター 縁の下の力持ち 井戸武實さん | 黒 川 渡・・・・・・・・・・19 |
| 井戸武實さんを偲ぶ | 黒 田 研 二・・・・・・・・・・21 |
| 井戸さんと同じ世代を生きてきた仲間として | 清 水 多 實 子・・・・・・・・・・23 |
| 井戸さんの思い出 | 下 内 昭・・・・・・・・・・24 |
| 公衆衛生を学ぶ学生として井戸さんに感謝を込めて | 白 井 こ ころ・・・・・・・・・・26 |
| 笑顔の素敵な井戸さん | 高 野 正 子・・・・・・・・・・28 |
| 井戸さんのように社会貢献をめざして | 田 中 義 則・・・・・・・・・・29 |
| 大阪の風土が生んだネットワークの達人 | 中 村 安 秀・・・・・・・・・・31 |
| 井戸さん、ほんまにありがとう | マ ー コ・・・・・・・・・・32 |
| 「感謝」 | 松 元 清 美・・・・・・・・・・33 |
| いつも明るい井戸さん、ありがとう！ | 三 浦 康 代・・・・・・・・・・35 |
| 井戸武實さんとの思い出 | 三 杉 隆 文・・・・・・・・・・37 |
| 井戸さんはサポーターハウスの応援団長 | 山 田 尚 実・・・・・・・・・・39 |
| 井戸さんの思い出 | 山 本 繁・・・・・・・・・・41 |
| 感謝申し上げます | 山 森 晶 子・・・・・・・・・・43 |
| 井戸武實さんを追悼する | 高 鳥 毛 敏 雄・・・・・・・・・・45 |

Ⅲ. 年表（1945—2025）

井戸武實の歩みと社会の動き

三 浦 康 代・・・59

Ⅳ. 井戸武實の主な学会発表と著書等

井戸武實の主な学会発表と著書一覧・・・・・・・・・・・・・・ 62

Ⅴ. 資料

- 資料 1. CR 検診車運用によるホームレス結核検診受診から治療完了まで（NPO HEALTH SUPPORT
OSAKA が大阪市保健所から釜ヶ崎を中心とするホームレスの結核対策の一部を受託する
にあたって、大阪市に提出した資料） 逢 坂 隆 子 ほか・・・ 63
- 資料 2. 西成労働福祉センターだより（結核関連記事） 西成労働福祉センター・・・ 66
- 資料 3. 薬を飲み忘れるのは正常な人間——訪問型 DOTS 事業 井 戸 武 實・・・・・・・・ 70
- 資料 4. 外国生まれの結核患者の増加とその対策を考える「第 7 回ストップ結核パートナーシッ
プ関西ワークショップ」の報告 井 戸 武 實・・・・・・・・ 72
- 資料 5. 釜ヶ崎の赤ひげ先生—本田良寛伝—（~~結核~~関連新聞記事）大阪日日新聞・・・・・・・・ 73
- 資料 6. あいりん地域におけるの結核 工 藤 新 三・・・・・・・・ 74
- 資料 7. 「ストップ結核パートナーシップ関西」12 年間の記録 大阪公衆衛生協会ほか・・・ 75

Ⅵ. 思い出のアルバム

思い出のアルバム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79



大阪府の鳥：モズ



和歌山県の花鳥：梅とメジロ

I. はじめに

井戸武實追悼集作成委員会

代表 高鳥毛 敏雄

関西大学社会安全学部・研究科教授

お元気な姿しかみたことがなかった井戸武實さんの突然の訃報に接し、大変驚きました。

井戸さんと長年仕事をしてきた立場にあることから、井戸さんのこれまでの功績をたたえ、井戸さんに関わる思い出やエピソードを綴った文章や写真をまとめ、故人を知る人たちやご遺族と共有し、後進に残すべきことが多いと考え大阪結核勉強会が中心となって追悼集を作成することといたしました。

井戸さんが最も輝いていたのは「NPO ヘルスサポート大阪（以下、NPOHESO）」の事務局長の時期だったように思います。井戸さんが「あいりんの井戸さん」となったのは NPO の事務局長となったことからです。この NPO について説明が必要と思われるので少し紹介させていただきます。NPOHESO は 2006 年 7 月に、矢内純吉先生を理事長とし、黒田研二、黒川渡、山本繁、高鳥毛敏雄、藤本敬三、西森琢、逢坂隆子、高嶋哲也、安部満枝、小杉好弘、高松勇、辻美恵子の方々の 12 名を理事とし、そして坂井芳夫を監事として設立されました。しかし、NPO の設立は逢坂隆子先生の多大なるご尽力とその人的ネットワークによってつくられたものでした。何を目的としていた NPO だったのかについては設立趣旨書に示されています。長くなりますがこれを一部省略して紹介させていただきます。「大阪をはじめとする大都市には、ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々が数多く居住する。このような人々の健康問題は、本人自身はもとより社会全体としても大きな問題であり、これらの人々を放置することは、人道的にも極めて重大な問題である。しかし、この健康問題は、行政だけで、あるいは民間だけで解決できるものではなく、社会全体として取り組んでいくことが欠かせないとする。我々は、ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々への健康支援活動を推進するとともに、必要な関係機関・団体の協議の場づくり、研究ならびに研修・人材育成を行い、野宿を余儀なくされている人々の生活を支え、命を守る活動を進めたい。そして、特定非営利活動促進法に基づく法人格を取得することにより、健康支援活動を一層充実させ、そのことを通して市民が健康で安心して暮らせる社会の創造に寄与することを目的に本法人を設立する」としていました。

NPO 法人 HESO の事務所は、当初は特別清掃事業で朝晩に就労者が集まる建物の二階をお借りしていました。近くに NPO 釜ヶ崎支援機構の事務所があり、またあいりん総合センター、大阪社会医療センター付属病院、西成労働福祉センターがありました。井戸さんは毎日その事務所に通い保健師とともに野宿者や就労者の健康相談や健康支援活動を行い、NPO の設立趣旨書に掲げた「ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々への健康支援活動を推進するとともに、必要な関係機関・団体の協議の場づくり、研究ならびに研修・人材養成を行い、野宿を余儀なくされている人々の生活を支え、命を守る活動を進めたい」ということを一つ一つ具現化していってくれました。

NPO 法人 HESO が解散した後は、公益財団法人大阪公衆衛生協会の初代事務局長に就任していただ

きました。そして、公益法人の柱とした「ストップ結核パートナーシップ関西」の事業化にご尽力をしていただきました。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップは、「大阪結核勉強会」が企画運営する役割を担ってきました。ところが、2021年3月に大阪公衆衛生協会が解散し、さらに新型コロナウイルス感染症の流行が収まらずストップ結核パートナーシップ関西のワークショップの存続が危ぶまれる状況となりました。2022年度はオンライン開催とすることで何とか乗り切りました。

2023年度は対面方式で本格開催することとしましたが事務局の大阪公衆衛生協会が解散されていたことから混乱がありました。しかし、井戸さんが今まで通り事務局を引き受けていただいたことで多くの方々が集ったワークショップが開催できました。無事開催できたことを関係者で祝い打ち上げ会を行いました。その場で井戸さんはご自慢の詩吟をはじめて吟詠されました。その時の元気なお姿は幻だったのかと今でも不思議な思いがしています。しかし、詩吟を吟詠されている井戸さんを拝見し、それまで苦勞されてきた井戸さんが余生を楽しんでいる姿を確認することができ安堵させていただきました。

このように井戸さんにはNPO及び公益財団法人の事務局長を次々にお問い合わせしてもらいました。井戸さんは愚痴ひとつ言わずに引き受けてやり遂げてくれました。しかし、法人の事務局長の仕事は、行政職の方でないと難しいことが多く苦勞されたと申し訳なく思っています。理事会、評議員会の開催案内や資料作成、予算書や決算書の作成、大阪府総務部法務課などへの書類の提出など、実に多くの事務作業を強いることとなったからです。事務所に立ち寄るといつも遅くまで仕事をしていました。井戸さんが倒れそうで心配となり早く帰るように声かけさせていただきましたが、それくらいのことしかできずお詫びしたいと思っています。

井戸さんが最もやりがいがある仕事と考えていたのが大阪結核勉強会でした。結核勉強会は、分野の異なるメンバーが月一回集まりわいわいがやがや結核の勉強をする集まりです。年一回、ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップを企画し運営してきました。井戸さんのおかげで現在まで継続されています。追悼集をつくることは結核勉強会の場で決まり、寄稿の呼びかけ及び編集は結核勉強会のメンバーの三浦康代さんが引き受けてくれました。

井戸さんのあいりんでの活躍は日本が結核の中蔓延国から低蔓延国に移行した時期と一致しています。井戸さんの一生は蟬の生涯に例えることができるとふと思いました。蟬は幼虫時地下で数年間過ごし、地上に出てきます。地上に出てくると羽化して成虫となります。成虫の寿命は数週間もありませんが自由に飛び動くことができます。井戸さんは長い大阪府職員の時代を経てあいりん地区にやってきました。あいりん地区に来てから、いろんな人に出会い、囲まれ、多くの会合や活動に参加され、それまでとは見違える存在になられました。いわば、羽を得た蟬に例えられる時期ではなかったかと思えます。

本追悼集の作成に際しまして、ご賛同、ご執筆くださいました多くの関係者の皆様方、ご協力くださいましたご遺族に深く感謝申し上げます。

なお、本追悼集に掲載している写真等の肖像権につきましては各執筆者よりご本人の掲載許諾を確認しておりますが、無断転載・複製について慎んでいただきますようお願いいたします。

2025年3月吉日

Ⅱ. 追悼文リレー

井戸さんを偲ぶ思い

有 馬 和 代

元大阪市保健所保健師
太成学院大学看護学部准教授

私は、未だに井戸さんがお亡くなりになられていることが、信じられない自分があります。とても淋しい気持ちと同時に、世の中で、とても大切な人を社会から失わしてしまったのではないかと虚しさを感じています。

私からは、ご家族の皆さんや私自身の心の中にできた大きな穴と虚無感を埋めるために、大阪市の結核対策において、井戸さんとの思い出の場面や逸話について語らせていただきます。

やはり、井戸さんとご一緒させて頂いて、一番印象に残っているのは、「あいりんの訪問型 DOTS」での事です。ヘルスサポート大阪に大阪市があいりん DOTS 事業の一部を委託したことから、深く関わりを持つ機会を頂きました。

何しろ、井戸さんは、「人を大切にする人」という言葉がピッタリだと思いました。あいりん DOTS のおっちゃんが、タバコの火で問題を起こし、警察に保護された時、警察に出向き、身元引受人となり、DOTS のおっちゃんが早く警察から出られるように手続きをした。ということを経験の報告で受けました。その会議の中で井戸さんの人柄を思わせる言葉は、「〇〇さんはなあ、何回も中断したが、今回は薬をちゃんと飲んで結核を治すんや！と私に力強く語ってくれた人や。きっと最後まで薬を飲んでくれる。信じてる。タバコの火の問題はしっかり注意したけど、こんな事で内服中断させたくない。」と語った言葉が印象的で、井戸さんは、単に結核の治療ということではなく、色々な問題を抱えた DOTS のおっちゃんのニーズに耳を傾け、本人が結核を克服し、人生の意味を見出し、どう生きたいのかを決める、生き方の回復を、DOTS を通して導いているのではないかと感じたことを覚えています。

そして、その後、この DOTS のおっちゃんが治療終了した時、大阪社会医療センターの前で出会いました。その時のおっちゃんの第一声が、「あの、井なんとかという人、本当にエー人や。今も居るか？わし、色々お世話になった。火出したことで、警察から助け出してくれただけでなく、その後の住むところまで世話してくれたんや。あんなにやさしい人おらんで！また逢いたい！」という言葉でした。井戸さんは、結核を治すだけでなく、人間不信になっているおっちゃん達の心に“人のやさしさ”を感じさせることができる人とも思いました。

印象的な白い歯で、顔をくしゃくしゃにして笑う顔は、今もなお、みんなの心の中で生きている井戸さんの姿です。

井戸さんが私に「有馬さん、結核の根絶を目指して！結核にならない！結核を広めない！結核になっても安心して治療ができる環境を、患者さんを中心にして、みんなが繋がり造ることが大切や！」

という合言葉のような言葉がある講演の企画の時に語って下さいました。

この合言葉が私の結核対策に対する保健師魂に火をつけてくださったと認識しております。

井戸さん、見ててください。これから大阪を！これから日本を！きっと、結核は根絶されていく！そして、その姿を！



(写真撮影：有馬和代)

「結核の根絶を目指す仲間たち」という講演をする時に撮った写真です。(2007 年頃)



(写真撮影：有馬和代)

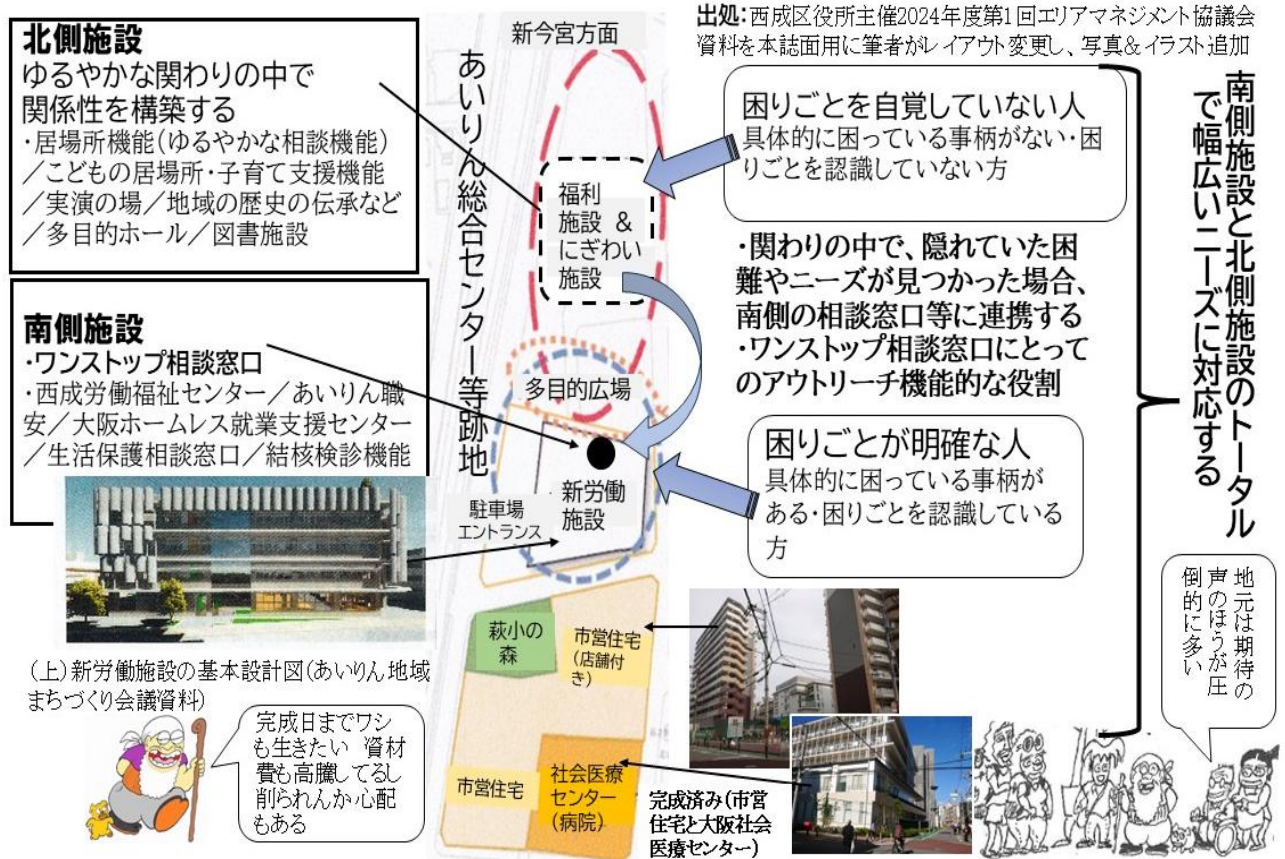
CRシステム搭載車の機能を一般の人たちに知ってもらうために井戸さんがモデルになって撮影した写真です。

(2009 年頃)

結核健診機能もここへ移転ですよ！大前進です！

ありむら 潜

釜ヶ崎のまち再生フォーラム元事務局長・漫画家



井戸さん。あなたの満面の笑顔が見えそうな報告をします。

昨年12月に、「あいりん地域まちづくり会議」の中の「就労・福祉専門部会」が久しぶりに開催されました。最近まで地域内諸団体のケア現場スタッフたちによる、ワンストップ相談窓口の在り方検討ワーキング会議が重ねられていましたので、その議論のまとめを基礎にして、部会としての合意をついに得られたのです。上の解説図を見ながら、お聞きくださいね。

◆このエリアの諸施設は全国の生活困窮者の駆け込み寺としての役割を今後も担うことになります。そして、従来以上に複雑で多様な課題を抱えた新困窮者層が来るだろうと思われます。なので、これからの時代のサービスハブ機能にふさわしい水準のワンストップ相談窓口でないといけませんよね。

◆相談者の就業能力や就業意欲には濃淡があります(グラデーション)。支援があっても就労にたどり着くにはほど遠い人もいますよね。また、ほんとうは大きな課題を抱えているのだが、自身ではそれを認識できず、周囲こそが「困っている」という、笑い話ではすまないケースも少なくないです。

◆ですから、数年にわたる議論の中で、「労働の可能性のある人の窓口」「その可能性は遠い人の(生活保護中心の)窓口」の2分割論がありました。ご存じのように、担当役所が府(労働部門)と市(福祉部門)に分かれている事情も手伝っています。

◆しかし、このたび大阪府も譲って？上の絵図のような合意に至りました。

つまり、ワンストップ相談窓口は労働施設内に設置します。しかし、北側（非労働）との分離はしません。課題を抱えている人は相談窓口には来ず、人の集まる居場所で顕在化する場合が多いからです。ある種のアウトリーチの場となります。こうして、北側と南側を一体的にトータルに活用するビジョンとなります。

井戸さん。ここからが重要です。加えて、今年2月末の労働施設検討部会で大阪市は次のように確約しました。「就労支援を軸とするワンストップ相談窓口機能を高めるために、区役所分館（旧・市立更生相談所）にある生活保護相談機能と結核検診機能も（上述の）センター等跡地に移転させる」と。井戸さんがその場におられたら、飛び上がって喜ばれたであろうと私は確信します。「日本一めんどくさい」議論をしている地域諸団体選出委員さんたちももちろん「了承！」です。この3月末に予定されている「あいりん地域まちづくり会議」（本会議）で最終承認を受けること確実です。

乾杯したいところですが、こうした報告が、井戸さんが現世におられる時に間に合わなかったことが悔やまれます。というか、逆になぜ先に逝ってしまわれたのか・・・。

遅れて悔やまれることと言えば、私が昨年6月に12年ぶりに出版した新刊『カマヤんの 日本一めんどくさい 釜ヶ崎絵日誌』（明石書店）のことです。『なにわ大賞』の準大賞も受賞したのに、お祝いの席に井戸さんがおられなかったのは残念でたまりませんでした。実にほめ上手だった井戸さんですから、どれだけこれをほめちぎってくれたか。残念（笑）。

私たちがこのまちづくりの中で提唱した「あいりん地域トータル・ケア・ネットワーク」の小型版である「あいりん地域モデルケース会議」でも井戸さんと私はいつも隣り合わせの席でしたし、帰路での2人飲み会も楽しいものでした。釜ヶ崎のスタディツアーに医療系学生たちが参加してくる時は、お互いに得意分野を分担しあいましたよね。結核や健康の問題でのイラストも頼まれたりしました。井戸さんは私より7歳年上なのに、元気いっぱい。詩吟をついに聞けなかったことは残念です。でも、1999年あたりを源流とする釜ヶ崎の地域改善やまちづくりの中で、井戸さんと共に活動できたことは大きな喜びですし、心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。



↑井戸さんに依頼されて描いた結核予防啓発イラスト集の一部（2011年）

その成果があつてか？

背中にこんな“啓發文”を書いていた労働者を発見！井戸さんにメールで送り、共に笑いこぼしました。（2011年 あいりん総合センター3階にて）→



故人をしのんで

今 田 光 三

一般財団法人 大阪防疫協会 理事長

原稿締め切り 1 日前に、まさかの追悼集作成の依頼が飛び込んできました。最初は急な依頼で断ろうかと考えていたところ、「原稿書いてもらってありがとう」と笑顔で微笑む故井戸さんの姿が、頭の中にふっと浮かびました。これには心を打たれ、「これは受けなければ」と思い立ち、今ここで思いつくまに書かせていただきます。

私が故井戸さん（ここでは親しみを込めて「彼」と呼びます）と共有した数々の思い出の中でも、私の所属する（一財）大阪防疫協会と一緒に講演会を実施したことは特に心に残っています。彼は（公財）大阪公衆衛生協会の事務局長として、いつも熱心で情熱的に活動していました。

講演会の準備中、幹事会では激しい意見交換があり、意見が割れることもありましたが、彼はその後の調整を通じて、関係者の了解を得るために尽力しました。その姿勢から私は多くを学び、困難な状況にも果敢に立ち向かう彼の姿勢には本当に感銘を受けました。

また、多くの公衆衛生業務の関係者とのふれあいの場では、彼の親しみやすい対応が際立っていました。関係者との対話を通じて深い人間関係を築き、その温かい人柄は多くの人々の心に深く残りました。

私も彼と同じ団体の理事（当時は大阪公衆衛生協会理事も兼務）として彼と共に活動する中で、いつも前向きで明るく元気な彼の姿勢を見てきました。彼のサポートは私にとって本当に大きな支えとなり、困難な状況にも謙虚に対応する姿勢から学ぶべきことがたくさんありました。

さらに、仕事を通じて共に活動する中で、共通の理解者である林田大阪大学名誉教授との思い出も忘れられません。特に大阪大学 OUKA に（一財）大阪防疫協会の機関誌掲載をお願いした際、林田教授の熱心な協力に感謝しています。3 人での信頼関係をもとに機関誌掲載に向けて取り組んでいた姿勢には本当に感動しました。

彼の存在が私たちに与えた影響は計り知れず、その功績は永遠に私たちの心に刻まれています。心からの感謝の気持ちとともに、故井戸さんのご冥福をお祈りします。



講演会の後、左から井戸武實大阪公衆衛生協会事務局長、高野正子大阪公衆衛生協会会長、
關淳一元大阪市長、今田光三大阪防疫協会理事長（写真提供）

(2019年1月15日 於國民會館住友生命ビル)

井戸さんと西成労働福祉センターの関わり

海 老 一 郎

元公益財団法人西成労働福祉センター

「いやあ～、嬉しいわよ」と蔓延の笑顔で見学に連れて来られた学生さんたちと写真を撮る姿をいつまでも忘れることができません。

私と井戸さんの出会いは、逢坂先生たちと 2006 年に NPO ヘルスサポート大阪（HESO）を立ち上げられた時からでした。その足跡は今も地域の日雇労働者の皆さんに読まれている西成労働福祉センターの広報誌『センターだより』に残っています。

No.376 号（2006 年 9 月 15 日発行）は、「初の飯場健診実施」の特集でした。建設作業員宿舎（飯場）が多い大正区に HESO の活動として検診車を持ち込んでもらい、健診を実施しました。

私たち職員も事業所を訪問し受診を呼びかけました。センターとしても初めての試みであり、

② 高齢者特別清掃従事者より高血圧の人が多い。

②結核の既往症後や再度レントゲン受診が求められる要注意者がいた。

③病院の受診が必要でも保険証がなくて診てもらえない。ということがわかりました。

No.434（2011 年 7 月 15 日発行）では、『盆と正月には無料の健診を！釜ヶ崎から結核をなくそう！』のテーマに「結核という病気についてのあらまし」と「釜ヶ崎の結核の現状」そして「どうしたら結核がなくせるか」また「かからないためにはどうしたらよいか」ということをわかりやすく語っていただきました。

No.474（2014 年 11 月 15 日発行）の『結核をなくそう』の特集では、大阪公衆衛生協会に移りましたが、釜ヶ崎に結核が多い理由を「感染の連鎖」という言葉を使い、「釜ヶ崎は狭い空間が多いため、大勢の人が集まっている場所に患者がいると、咳やくしゃみで感染する。結核を少しでも早く発見するために、健診を半年に 1 回は受けてほしい」と強く訴えています。

そして No.500（2017 年 1 月 1 日発行）の 500 号記念のメッセージで、こんなことを話されています。「『HESO』の活動のなかで、一番印象に残っているのはセンターの待合室をお借りして実施した肺の年齢を測る検査（スパイロメーター使用）に多くの方が参加してくださったことです。地域にとって結核をはじめとする健康問題は重要な課題であると思います。」と述べられていました。

一方で井戸さんにはセンターにおいて、日雇労働者を雇用する事業所に対しても、「労働者の健康管理」という視点からセンターの事業に協力してもらいました。

2019 年 11 月 26 日に開催した事業所座談会に講師として来ていただき、業者の方々に「宿舎で結核が発生しないように予防する方法」や「労働者が結核になったらどうすればよいか」などの話をされました。

この他、日常的な活動として井戸さんは、公衆衛生を学ぶ方々に地域の生の実態を見てもらおうと多くの人たちへの研修に携わっていました。そんな井戸さんから「海老さん、今度センターへ見学さ

せてもらいに行くからね」と声をかけてもらった時、私は、これまでのセンターの事業が井戸さんご自身の結核対策への思いとつながっていると思いました。

そして、私もセンターを退職後、大学で公衆衛生を学ぶ方たちに「釜ヶ崎の日雇労働の失業と貧困が健康に及ぼす影響」について井戸さんからいただいたたくさんの宝物を伝えていく活動を続けていきたいと思います。

センターだより

第376号
2006年9月15日発行
(財)西成労働福祉センター
大阪市西成区秋之茶屋 1-3-44
・06-6641-0131

初の 飯場健診 実施



しょうぎあいしや
将棋愛好者のつどい

日時：10月23日(月)
12:00～

場所：新今宮文庫
内容：クラス別
トーナメント戦
指導：森 信雄 六段
受付：10/10(火)より
福祉係窓口にて受付。
先着 50 名

・画期的な試みでした

8月31日(木)、9月1日(金)、9月2日(土)の三日間、大正区の三軒家地区に存在する宿舍労働者を対象に健診が実施されました。残念ながら仕事が忙しく予定した健診者数を下回る 29 名の受診となりましたが、実施されたこと自体は画期的なことでした。

・きっかけ

釜ヶ崎(あいりん)地区の日雇労働者の結核罹患率は現在もおおむね高い水準を維持し続けています。カンボジアについて世界二位との不名誉な数字すらあるそうです。そこで数年前から高齢者清掃事業の登録労働者への健診を行ってきたNPOヘルスサポート大阪(HESO)が次に注目したのは大阪市内の宿舍に居住する労働者でした。同時に、数年前より元請企業から派遣労働者の健康診断書を求められ高額な健診費を負担してきた事業所にとっても HESO の申し出は渡りに船でした。HESO の活動資金は今年度文部科学省より支給される科学研究費によっており、事業主の負担が少額ですむ利点もありました。

・結果は・・・

実施した HESO の医師団からは、①は高齢者清掃に従事する高齢労働者よりも高血圧の労働者が多い。②は結核の既往症後や再度のレントゲン受診が求められる要注意労働者がいたこと。③病院で診てもらうにしても健康保険証が無く受診できないことなどが明らかになったと報告されています。

・これからも

この結果を基に HESO の医師団はますます宿舍労働者への健診の必要性を痛感し、来年度以降も引き続き科学研究費を受給できる準備をはじめたと聞かれています。.....

相対的に高齢化が進む宿舍労働者の健康管理は、予防医療の観点からも緊急の課題です。体調に少しでも不安を感じた方はセンター周辺で毎週火曜日に実施されているCR車(レントゲン写真をその場で読み取ることができる)による健診を受診してください。



| 技能講習事業の科目と日程 | | | |
|--|----------|------------|--|
| 講習科目 | 受付・選考日 | 人数 | 講習日程 |
| 玉 掛 <small>3日間</small> | 9月19日(火) | 30人 | 10月2日(月)～4日(水) |
| けん引自動車運転免許 <small>大特免許所持者・45才まで通所 8日間</small> | 9月21日(木) | 10人 10人 | 1組 10月2日(月)～29日(日) 2組 11月6日(月)～12月3日(日) |
| 車両系(整地ほか用) <small>大特免許所持者以外 5日間</small> | 9月26日(火) | 25人 | 10月11日(水)～15日(日) |
| 締固め用機械 <small>特別教育・2日間</small> | 9月28日(木) | 15人 | 10月10日(火)～11日(水) |
| クレーン(荷重5t未満) | 10月3日(火) | 15人 | 10月20日(金)～21日(土) |



井戸さん ありがとう

逢坂 隆子

元四天王寺国際仏教大学大学院教授
元 NPO ヘルスサポート大阪理事
NPO 訪問看護ステーションひなた理事長

井戸武實様の突然のご逝去、ご家族の皆様はどんなにか驚かれ、寂しくなられたことでしょう。

私は約 20 年間、大阪府の保健所に勤務していました。井戸さんと一緒に保健所で働いたことはありませんが、井戸様の仕事にける熱意についてのうわさは聞いていました。

2000 年頃、大阪市内にはホームレスが 1 万人いるといわれ、特に釜ヶ崎では、失業した日雇い労働者が大勢野宿していました。大阪府監察医事務所と共同で、2001 年 1 年間の大阪市内の野宿者と簡易宿泊所投宿中の者の全死亡者 294 例について調査しました。死亡時平均年齢は 56.2 歳と若く、中でも結核による死亡が極めて多いことがわかりました。

そこで厚生労働科学研究費により、釜ヶ崎のホームレスを対象に「生活と健康の調査」を実施したところ、結核検診受診者のうち、2%弱が要医療と判明しました。要医療結核患者が受療困難だとしてあげる様々な問題（犬や猫を飼っている。自分の自転車や荷物を入院中どうするか等）を何らかの形で解決し、要医療結核患者をすべて治療に結びつけ、1 年間の入院期間中も季節に合った衣類を持って見舞いに行くなどして、全ての要医療結核患者の入院治療を全員終了させることができました。

その頃、兵庫県で、住民検診に C R 結核検診車（兵庫県健康財団が運営。胸部 X 線撮影後、すぐその場で診断可能）を使用していることを知り、見学に行きました。診療放射線技師の井戸さんならよくわかるだろうと思い、同行をお願いしました。

当時、釜ヶ崎では、大阪市が月 1 回午前中 10～12 時にあいりん総合センター 1 階で胸部レントゲン検診車による結核検診を実施、検診後数日たってから、あいりん総合センターの壁に「精密検診を要する者の受診番号」を紙に書いて貼りだす方式がとられていました。

2005 年 9 月、兵庫県健康財団のご好意により、釜ヶ崎の三角公園横で C R 結核検診車によるホームレス検診を、大阪で初めて実施することができました。公園で炊き出しをしている支援団体、ふるさとの家、公園横のシェルター管理者などに協力してもらい、西成労働福祉センター、大阪市保健所、大阪市立更生相談所、大阪社会医療センターの職員なども見にきました。

私たちは、C R 検診車を釜ヶ崎のホームレス結核検診で使えたらどんなにいいだろうと思い、保健所を所轄する部長に直接お会いし、C R 結核検診車の購入をお願いしたところ、「それはいい。すぐ購入しよう。」ということになりました。

2006 年 4 月から、大阪市は釜ヶ崎で C R 結核検診車の新規運用を開始し、検診回数は月 1 回から月 3 回に増えました。同時に大阪市から釜ヶ崎の結核対策に協力してほしいという申し出があったので、その受け皿として NPO 法人 HEALTH SUPPORT OSAKA (NPO HESO) を設立しました。HESO の事務局長は、ちょうど定年退職される井戸武實さんをお願いしようと、皆の意見が一致し、

逢坂が井戸さん説得を担当することになりました。当時、井戸さんが勤務しておられた大阪府藤井寺保健所に行き、5～6時間も説得を続けました。すでに定年後の勤務先も決まっているのでは、と思いつつながら、無理を押してお願いしました。

NPO HESO の事務局長として井戸さんは、釜ヶ崎の結核対策（①C R結核検診車にかかわること：検診会場の受けつけ、発見された結核患者の治療開始の説得 ②釜ヶ崎の訪問型 DOTS など）の中心となって活躍してくださいました。元大阪府保健所の保健師さんたちも協力してくださいました。

NPO HESO の事務所は、釜ヶ崎支援機構のご厚意により、支援機構事務所前の建物 2 階を使わせてもらいました。皆が土足で事務所に入ってくるので、ずいぶん部屋が汚れたと思いますが、井戸さんはいつもきれいに掃除してくださいました。

井戸さんをはじめとする NPO HESO の活動の結果、釜ヶ崎の結核罹患率が半減しました。しかし、その後の方針が NPO HESO と大阪市保健所との間で大きくくいちがったため、受託を終了しました。

今でも、釜ヶ崎の日雇い労働者やホームレス支援者たちは、井戸武實さんをよく覚えていて、「あんなことをしてくれた。こんなことも教えてくれた。」と言っています。

（NPO 訪問看護ステーションひなたの事務所は釜ヶ崎の中にあり、元日雇い労働者や元ホームレスの生活保護受給者を対象に訪問看護サービスをしています。）

いつも笑顔だった井戸さんへ

河 崎 洋 充

元西成市民館館長
NPO 法人サポーターハウス連絡協議会事務局長
社会福祉法人 光徳寺善隣館中津学園

1999 年当時、大阪府下には、2 万人近い路上生活者（ホームレスの定義の一つ）がいました。それらの人々を、何らかの方法で、救済できないかと、釜ヶ崎のまち再生フォーラム（事務局長ありむら潜氏）の場で、仲間の皆さんと話し合いを重ねていました。

私と簡易ホテル（一泊貸しのホテル）経営者の宮地泰子さんとで、今の NPO 法人サポーターハウス連絡協議会（以下、サポ協）の前身を立ち上げたのは、2001 年 6 月のことでした。

その頃、釜ヶ崎はフィリピンのマニラのスラムより、結核罹患率が、高いと言われていました。

大阪市保健局（当時）が、DOTS 事業に本格的に取り組み始めたのもこのころです。その事業にサポ協が、協力していくことを運営委員会で決めました。今でも、毎年、活動目的の一つとして、DOTS に協力することを掲げています。

具体的には、「誕生月健診」と称して、毎月一回、誕生月のオジサンたちを会員の各館のスタッフが、引率して検診車（レントゲン車）まで連れて行くのです。これは、現在も続いています。

そこに、藤井寺保健所の診療放射線技師を定年退職された井戸さんが、NPO 法人「HESO」（HEALTH SUPPORT OSAKA）の事務局長として、釜ヶ崎デビューされたのです。サポーターハウス連絡協議会ははじめ、地域の支援団体を巻き込んで、釜ヶ崎から、結核罹患者を撲滅させる、あるいは激減させるという大きな目標を掲げて、活動を開始されました。前述のレントゲン検診車の運行計画と情報宣伝をして、受診者数を増やすことでした。これに、サポ協の誕生月健診を連動させて結核予防体制の枠組みを作りあげていったのです。

5, 6 年経った頃でしょうか、井戸さんが釜ヶ崎の「HESO」を離れられて、天満橋と谷町 4 丁目の間にある大阪府の外郭団体である「大阪公衆衛生協会」の事務局長として、第 3 の人生をスタートされたのは。

その頃、私は大阪法務局の人権擁護委員を委嘱されていました。三カ月に一度、法務局に行って電話で相談を受けるのです。

大阪公衆衛生協会の入るビルは、法務局への途中にありました。帰りに井戸さんの新しい職場に寄って、ドアを開けると井戸さんの嬉しそうな顔とお声を今も思い出します。人懐っこい柔和な表情が、忘れられません。お茶を頂きながら、釜ヶ崎の話、結核の話とアッという間に 30 分はすぐ経ちました。

2 年間ぐらいそういうことが続けていました。が、突然、大阪公衆衛生協会が、閉鎖になり井戸さんとお会いすることが、出来なくなりました。そこへ、今回の訃報です。悲しみがまた、去来しました。ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

あいりん地域と結核を愛された井戸さん

工藤新三

大阪市西成区役所（西成区保健福祉センター分館）
社会福祉法人大阪社会医療センター附属病院

井戸さんの急逝には本当に驚き、なかなか信じられませんでした。体力維持のための運動などもよくされ、非常にお元気で結核勉強会の中心になりお世話をしていただきました。勉強会が天満にありました大阪公衆衛生協会の事務室で行われていました頃は毎回の会場準備をしてくださいました。出席者の席を作り、プロジェクターの準備、それにその日の資料をそろえてくださったのを思い出します。井戸さんとの出会いは私が大阪社会医療センターに勤務を始めました2014年以降の短い期間でした。それ以前の私の西成との関わりは、現在も西成区役所分館で行われています結核検診のレントゲン写真の読影に1994年頃から週1回、市大医学部から通っていました。しかし、レントゲンの読影のみで保健所の方や地域の方々との繋がりはほとんどありませんでした。それ以前の西成との関わりでは看護師で西成の労働者のために働かれていた入佐明美さんを支える会に当初から参加していました。

井戸さんとは結核勉強会はもとより、大阪社会医療センターを通しての繋がりが中心でした。あいりんには結核やその背景にあります貧困問題の事などで地域の見学に多くの団体や個人の方が来られました。そのような人々の案内役をされたのが井戸さんでした。参加者の名札を作り紹介してくださいました。そして、あいりん見学の一つに社会医療センターも加えてくださいました。センターであいりんの紹介や結核の状況、大阪社会医療センターの歴史、無料低額診療のことなどについてスライドを用いて説明し話し合うことができました。井戸さんは診療放射線技師として結核検診に従事される中で結核患者と出会われ、その背景にある貧困、特に結核高蔓延地域であるあいりん地域において熱心に貧しさや結核患者のために働かれました。あいりんのことや結核のことで共に仕事ができたと本当に感謝しています。

井戸さんの娘さんであり保健師の山森さんとは分館に勤務しておられた頃にお世話になりました。特に、山森さんが分館であいりん地域の結核の仕事をされたことを井戸さんは非常に喜んでおられました。笑顔で紹介されたのを覚えています。

また、羽曳野病院（現；大阪はびきの医療センター）に勤め日本の結核医療に大きな功績を残された亀田和彦先生のお世話をよくされました。私自身は羽曳野病院時代を含め先生には多くのことを教えていただきました。井戸さんと亀田先生とのつながりは詳しくは知りませんが、羽曳野病院や藤井寺の保健所で亀田先生と一緒に結核の仕事をされたのではないかと思います。亀田先生が体調を崩され自宅で療養されていた時に、二人でお寿司をもって住吉のお宅までお見舞いに行きました。共に結核の仕事を長くされたことで深いつながりがあったのでしょう、その繋がりを非常に大事にされ、亀田先生を長くお世話をされました。

井戸さんとはそんなに年齢が離れていませんので、そう遠くない時期にお会いできるでしょう。そ

の時にはその後の大阪、特にあいりん地域のこと、結核の状況をお話できればと思います。



井戸さんは社会医療センターに多くの方々を連れてきてくださり紹介してくださいました。名札の準備などもしていただき、あいりんの説明や結核の状況、社会医療センターの役割について話し合うことができました。これは地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所と山形県衛生研究所の皆さんが見学に来られた時の写真です。（写真提供：工藤新三）

工藤新三（大阪社会医療センター附属病院 副院長 内科）（写真前列右から2番目）写真提供、

山田勉氏（大阪社会医療センター附属病院 保健主幹 臨床検査室）（前列右）

山本香織氏（地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所主任研究員）（後列中央）

於大阪社会医療センター附属病院（2019年2月）

井戸さん、お疲れさまでした。昨年、藤本敬三さんが受診時に訃報を報告してくださいました。その受け止め方は、未だに整理し切れていないというのが正直なところです。

2003年ホームレス支援の医療公衆衛生関係者の取り組みが本格化するなかで、逢坂隆子先生らの肝いりでNPO HEALTH SUPPORT OSAKA（略称NPO HESO）が立ち上げられました。アウトリーチ型の支援を続ける現場兼任の西森琢さんが事務局機能を兼任されていましたが、現場の要請にさらに応えるため、井戸さんが参加されました。その後、事務局の機能の整備と充実のために井戸さんは、強いられる貧困の象徴としての結核という病いに対する熱い思いを抱えながら、軽いフットワークで誰彼いわずに関係を築き上げて行きました。種々の事情で、事務局の設置場所を検討し、くろかわ診療所の2階を事務局のすまいとしました。その準備には奥様も協力してくださり、その後は困っている人、医療福祉に関わる現場支援を行う人たち、問題に興味や関心を持つ学生などが、彼を求めて集まり、相談やフィールドワークの起点として活躍されていました。多くの人たちが、いろいろな場所に参加できる舞台作りに奔走しておられました。

文字通り西成という地域での社会・医療問題の解決を模索し、活動している人たちのコーディネーターとして域内を走り回っていました。またそれらの記録をきちんと整理する作業は群を抜いており、周囲の厚い信頼を得ていました。笑顔を絶やさず、遅くまで2階で仕事をしている姿は今も眼に焼き付いています。時には毎日診療実務が終わってからいろいろお話をしました。いつも診療所でスタッフを抱えている私を慰労してくださいました。そこにはもっと自分の理想とするものを、より強固な立場に持ち進めていきたいという彼の決意とも羨望とも言える強い思いを感じていました。

ここから地域を愛し、そのために全身全霊を打ち込みたい、自分自身の歩みを止めてはならないという信念は揺るぎないものでした。あらゆる機会をとらえ、今自分にできることは何か？自分の立ち位置で使える武器はなにか？それはなんであれ、必要とする人には提供するという態度は一貫していました。おそらく、いろいろなところを走り回る毎日は、肉体的にはとても負担であったことは想像に難くありません。

井戸さんが、2023年12月に久々に診療所に訪れたとき、私は彼に芍薬甘草湯を処方していました。井戸さんは、診療所の処置室に来て、驚くべき体の柔軟性をスタッフに笑いながら披露され、毎日時間を見つけては、自宅の階段を何往復もして下半身を鍛えているとおっしゃっていました。おそらくフィールドに若者たちを案内したり、調整作業のため走り回りつづけることができるように、必死で健康管理をしていたのだと思います。力持ちとの態度を堅持されていました。

私ども診療所に、暴風雨とも言える難問が襲いかかったとき、一度、難波の居酒屋で、診療所の立ち上げから看護師として従事してくれていた江頭真由美看護師（当時は訪問看護師）と二人で私の苦境の中での気持ちを吐露し、やさしく傾聴しながら、慰めて下さいました。救われました。その後も、いろいろ相談に乗っていただいたり、協力していただきました。暴風雨はやがて鎮静しました。そうこうするうちにやがて、NPO HESO の事務局は事実上解散ということになり、井戸さんは天満にある大阪公衆衛生協会の事務局に移行されました。

天満の事務局には、よく伺いました。いつも好物のかりんとう（確か高知県産だったように記憶していますが）をいただきながら、仕事の話やアグレッシブにしておられた SNS での情報発信の状況、ネパールの女性の医学部進学への支援のお話などをうれしそうに話されていました。一時、私も一部関係させていただいたストップ結核パートナーシップに関連する結核勉強会の資料作りなども労をいとわず協力していただきました。忙しい診療実務の中では、なかなか一人ではできない作業でしたが、時間を惜しまず遅くまで一緒に作業をした覚えがあります。

それだけの仕事量をこなし、実績を積み重ねても、彼は決して前には出る人柄ではありませんでした。あくまでも自分を周囲の活動が円滑に進むことができるための、静かな縁の下での力持ちでした。調整・コーディネートするという作業は、周囲への配慮と繊細な心遣いと、実務においては最もエネルギーのいることだと改めて感じています。診療所の 2 階で、大阪府の関連部門から自分を表彰していると言われているが、自分がそれを受けていいと思いますか？と遠慮がちに私に尋ねてくれました。私は当然のことだと答えました。と同時に、人前に出ようとしない井戸さんの実績をきちんと見ている人たちがいることに感心しました。

私はまだまだ日常診療実務に追われ、ゆっくり回想できる余裕がない中での、乱筆乱文ですが、井戸武實さんの追悼文として以上を述べさせていただきました。

井戸武實さんを偲ぶ

黒田 研二

西九州大学健康福祉学部長

大阪から離れて、佐賀県にある西九州大学に赴任してもうすぐ丸5年になります。井戸さんに長いことお会いしていなかった。井戸さんの訃報に接したのは、2024年8月25日に久留米大学医学部で開催された第65回日本社会医学会総会の席上でした。1年間にお亡くなりになった会員の名前が読み上げられ、参加者皆で黙祷をささげたのですが、その中に井戸さんのお名前があり、たいへん驚きました。そのあと高鳥毛敏雄さんから、心不全で急逝されたことをお聞きしました。井戸さんは、2012年7月に関西大学高槻キャンパスで高鳥毛さんを大会長として開催された第53回日本社会医学会総会の企画委員会事務局として大会を盛会に導いた功績で、名誉会員となっておられました。

井戸さんに初めてお会いしたのは、特定非営利活動法人 HEALTH SUPPORT OSAKA (NPO 法人 HESO) の事務局長に着任したときでした。2007年のことです。NPO 法人 HESO の法人認可は2006年10月で、あいりん地区の労働者やホームレス者の健康支援、とくに結核の検診活動を進めるために設立したものでした。代表理事は矢内純吉先生で、逢坂隆子さんや高鳥毛さん、山本繁さんを中心に理事を構成し、私もその中に参加しました。発足後1年ほどで井戸さんに事務局長を担っていただくことになりました。井戸さんは大阪府に40年勤務され定年を迎えられたところでした。

NPO 法人 HESO の設立の背景には、あいりん地区労働者への健康支援のそれまでの取組があります。2000年に大阪市内で死亡したホームレスの人々の変死体の調査を、逢坂さんを中心に、大阪府監察医事務所に勤務していた坂井芳夫さんの協力を得て実施した結果、年間死亡者数213例、死亡時平均年齢56.2歳、その死因は、病死172例、自殺47例、他殺6例、餓死8例と凍死12例を含む不慮の外因死43例。病死のうち29例は結核に関連する死亡だったことが明らかになります。2003年度から2005年度の3年間、私が主任研究者となり厚生労働科学研究補助金を受けて、大阪市高齢者特別就労（清掃）事業従事者の健康診査を実施しました。対象は主にあいりん地区の55歳以上のホームレスの人々です。また、2004年度から2006年度の3年間、逢坂さんが主任研究者となり、文部省科学研究費補助金を受けて、ホームレス者の健康・生活実態の解明と自立支援方策の研究に取り組みました。その過程で、2006年度から大阪市がCR結核検診車を運用することになりました。そこで、前述のようにNPO 法人 HESO を設立し、大阪市のホームレス結核対策の一部を受託して、大阪市と協働してあいりん地区を中心とする結核対策・健康支援活動を進めることになりました。

井戸さんがNPO 法人 HESO の事務局となり、次のようなさまざまな取組を展開することになります。あいりん地域を中心に日雇い労働者やホームレスの方々のレントゲンを毎年4千人ぐらい撮影し、結核の患者さんが発見されれば、すべての人に井戸さんは面談し、結核病床を持つ病院治療に結びつけます。入院後も連絡をとり、病院への訪問も行います。また、排菌してない結核患者さんが居宅に戻られたときに、訪問型DOTS、HESOに登録した保健師、看護師が当該者の患者さんの居宅

（3畳1間のアパートが多い）に出向いて完全服薬を支援します。

あいりん地区のホームレスの人々は井戸さんの存在を皆、知っており、HESO では研修生を受け入れて、その支援の現状を学んでもらいました。研修生は阪大医学生であったり、看護師やソーシャルワーカーを目指す学生であったり。全国の医学生や、国際支援をやっている人たちや海外の大学からも研修に来られ、井戸さんはプログラムを組んで研修を受け入れていました。

また、2010 年度から3 年間は、独立行政法人福祉医療機構の助成事業を活用し、結核の治療が終わった高齢者の人々の居場所づくり、交流の場作りも行いました。こうした取組を通じて、井戸さんは多くのあいりん地区の人々から慕われていました。

NPO 法人 HESO は、大阪市から受託事業を終えて 2013 年に解散することになりました。井戸さんは、その後、公益法人化した大阪公衆衛生協会の事務局長に異動されます。私が井戸さんに最後にお会いしたのは、2020 年度の第 61 回日本社会医学会総会の企画委員会を大阪公衆衛生協会の事務室で開催したときでした。この時の学会は COVIT-19 のパンデミックと重なり、オンライン開催となりました。

公衆衛生とくに結核予防の専門家として活躍され、堅実な実務家として事業に取り組む組織の事務局を担い、さまざまな人々とつながり、その中で若い人たちの教育にも従事し、人々を感化し、ホームレスのおじさんはじめ多くの人々に慕われた井戸さんに、ここからの哀悼の意をささげます。

井戸さんと同じ世代を生きてきた仲間として

清水 多 實 子

元大阪府保健師
元白鳳女子短期大学専攻科地域看護学専攻教授

今回、故井戸氏の追悼文の依頼を受け、初めてお亡くなりになったことを知りとても悲しい気持ちでいっぱいです。

いつものようにお元気に過ごされていると思っていたもので、お聞きしたときは信じられませんでした。何よりもあの優しいお顔、笑顔、そして語り口を思い出します。

井戸さんとは、同じ世代を生きてきた仲間でした。私たちが現職の頃は、2004年(平成16年)支所が廃止されるまで、大阪府の保健所は22保健所7支所の時代でした。

何しろ大所帯の組織の中で、井戸さんと同じ職場になったことは確か1回だったと思いますが、その後いろいろなところで顔を合わせることが多くあり、何かとお世話になりました。

退職後、白鳳女子短期大学専攻科地域看護学専攻で後輩の教育に携わることになり、当時愛隣地域でご活躍されていた井戸氏に「地域を見る」「地域を知る」「住民の生活を知る」など、公衆衛生看護の基礎を学ばせるためにもお力添えをいただきました。

井戸氏の計らいで逢坂先生にもご講義をしていただき、その後実際に愛隣地域での実習においても、井戸氏のご協力のもと地域の実態を見てご講義をしていただきました。労働者の指導をされていた方とのつながりもしていただき、学生のみならず、私たち教員も改めて多くのことを学ばせていただきました。

教員生活を終えてからも、公衆衛生協会のイベント案内をいただき、私的には年賀状のやり取りを一昨年までしており、いつもお元気なお姿を、写真を通して見ておりました。

本当に亡くなられたこと、いまだに信じられない、、

「やあ、清水さん元気にしてる？」って、谷町あたりでお会いできるような気持ちです。

最後になりましたが、心より感謝申し上げご冥福をお祈りいたします。

井戸さんの思い出

下 内 昭

公益財団法人結核予防会ネパール事務所・結核研究所

一番思い出深いのは、私が大阪市に赴任した 2002 年には、大阪市保健所が、西成区あいりんでのホームレス対策を強化しており、その頃に HESO が創設され、井戸さんが事務局長をされていた時である。当時は、釜ヶ崎支援機構が運営するシェルターの横のプレハブ事務所の二階に、HESO の事務局があり、私もよく訪ねた。私も厚生労働省からの研究費で高齢者特別清掃事業に従事する人たち（特掃従事者）の健康を支援する目的でスタッフを一人雇うことができ、彼の仕事を通して、HESO との緊密な連携ができた。さらに、最も大きな動きは高鳥毛先生、黒田先生、逢坂先生らが、特掃従事者の結核検診を実施するだけでなく、あいりん地域では定期的に結核検診を実施していたが、そこに 2006 年にデジタル撮影 X 線機器を搭載する検診バスの導入に大きな役割を果たして下さったことである。その後も、種々な面から、あいりん地域でのホームレスや生活保護受給者からの患者発見と患者支援に関する対策が改善されていったが、行政だけでは限界があり、釜ヶ崎支援機構をはじめとする、いろいろな NGO の支援・協力なしでは、どの対策も進めるのは難しかった。その中でも、各 NGO などとの調整と下支えをして下さったのが、HESO であり、毎日、シェルター横の事務所におられ、特掃従事者のおっちゃん達のお世話をしていたのが井戸事務局長である。これは、皆さんご存じのことであるが、井戸さんは、いつも明るく、前向きで、どんな困難な事があっても、決して弱気なことは言わず、いつも、良くなっていくと信じておられた。その明るさに私も随分助けられた。特に思い出すのは、多剤耐性結核患者で治療に非協力的な人がおられたが、井戸さんは、マスクをつけずにその人の家にいったり、車で待ち合わせをして、説得して下さったり、やがてはその人も治療を再開することができた。私たちは、外であれば、風が吹いているので、結核患者とは少し離れて話せば、感染するおそれはないと健康教育をしていたが、なかなか、多剤耐性患者に何度も会いに行くという熱心さはない。やはり、井戸さんの、その素直な熱心さが患者さんにも伝わり、薬を再び飲むようになってくれたのではないかと感心する。

また、HESO の事務局長が終わり、大阪公衆衛生協会の事務局長になってからも、あいりんの結核対策などを見学に来る方々を随分お世話して下さった。私がいりん分館に勤めている時に、よくあったコースは、大阪社会医療センターで工藤先生の臨床の講義を聞き、あいりんシェルターの見学、私が毎日、結核検診の画像の読影をしていた西成区保健福祉センター（あいりん）分館、その他の NGO の紹介、また、三角公園付近散策などのコースもあった。それを、疲れもせず、どなたからの希望があっても、丁寧にプログラムを作成し、区役所に対して、依頼状を作成して送付し、研修を受ける人の名札を作成し、講義では講義資料を作成し、最後に記念写真を取り、皆さんに配って下さった。それを、一年間に何回あっても、毎回、同じように熱心に計画し、暑い中でも付き添い、お世話をしてくださった。その中には、結核研究所のアジア、アフリカの医療従事者の国際研修も何回かあ

り、研究所のスタッフ、JICAの担当者と共に、あいりんの中を回って下さった。いろんな調整で分館に電話がかかってくる時はいつも大きな声で挨拶をしてくださり、簡潔に用事を伝えてくださる。時に、サプライズ訪問に来られる時にはいつも、何かお菓子を持ってきて、分館のスタッフに気を遣って下さった。

勉強会の事務局のほかに、私が存じ上げる、もう一つの思い出は、亀田先生をよくお世話しておられたことである。と言っても、私自身は、亀田先生と日常的にお会いしたのは、大阪市の結核診査協議会委員長を終わられ、大阪自彊館診療所に勤めておられた最後の時に、私も、その診療所に金曜日に外来診療をさせていただいた時だけのことである。亀田先生は、はじめはお元気であったが、少しずつ身体が弱っていかれ、歩けなくなった時に、井戸さんに誘われて、お見舞いに行ったことを思い出す。亀田先生がお元気な時は、結核病学会では、よく最前列に亀田先生のとりに井戸さんが座っておられてお世話をしておられた。それは、ある意味、当然のように感じていた。しかし、身体が弱くなられた時こそ、気を遣って、よく会いに行かれて元気づけられていた、その優しさを本当にえらいと感じた。

このように私が井戸さんにお会いしたのは、診療放射線技師としての専門の仕事から、事務局という縁の下の仕事に重点を移してから時期であるが、他の人々を支援する、そのために面倒な細かい仕事を限りなく続けることを、疲れを知らず続けられておられたのではないかと。私も、また、今、ネパールで仕事をする時、苦勞する時も楽しくできなければ意味がないと、井戸さんを思い出す時に、感じるこの頃である。



私の近況：2022年4月からネパールで日本では常識であったX線による集団結核検診の実施方法をまずカトマンズ市で確立し、次に全国に広げるプロジェクトに関わっています。ネパールではいろいろな事情でなかなか仕事が捗らないですが、同僚とともに、忍耐し、諦めないで、特に貧しい人々の結核を診断し、治療が行き届くよう、毎日頑張っています。



「Strengthening Urban TB Program in Kathmandu Metropolitan City by Active Case Finding.」 「積極的な患者発見によるカトマンズ市の都市結核対策プログラムの強化」 結核予防会のネパールにおける結核検診活動広報ビデオ(英語版・約20分)より抜粋。制作：公益財団法人 日本結核予防会(JATA) & 一般社団法人 日本ネパール健康・結核研究会(JANTRA) <https://youtu.be/GxZj-vdOzXI>

公衆衛生を学ぶ学生として井戸さんに感謝を込めて

白 井 こ こ ろ

大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座・公衆衛生学 特任准教授

井戸さんに初めてお会いしたのは、大阪大学の医学部公衆衛生学講座で博士課程の大学院生として、特掃検診に参加させていただいた機会でした。当時、高鳥毛先生、逢坂先生、黒田先生方にご指導いただき、学生として西成の特別清掃事業や結核健診事業のお手伝いに参加させていただき、HESO（HEALTH SUPPORT OSAKA）の活動にも少しだけ関わらせていただきました。お世話になるばかりでしたが、医療・保健・福祉の連携を学び、健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health）の視点から、高齢者の健康長寿や健康格差について研究したいと考えていた私には、まさに公衆衛生制度・活動の原点を学ばせて頂く思いでした。

当時、医師が考える予防医学の視点と、保健師が考える健康教育や生活指導の視点、社会福祉職が考える生活支援の視点など、異なる専門職の視点や連携体制に対する考え方の違いに悩んでいた私に、井戸さんは思い悩んで立ち止まるより、活動して歩いていった後ろに、道ができていくことを、いつもの満面の笑顔でカラリと示してくださいました。本当の意味で、対象者や患者を中心にした医療保健福祉をはじめとした多職種の連携や、民間組織と行政の連携の在り方など、井戸さんの活動やその調整力から学ばせて頂くことは多く、心より感謝しています。

阪大公衆衛生学講座を卒業後、教員としても大阪大学や琉球大学の医学生、看護学生、福祉専攻の学生をはじめ、多くの学生の研修の受け入れでも、井戸さんには本当にお世話になりました。海外からも、ハーバード大学や英国の UCL 大学など、共同研究者の来訪や研修の機会には、よく井戸さんにご相談して助けていただきました。井戸さんにコーディネートいただき、大阪社会医療センター、大阪市西成区役所あいりん分館、大阪府西成労働福祉センター等での研修、特別清掃事業や大阪自彊館での DOTS の見学、禁酒の館、緊急夜間宿泊所、サポーターハウス等々、様々な機関や場所で学生、研修生等の受け入れをしていただきました。関係者の先生方、皆様に感謝するとともに、どんな時も明るくポジティブな回答を下さり、きめ細やかに各所調整の上受け入れて下さった井戸さんに、感謝してもしきれません。

2024 年 2 月に、大阪大学公衆衛生学講座を高鳥毛先生と一緒にご来訪下さった後に、別途ご連絡をいただき久しぶりに 2 人でお話したのが、直接お会いした最後の機会になってしまいました。ご趣味のことや、これからの活動のことなど、やるべきことが山のようにあって毎日じっとしている暇がないと、笑顔でお話されていた姿が頭から離れません。折に触れ井戸さんの活動の成果や、掲載記事などをマメにお送りいただき、いつも誠実できめ細やかなご対応に、学ばせて頂いていました。阪大にて学生、研究員、特任助教として奉職し、留学や沖縄赴任を経て、現在また大阪大学医学部公衆衛

生学講座にて准教授、特任准教授（常勤）として勤務している間、考えてみると 20 年以上井戸さんにはお世話になりっぱなしでした。近々ぜひお会いしましょうと、ご連絡をいただいた数日後に、井戸さんの突然のご逝去を伺いショックでした。最近、恩師である多田羅浩三先生の訃報にもふれ、お二人にそれぞれ学ばせて頂いた公衆衛生制度・活動の原点について改めて考えると共に、ご指導いただいたことに感謝の気持ちを新たに致しました。関西の公衆衛生活動のために、大切なお二人が続いて旅立たれてしまったことが、残念でなりません。

井戸さんが、学生たちに見せて下さった結核対策や路上生活者支援の現場、伝えて下さった想いは、誰一人取り残さない健康な社会の実現を目指す全ての専門職と、保健医療福祉を学ぶ多くの学生の心に残り、原点となる機会や出会いをつなげて下さったと思っています。古くて新しい課題として複雑化する結核対策を巡る状況の中、井戸さんが心血を注いで進めてこられた活動、灯して下さいった明かりが、つながり続けることを願っております。

いつものよく通る大きな声で、おっちゃん達に声をかけながら、西成の町を歩く井戸さんにまたすぐ会えそうな気がしてしまいます。エネルギーでいつもポジティブな井戸さんの笑顔が忘れられません。心よりご冥福をお祈りいたします。



研修のたびに写真を撮って送ってくださった井戸さん：2008 年大阪社会医療センターにて撮影
後列左から白井こころ、ベン・セリグマン（当時フルブライト研究生・現スタンフォード大学老年内科フェロー）、豊田泰弘（当時大学院生、現市立豊中病院乳腺外科部長）、63 歳当時の井戸武實さん（当時 NPO 法人 HESO 常任理事兼事務局）、前列は DOTS ナース〔当時大阪社会医療センター看護師の吉田春枝さん（左）と橋川桂子さん（右）〕（写真提供：白井こころ）

笑顔の素敵な井戸さん

高 野 正 子

元大阪公衆衛生協会会長

大阪公衆衛生協会の事務所のドアを開けると「先生いらっしゃい」と大きな声でいつもにっこりと出迎えてくださった井戸事務局長。笑顔の素敵な方でした。

大阪公衆衛生協会が「ストップ結核パートナーシップ」を新たな事業として位置づけた年に、井戸氏は事務局長に就任されました。私は2017年から4年間一緒に仕事をした仲間です。不慣れな事務の仕事にも関わらず、嫌な顔一つせず、不満を口にすることは一度もありませんでした。どなたにもいつもニコニコ笑顔を絶やさず接する姿にはいつも感心させられました。

事務局長としての活躍を初めて目にしたのは、2006年に日本公衆衛生学会が20年振りに大阪で開催された際のことです。会員の方々のご協力により大阪公衆衛生協会の歩みをまとめ、大阪公衆衛生協会のブースを開設し報告することができました。大阪公衆衛生協会の歩みは大阪公衆衛生の歴史そのものでした。その際の彼の働きぶりは素晴らしかったと記憶しております。

また、HPを開設し協会の活動を報告する等積極的な取り組みにも着手しました。

事務局長とは大阪府内色々な所に、色々な用件で伺い、色々な思いを持って帰りました。しかし彼はどの場面でも笑顔で対応、救われました。ありがとうございました。

大阪公衆衛生協会は2021年3月にやむなく解散いたしました。解散に際し、1958年7月に刊行された機関紙「公衆衛生」最終巻総集編までの全巻が、大阪大学林田教授のお諮りもあり大阪大学総合図書館にて閲覧可能となっております。事務局長として最後までその役割を果たして下さいました。改めて感謝申し上げます。

事務局長として仕事をする中で、彼の気持ちを支えていたのは「結核パートナーシップ」事業を通して大好きな結核の仕事に関わることが出来たからだだったと思います。その一つの例として、事務所でいつも以上にニコニコソワソワしながら会議の準備をする場面がありました。この時は決まって「結核」を一緒に語る方々との勉強会やワークショップの打ち合わせの時でした。勿論ワークショップ当日は嬉しさがどこから見ても溢れ且きびきびと働く姿を思い出します。

また、井戸氏は度々保健師さんにあいりん地区活動を現地で講義して下さい、皆感謝、感激していたことを思い出します。

協会解散後も「結核パートナーシップ」事業が継続され、井戸氏が最後まで活動にかかわることができたこと本当に幸せだったことでしょう。

井戸さんはエレベーター、エスカレーターは使わず、どこでも階段を駆け上り下り、腹筋は毎日百回、人一倍健康に気を遣われていらしたのに残念です。

日々忙しく働いていらした井戸さん、奥様を愛し、家庭を愛していらした井戸さん、笑顔の素敵な井戸さん、どうぞゆっくりお休みくださいませ。

井戸さんのように社会貢献をめざして

田中 義則

元認定 NPO 法人 釜ヶ崎支援機構
株式会社中義 一般社団法人ライフサポートはぎちゃ 代表取締役

私は、NPO 釜ヶ崎支援機構の職員として従事させていただきました 17 年ほど前、支援機構内の HESO という機関にて、井戸さん（生前でのお呼びの仕方）たちに、保健師という立場で特別清掃事業に従事されている高齢者の方々の健康管理や公衆衛生の指導などを行っていただいております。結核とはなんぞや？という私は、興味本位で HESO の事務所に行き、結核のことや感染症のことを勉強させていただきました。それとは別にあまりパソコンには得意ではなかった井戸さんからパソコンの設定や修理、ホームページ等の依頼で逆に私が教えていたりし、公私ともに仲良くさせていただきました。

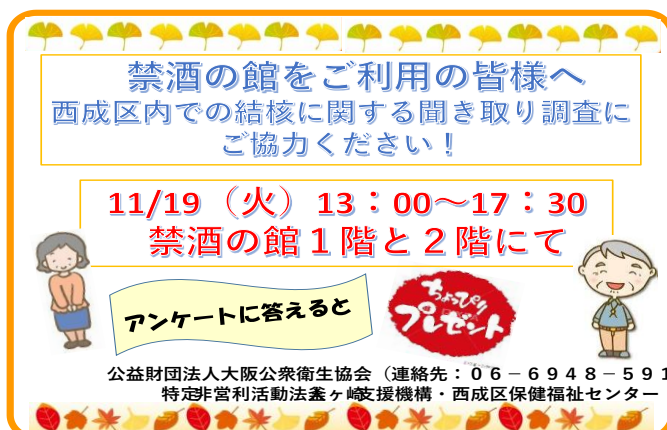
井戸さんの結核に対する熱心な働きは、私も同じく志を共にできないかと微力ながら精力的に検診などに奮闘させていただきました。あいりん地域の結核はあまりにも地域の公衆衛生の悪さに蔓延せざるを得ない状況だとわかっていても、少しでも安全に暮らせる町や国を目指されていた、井戸さんのお気持ちを食事の席にてお話ししてくださいました。のちに SDGs が近く広まることにとても興味を持たれ、私もとても関心を持って話し合ったことを今でも思い出します。

私も今はいくつかの会社を経営する経営者として浪速区、西成区や大阪市内を中心とした福祉や様々な業態にて奮闘させてもらっています。起業したての頃は、井戸さんにも相談に乗っていただいたことも思い出しました。

とても笑顔が素敵で満面の笑みで迎えてくださり、とても丁寧な話し方で誰も傷つけないお人柄を私はとても大好きで、常に井戸さんの味方になりたいと思いました。

長い間、目には見えないものと戦ってこられた井戸さんですが、その思いは今のあいりんの町では勝ったということになるであろう状況になっていますよ。一生懸命に御尽力なされたお身体を、今はゆっくりとお休みになっていただければと思います。

改めて井戸さんが教えてくださったことに感謝しています。ありがとうございました。



←禁酒の館の利用者を対象とした
2019 年結核認識調査の案内ポスター
作成：大阪公衆衛生協会
認定 NPO 法人釜ヶ崎支援機構
西成区保健福祉センター



あいりん臨時夜間緊急避難所(シェルター)利用券配布の行列（あいりん総合センター前で 2010 年当時）
 野宿を余儀なくされる労働者に毎日 1,040 人分の寝場所を提供。大阪市からの委託事業



2000 年に設置、定員 600 人



2004 年に設置、定員 440 人



←シェルターの2段ベッド

（引用：認定 NPO 法人 釜ヶ崎支援機構ホームページ <https://www.npokama.org/summary/shelter/shelter.html>）

大阪の風土が生んだネットワークの達人

中 村 安 秀

公益社団法人日本 WHO 協会理事長

E-mail: yastisch@gmail.com

1. 笑いの輪の中に、いつも井戸さんがいました

公益社団法人日本 WHO 協会は、井戸武實さんには本当にお世話になりました。2016 年度からは公益財団法人大阪公衆衛生協会として賛助法人会員になっていただき、その後は賛助個人会員としての活動を支援していただきました。日本 WHO 協会が、「関西グローバルヘルスの集い」を定期的に開催した 2019 年以降、少なくとも 12 回以上はセミナーに参加いただきました。グローバルヘルスに関心を持つ若い医学生や看護学生に交じって、ワークショップで付箋を片手に模造紙に貼り付けている楽しそうな井戸さん。会場から大きな笑いが起きたとき、輪の中にはいつも井戸さんの姿がありました。年齢を問わず、性別を問わず、国籍や民族を問わず、人とつながることが大好きな井戸さん。日本 WHO 協会が毎年 4 月 7 日に開催している世界健康デー祝祭にもよく顔を出していただきました。今年（2025 年 4 月 7 日）の世界健康デー・イベントには、いつも誰かとおしゃべりしている、にぎやかな井戸さんの姿を拝見できないと思うと寂しさが募ります。

2. 結核にかける井戸さんの熱い思い

井戸武實さんは、結核対策のプロフェッショナルです。『目で見える WHO』（2020 年夏号）に「外国生まれの結核患者の増加とその対策を考える」を執筆いただきました。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップをまとめたものですが、いま読み返してみると、後輩たちに向けた井戸さんからの貴重なメッセージとして受け止めました。（全文は本追悼集の資料④に掲載）

3. 軽妙なフットワークの井戸さんが「要」となった多職種ネットワーク

個人的なことになりますが、私は、和歌山県田辺市で生まれ、中学・高校は大阪で育ち、大学以降は東京で仕事をしてきました。その後、大阪大学に職を得て、関西に戻ったときに、関西は、成果が定まっていない新しい取組みを面白い風潮があり、多職種で新しい組織を作りあげるときの垣根が低いことに気づかされました。人と人が交わる場所から、なにか新しいものが始まるという発想が、人々の深層を流れているのです。

結核対策、大阪公衆衛生協会、ストップ結核パートナーシップ関西。井戸さんが紡いできた人から人へ、組織から組織へというつながり。いまの言葉でいえば、多様性、公平性、包摂といった DEI（Diversity, Equity and Inclusion）に集約されるのでしょうか。そんな言葉が人口に膾炙されていなかった時代に、井戸さんは軽妙なフットワークで、背景も個性も異なる人と人をつなぎ、水と油のように性質や規模も異なる組織を結び合わせてきました。いま、多職種ネットワークという用語が飛び交っていますが、本当の意味でお互いに信頼と安心を分かち合うことのできるネットワークはまだ希少です。井戸さんが大阪に残してくれた多職種ネットワークという貴重な財産を大切に育み、次世代に継続していくことこそ、井戸さんと同時代を過ごした私たちの責務であると痛感しています。

井戸さん、ほんまにありがとう

マ ー コ

社会福祉法人ふるさとの家

井戸さん、ほんまにありがとう。

井戸さんが亡くなったと聞き驚いています。メールをいただき、そばにいるスタッフに「井戸さん亡くなってんて！！」と言うと、

「いどさん・・・??」

「あの、何回会っても『井戸でございます』の緑の名刺の人、結核博士」

「ああ、えーーーーー！！！」

井戸さんは、結核罹患者の多い釜ヶ崎で、結核がなくなることをひたすら願い活動してくださいました。普段は穏やかでにこやかなのに、結核や病気の施策などの話になると、

「もっとこういう方法もありますのに！本当ですよ、マーコさん！！」

といつも丁寧な口調で怒っていました。

看護学生の実習、フィールドワークに来る学生や医療従事者には、必ずふるさとの家を紹介してくださいました。井戸さんと顔見知りの労働者も多く、道端で話しかけられて進まないことも何度も。

「ヘルスサポート大阪」から「大阪公衆衛生協会」へと勤務地が変わっても、

「なんでも遠慮なくご相談ください。すぐ飛んでまいります」といつも言ってくれました。

いつも明るく笑顔の井戸さんが、もう訪ねて来てくれないと思うと残念でさみしい限りです。

「感謝」

松 元 清 美

元大阪府藤井寺保健所企画調整課長
河内長野市医師会地域連携室

「井戸さん 2 番に電話！」

「は～い」

執務室内に響き渡る大きな声とともに右手を挙げる井戸さん。

真っ先に思い浮かぶのはこの光景である。

また、いつ何時、声をかけてもニコニコした笑顔で対応してもらった。「あっそう」「あっそう」と聞き上手でもあった井戸さん。私は、一緒に働いた中で井戸さんが怒った顔や悲しい顔をしたことを見たことがない。

さて、私の入職当時「公衆衛生」って？学生時代机上で習っただけで何も知らなかった。本庁には「結核係」という部署があった。一つの病名で一つの係ができています。「なんで？」保健所で診療放射線技師が「何するの？」私は、診療放射線技師の資格で採用になったはずだが・・・

そんな戸惑いの中、私は、藤井寺保健所に配属になり、「はと号」で中零細企業を巡回し胸部エックス線撮影を行う業務についた。この「はと号」がすごい！従来の検診車のイメージがない。狭い路地にある事業所にも入って行けるよう2トントラック並みのコンパクトな検診車である。撮影時には、天井にあるハッチを押し上げ高さを確保する。また、検診は間接撮影が主体であったが直接撮影もできる優れものでもあった。直接撮影では、エックス線管が移動・回転して焦点間距離を確保する。「はと号」は井戸さんをはじめ諸先輩方が工夫・設計した代物であった。よくこのようなカラクリを考えついたものだ！

当時、検診受診率が低かった中零細企業の従業員から「結核」の発症が多い中、早期発見・早期治療を目的に「はと号」は造られたと聞く。行政がここまでする？大阪は結核罹患率が高すぎたのだ。なるほど、「結核係」は必要な組織体だったのだ。その結核係の係長をされていたのが井戸さんだった。

「大阪に井戸あり」——後に全国保健所放射線技師会で聞いた声である。井戸さんは、結核研究所とも深いつながりがあり、毎年、長期研修への派遣予算を確保し後輩の育成・教育にも力を入れてくださった。私は、長期研修に行かしてもらった一人でもある。「公衆衛生」がいかなることかわからなかった私に「結核」を通して勉強する機会を与えてくださった。これを機に胸部エックス線撮影や菌検査などから「公衆衛生施策」に興味を抱くことができた。

大阪の結核罹患率が減っていく中、また、生活習慣病予防のために健康診断の内容が充実・受診率が向上したことから、やがて行政が行う「はと号」の役割は終わりを迎えることとなる。撮影業務は

減っていったが、「公衆衛生」特に「感染症対策」においては、これまで保健所の診療放射線技師が培ってきた経験と知識を発揮することができた。現在、保健所においては、「地域保健課長」の職に就いている診療放射線技師もいる。診療放射線技師が「公衆衛生」を担う一員として認められてきた証である。これも一重に井戸さんをはじめ諸先輩方から引き継いだ教えそのものではないかと考えている。

井戸さんは、大阪府を退職されてもあいりん地区の結核対策に関与されるなど生涯を通じて「結核」と向き合われた。「公衆衛生の鑑」かとも思う。また、井戸さんの活動は、大阪府の結核罹患率が減ってきた大きな功績の一助となったのは間違いない。

「井戸さん 2 番に電話！」

・・・返事がない・・・

最後になりましたが、井戸さんのこれまでのご功績を称え、お悔やみと感謝を申し上げます。

「井戸さん、あなたの後輩は、あなたの意思を継いで活躍していますよ。安心してください。」

「井戸さん、私を育てていただきありがとうございました。」

いつも明るい井戸さん、ありがとう！

三 浦 康 代

元奈良学園大学保健医療学部教授

山森晶子さんが大阪市西成区保健福祉センター保健師として、2019年のあいりんでの「結核に関する認識調査」の打ち合わせの時にご出席された時にはじめて、山森さんが井戸さんの娘さんだということがわかり、私はびっくりしました。親子で結核対策に関わっておられたんですね。

井戸さんが何の前触れもなく彼岸へ旅立たれて、本当に残念でなりません。私ですらこの状態ですので、ご家族様におかれましてはさぞご憔悴のことと存じます。

井戸さんに教えていただいたことは山のようにあります。

私が2009年に白鳳女子短大にいた時に、大阪府保健師OBの清水多實子教授の発案で、あいりんでの保健師実習が始まりました。実習前には逢坂隆子先生にご講義をいただきました。実習初日は「HESO」の事務所で井戸さんの説明から始まり、「ふるさとの家」では利用者の健康相談をさせていただき、「大阪自彊館三徳寮」「臨時夜間緊急避難所（シェルター）」「新今宮文庫」「三角公園」「自転車リサイクルプラザ」等にも引率していただきました。井戸さんはあいりんの商店街のど真ん中で、薬物密売人らしき人の行動を遠くから見つけ、危険を承知で学生に説明をされていました。密売人や客の逮捕者の3割が生活保護受給者であり、あいりんはまさに日本の公衆衛生問題の吹き溜まりのような街であり、保健師学生にはこの上ない学びの街でもありました。それが私と井戸さんとの出会いでした。以来、逢坂隆子先生代表の科研「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」（2010～2012年度）で、あいりんの支援団体への聞き取り調査にも関わらせていただき、井戸さんらと共にサポートティブハウス等の見学や聞き取りもさせていただきました。ストップ結核パートナーシップ関西の研修では、井戸さんはいつも多くの保健師に取り囲まれて大人気でした。

あいりんでの実習最終日に、井戸さんは学生に「飛田っていうところ知ってるか？興味のある人は私に黙って着いてきたらいいよ。興味本位だけならお断りだよ。」とおっしゃいました。学生たちは飛田経由で天王寺駅から帰るグループと新今宮駅から帰るグループの二手に分かれたようでした。私は教員として責任がありましたし、飛田って初耳だったので、井戸さんの後ろについて行きました。やはり予想通りのところでした。開放された玄関の上がり框にはきれいなピンクのドレスを着た若い娘がすわり、その横に高齢の女性が座っていました。若い娘のほうにライトが当たり、その一帯だけが妖艶な世界で、今も合法的に売春が行われているとのことでした。私は何も見なかったかのように下を向いて通り過ぎ、学生たちが無事に天王寺駅に着いたときはホッとしたものでした。

明治国際医療大学にいたときも、井戸さんに「西成市民館」の釜学講座をご紹介いただき、保健師学生をあいりんへ引率する機会を与えていただきました。

また、井戸さんは大阪社会医療センターでの結核勉強会がどんなに夜遅く終わっても、「まだこれからDOTSがあるから」と言って、あいりんの結核患者の服薬支援訪問に行っておられました。

こんなこともありました。2012年の日本公衆衛生学会に山口へ行った時に、ロボットが年齢を当てるコーナーが人気でした。井戸さんが前に立つと、ロボットは困ってしまい、考えた末に、「年齢はわかりません」とロボットが答えました。井戸さんも、周りで見えていた参加者たちも大笑いでした。何回か挑戦されていましたが、ロボットは悩むばかりでした。思い出すのは井戸さんの笑顔ばかりです。それにいつもきれい好きな方で、HESOの事務所の床はいつもピカピカでした。

井戸さんの大阪府定年退職後のご活躍は、そのままあいりんの結核罹患率が低下した時期と一致していると思います。井戸さんが退職された時期と、私が保健師から教員になった時期がたまたま同じ頃だったことは、私がいりんを知る上で結果的にラッキーなことでした。私は井戸さんの進言のおかげで2013年と2019年に「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査」の分析をさせていただくことができました。おかげで、遅咲きの教授になることもできました。今、井戸さんを失い、定年退職後の自分の立ち位置でできることは何かと考えた結果、井戸さんの結核撲滅への思いと社会的に弱い立場の人への支援の連携やボランティア精神、それらを微力ながら大学や専門学校の学生たちに伝え残すしかないという結論に達しました。あいりんでのDOTSの影武者であった井戸さんの活動や生き方はこれからも多くの人に語り継がれると思います。井戸さん、ありがとうございました。やすらかに・・・ 合掌



1960年代の大阪市福島保健所の巡回結核健康診断
・血液型検査受付風景（写真提供：三浦康代）



第7回 ワークショップI 受付風景(2020年1月)
(写真撮影：井戸武實)



ストップ結核パートナーシップ関西の会場で、大阪公衆衛生協会が結核予防会のグッズを販売しているコーナーがあった時代がありました。私が stop TB のシールを買い、井戸さんがニコツとして「そのシールね、上下逆にすると dots と読めるよ」と教えてくれました。保健師たちが「なるほど」と集まってきました。私はシールを携帯電話に貼って愛用していました。



「検診は まわりの人への 思いやり」三浦 康代 「結核ゼロ そう言える日が きっとくる」南 麗子
(奈良市保健所結核川柳作品展で入選した保健師の句) (2005年)

井戸武實さんとの思い出

三 杉 隆 文

大阪府富田林保健所

私にとって井戸さんは、大阪府の職員として放射線技師としても大先輩であり、恩人であります。井戸さんが現職だった頃はもちろん、退職されてからも結核勉強会でお世話になり、数々の助言や励ましを頂きました。

井戸さんは昭和41年に大阪府に採用され、藤井寺保健所、松原保健所、泉大津保健所、富田林保健所での勤務を経て、平成3年に本庁（地域保健課結核係）に異動され、平成11年までの9年間、大阪府の結核対策の陣頭指揮を執ってこられました。平成12年から藤井寺保健所で放射線検診科長としてエックス線自動車（はと号）の運用に尽力し、平成17年3月に退職され、退職後も、大阪公衆衛生協会事務局長として精力的に結核対策に取り組まれてきました。昨年、私が勤務する富田林保健所に来られた際は、旧知の職員たちと談笑され、とても79才とは思えない快活さでしたので、お亡くなりになられたのが今でも信じられません。

井戸さんが入職された昭和41年当時は、大阪府が管轄する保健所が20か所、支所が2か所もあり、各保健所に1台、はと号が配備されていました。患者・家族の自宅をはと号で巡回訪問して、管理家族検診（胸部エックス線検査）を受けてもらい、検診によって結核患者を発見しようとしていた時代です。毎日、毎日、撮影業務に追われ、帰所後も現像に取りかからねばならず多忙を極めたそうです。

私が大阪府に採用された平成3年頃は、健康診断を受診する機会が少ないと思われる小規模事業所（従業員数が50人未満の町工場など）に巡回訪問し、そこで働く工員さん達に検診を受けてもらい、結核患者の早期発見につなげようとしていました。住宅地図を片手に町工場を片っ端から巡回して声をかけ、受診を勧奨する“ローラー作戦”が始まったのもこの頃です。

口下手な私は、見ず知らずの所を訪ねて受診勧奨をするのが苦手で、思うように受診してもらえず困っていたのですが、井戸さんが応援に駆けつけてくださり、一緒に巡回したことがあります。井戸さんは、にこやかに町工場に入って行かれ、良く通る声で「こんにちはー」と挨拶、持参したパネルを使って丁寧に説明されるものですから、たちまち受診者の行列ができたのは言うまでもありません。井戸さんの背中では、「こんな風にやるんやで」と言われていました。

大阪市と堺市を除く大阪府の結核罹患率（人口10万対）は、井戸さんが入職された昭和41年は4.05、平成3年は5.4、はと号が全廃となった平成20年は24.4、令和5年には10.3と大きく低下しました。ここまで低下させることができたのは、先人たちの努力のたまものだと思います。

現在、結核高まん延国からの入国する外国人の増加に伴って、外国出生結核患者の割合が年々増加しています。井戸さんだったらどんな対策を執られるでしょうか。バトンタッチされた我々はどうすればいいのでしょうか。半世紀以上もの長い間、結核対策に取り組んでこられた井戸さんの仕

事を前にすると、敬意を表さずにはられません。



平成 10 年(1998)、本庁勤務の診療放射線技師と大阪府庁前で（左から田中豊實氏、井戸武實氏、大町直樹氏）（写真提供：三杉隆文） 井戸武實さんは、大阪府保健衛生部保健予防課結核係主査として 1991 年より 9 年間、大阪府全体の結核対策に従事し、府下の病院・診療所などに在勤するすべての医師に結核の基礎から臨床、対策にいたる研修を企画実施した。



昭和の時代に活躍したエックス線自動車（はと号）

狭い路地にも入っていけるようにコンパクトな車体になっている。結核ワースト 1 の大阪で、小規模事業所の従事者を対象に、結核検診などで大きな役割を果たしてきた。平成 20 年に全廃となった。

井戸さんはサポーターティブハウスの応援団長

山 田 尚 実

NPO 法人サポーターティブハウス連絡協議会 代表理事
サポーターティブハウス「メゾンドビューコスモ」オーナー

あいりん地域における生活困窮者の支援付き共同住宅サポーターティブハウス「メゾンドビューコスモ」のオーナーで、NPO サポーターティブハウス連絡協議会の代表理事を務めております山田尚実と申します。

平成 26 年 12 月に開催されたストップ結核パートナーシップ関西第 2 回ワークショップにおいて、パネルディスカッション「あいりん地域と大阪の結核対策と患者に対する医療」のパネラーとしても参加させていただきました。

サポーターティブハウスではそのオープン時より入居者に対する個別の声かけで結核の誕生月健診を実現し、あいりん地域の結核患者の減少に一定の役割を果たしてきたと考えています。DOTS の入居者支援も保健師さんや看護師さん HESO の皆さんと協力して行ってきました。

井戸さんは学生のフィールドワークの引率において、メゾンドビューコスモを行程に組み込んで、学生たちに生の現場を体感してもらおうとされていました。「オーナー！井戸さんからお電話です。」というスタッフの声に電話に出ると、いつもの明るい愛嬌たっぷりの声で「x 月 x 日コスモに学生 10 名連れて行くからよろしくね。」と既に決定した事項のごとお話になりました。井戸さんに言われたら断りようがありません。二つ返事で「いいですよ」と答えたと、当日はフィールドワーク参加者全員の名刺を携えてお越しになられました。私からは、あいりん地域とサポーターティブハウスの成り立ちからこの地域の現在の状況、そしてサポーターティブハウス内での結核患者の生活や経過、DOTS の様子、保健師さんや病院との連携についてなどをお話いたしました。

平成 24 年 10 月には、WHO の結核対策のトップも務められた古知新さんをコスモにお連れになり、古知さんにはサポーターティブハウスの結核対応について現場での様子を良い点、問題点など実例を挙げてご説明させていただきました。

井戸さんはサポーターティブハウスの活動の絶対的な応援団という風にいつも心から拍手を送って下さっていました。井戸さんの言葉にどれだけ励まされたことでしょうか……

感謝と共に心よりご冥福をお祈り申し上げます。



メゾンドビューコスモ内談話室にて左から井戸さん、山田尚実、^{こちあらた}古知新医師※（2012年10月）
（写真提供：山田尚実）

※^{こちあらた}古知新医師：元 WHO 本部結核・エイズ・マラリア対策部

直接監視下短期化学療法（DOTS）を推進したことで知られている。

古知新医師の当時の著書：

古知 新，下内 昭，高鳥毛 敏雄．〔鼎談〕大阪市の「西成特区構想」とわが国の結核対策の課題．
公衆衛生．2013；77（2）．136-142．



メゾンドビューコスモ内談話室にて井戸さんとフィールドワークの学生たちと山田尚実（前列右
ら3人目）（2012年12月）（写真提供：山田尚実）

井戸さんの思い出

山 本 繁

元尼崎市保健所長
元 NPO ヘルスサポート大阪常任理事

小生が貴兄に最初に出会ったのは、2007年1月?の頃かと思います。HEALTH SUPPORT OSAKA（以下 HESO と略）が、大阪市に対して胸部X線検診車の更新を要請するために、兵庫県健康財団所有の胸部デジタルX線検診車を視察・見学した折と記憶しています。大阪府庁にて結核対策を担当されていた頃だったと思います。「実直な公務員」「超真面目な診療放射線技師」というのが第一印象ですが、「このようなデジタル検診車を導入すれば西成の結核対策は一步、二歩と前進するでしょう。是非、大阪市には導入を勧めましょう」との熱い一言に感激して、改めて一緒に仕事ができれば有難いと思い、逢坂隆子先生と共に HESO への参画を誘った記憶が蘇ります。

以後、親しく付き合せてもらうことになりました。貴兄のお陰で、尼崎市役所退職後の人生は充実したものになりました。HESO への参画や大阪公衆衛生協会への訪問が楽しくて、色々な刺激を受けて長生きできている訳です。まさに、お付き合いに感謝しております。ありがとうございました。

さて、貴兄に学んだ点を挙げてみます。まず、結核罹患患者へのインフォームドコンセントです。大阪府における結核一筋の経験に加えて、結核病学の大家であった亀田和彦先生との親交が厚かったので、患者へのわかりやすい説明力には驚きませんでした。検診会場での即医療決断に結びつける同意には貴兄の温和な目線と寄り添う包容力がなせる技と感心しました。おそらく、苦勞された和歌山での生い立ちが原点にあるかもと推測しましたが・・・。

さらに積極的に社会医療センターへの同伴受診や HESO 事務所等での面談に取り組み、医療中断が無くなることを教えてもらいました。実際の暮らしを配慮して働きかけを続ければ日雇い労働者等の自己決定権を尊重できることも実証されました。西成での DOTS 終了者の集まりにも通じた、あの優しさには脱帽しかありませんでした。

次に、4S（整理・整頓・清掃・清潔）の実践です。HESO 事務所は、当初釜ヶ崎支援機構の2階（プレハブ）を、次いで黒川診療所の2階を借用して運営していましたが、いつも4Sが徹底されていました。学習会や DOTS 終了者の集まりなどを開催した折の借用会場でも事前に掃除をされていたし、植木の水やりまでされていました。綺麗好きの域を超越した徹底さには負けました。

この習慣は、2013年に赴任された、谷町1丁目にあった大阪公衆衛生協会の事務所でも継続して実践されていました。協会の事務処理は膨大にもかかわらず、きちんとファイリングをされておられたので、少し質問すると色々な資料を次々と見せていただき、いつも啓発されていました。今から振り返ると、事務局長だけでなく学芸員の役割もされていたわけと納得です。

産業保健の現場では、4Sが標語として掲げられますが、その実践は口で言うほど簡単ではないので、小生の産業医としての職場巡視の折には貴兄の実践を念頭において意見書を書くようになりました。

た。

最後に、挨拶の励行です。貴兄は、いつでも、どこでも、誰とでも、会釈をしながら＜おはようございます＞＜こんにちは＞＜ありがとう＞の挨拶ができる人でした。小生はコミュニケーションの基礎には挨拶があると考えますので、このスタイルにはいつも拍手していました。だから、短期間のうちに、愛隣地区で「HESOの井戸さん」の存在感が生まれたと思います。貴兄が挨拶を重んじたからこそ、日雇い労働者等愛隣地区の人達の信頼を得られ、HESOの活動力が飛躍するという好循環をもたらしたと考えます。縁が縁を呼びました。小生も元気をもらった一人です。

それから、個人的にはお世話になった点を追加して披歴します。天王寺にある普茶料理店：阪口楼に連れて行ってもらったことです。貴兄の紹介で小生の知人・友人もしばしば利用させてもらいました。皆さんにはとても喜ばれる珍味店でした。コロナ禍の折でしたが、貴兄の主治医である湯川研一先生を交えて懇談し喫食したことも懐かしく思い出します。あの時、得意の詩吟を聞かせてもらいました。朗々と吟じる姿も目に焼き付いています。最後の晩餐になるとは、思いもよらぬことでした。

改めて、貴兄の早い旅立ちを悼み、ご冥福を祈ります。合掌。

感謝申しあげます

山 森 晶 子

大阪市保健師

このたびは、父井戸武實追悼集の作成にあたり、編集委員会代表の高鳥毛先生をはじめ、取りまとめに奔走してくださった三浦先生、大阪大学学術情報庫 OUKA へ掲載をいただいた林田先生、お忙しい中、父との思い出を綴っていただいた皆様に心より感謝申しあげます。

父がこのような追悼集を作っていただいたことを知ったらとても驚き、感謝の気持ちで涙が止まらなくなるのではと想像します。不思議な感覚ですが、なんとか父に読んでもらう方法はないものかと考えてしまいます。それくらい父がいないことの実感がまだありません。

私が原稿を書かせていただくことをおこがましく感じ悩みましたが、感謝の気持ちをお伝えする術として書かせていただくことにいたしました。拙い文章をお許しください。

先日、2025 年 1 月 18 日ストップ結核パートナーシップ関西第 12 回ワークショップにおきまして、お世話になった先生方のご講演の中で、父との思い出や温かいお気持ちを聞かせていただきました。家族で参加させていただき、懐かしい写真やお話に胸がいっぱいになり、忘れられない 1 日となりました。

私自身、平成 28 年から 4 年間、西成区役所分館で下内先生をリーダーとした結核対策グループで勤務させていただき、その際はワークショップに参加させていただきました。直後のコロナ禍以降は、リモートで参加しておりました。嬉々として、ワークショップを楽しんでいた父の姿が忘れられません。

当事、父は、JICA 等あいりん地域の結核対策についての見学者の方を連れて、時々分館に現れ、下内先生のご講義の後、フィールドワークに出ていきました。

三浦先生が中心となり実施された「新あいりんシェルター居場所棟利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査」では父と一緒に参加し、かけがえのない経験をさせていただきました。

胸部 X 線検診車の中で父と一緒にすることもあり、見学者の方に「実は私達親子なんですよ」とお伝えしても、なかなか信じてもらえず、笑ったこともありました。

私は精神保健福祉相談員として、サポーターハウスの健康相談にもお伺いしていましたが、父のことを知る方とお会いできたこともありました。

その数年前に、福祉職員向け研修会にゲスト参加するためにあいりん地域を訪れた際は、高齢者特別清掃事業事務所上のヘルスサポート大阪の事務所を尋ねました。偶然、元羽曳野病院にいらした亀田先生が来られていてお写真を撮っていただいたことも懐かしい思い出です。

「日本の結核の罹患率低下のためには、大阪府だけの対策ではなく、大阪市、西成区、あいりん地域の健康を守らないと」と父が話していたのを覚えています。ワークショップでの先生方のご講演を拝聴し、多くのお世話になった皆様と一緒に取り組ませていただいた歴史を改めて知ることができま

した。

父が大好きだったあいりん地域を私も大好きになりました。人情と人間臭さと哀愁と、誰をも受け入れる包摂の街に、父がなぜあんなに心惹かれていたのかを知ることができ、大阪市の保健師になれて良かったと思うことができました。

最後になりましたが、生前賜りましたご厚情に感謝いたしますとともに、皆様の一層のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

追伸：この追悼集の作成にあたり、三浦先生が何度もメールでやりとりをしてくださいました。やりとりの中で、その時々吐露した気持ちを聞いていただき、少しずつ心が回復していると感じました。ありがとうございました。

井戸武實さんを追悼する

高 鳥 毛 敏 雄

関西大学社会安全学部・社会安全研究科教授

1. はじめに

井戸武實さんを追悼するにあたり亀田和彦先生、逢坂隆子先生、高野正子先生のことを触れる必要があります。特に亀田先生は井戸さんに公私にわたりとても大きな影響を与えた方でした。井戸さんがあいりん地区で活動することとなったのは逢坂隆子先生がホームレス健康問題研究会を立ち上げて、行政や民間団体と協働してホームレス者に対する健康支援を行うために NPO ヘルスサポート大阪を設立したからでした。また大阪公衆衛生協会の事務局長としてストップ結核パートナーシップ関西（以下、STBK）の活動を行うことには協会会長となった高野正子先生が協会の結核事業にいろいろとサポートしてくれたことがありました。また、大阪の結核対策やストップ結核パートナーシップ関西の事業を行うようになった背後には岩崎龍郎、島尾忠男、森亨、石川信克の歴代結核研究所長の存在があることを忘れてはならないことです。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップにあたってこれまでも結核予防会及び結核研究所の先生方が困った時にはいつも支えてくれました。

井戸さんの人生は3つに分けることができます。最初の時代は、大阪府に採用されて保健所の診療放射線技師として結核検診に邁進されておられた時期です。この頃の井戸さんの詳細は触れません。次の時代は亀田先生とともに歩んでこられた時代です。当方が井戸さんと顔を合わせるようになったのはこの時期からのことです。第3の時代は、ホームレス者の結核対策を始めた時期です。これが、NPO ヘルスサポート大阪、大阪公衆衛生協会、そしてストップ結核パートナーシップ関西（以下 STBK）の活動、結核勉強会とつながってきました。2013年に（公）大阪公衆衛生協会を事務局として第1回の STBK のワークショップが開催されました。その企画運営を担当したのが結核勉強会のメンバーでした。2020年に新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行時は ZOOM を使った開催となり、そして COVID-19 流行が落ち着いた 2023 年度開催の STBK のワークショップは特別なものとなりました。3年ぶりの対面形式で大阪大学中之島センターにおいての開催となったからです。これが井戸さんを事務局とした最後の開催となりました。ワークショップ後に行った打ち上げの場は記憶に残るものとなりました。一人の人間として過ごされている井戸さんの素顔の側面を垣間見せてくれたからです。詩吟をしているということは日頃聞いていましたが即興で吟詠して下さいました。誰もが予想していなかったことでした。これが井戸さんの雄姿の見納めとなってしまいました。2024年度の STBK のワークショップは事務を担当してこられた井戸さんがいない中での開催となりました。井戸さんの人生を振り返ることは日本の結核対策の温故知新になると思います。また追悼にあたり結核に当方がなぜ関わり、井戸さんとお付き合いしてきたのかについて書く必要があると考えました。そのため、当方の文章だけが追悼を超えて長文となってしまったことをお許しいただきたい。

2. 結核との関わり

井戸さんと一緒に仕事をする事となったのは結核に関わったことからでした。結核との関わりをたどると学生時代のことを書かざるを得ません。発端は入学して間もない4月に冷やかしの気持ちで阪大病院皮膚科別館二階の農山村医療研究会の部室の説明会に顔を出したことです。サークルの説明会に顔を出すとすぐに居酒屋に連れて行かれました。それから毎週火・金の2回の部会に参加することとなりました。部会が終わると毎回JR大阪環状線福島駅と国道二号線の間にある居酒屋の「吉野屋」に行くのが慣例でした。数回休むと安否確認の電話があり、やめるにやめられず、そして3年生の時に部長にさせられてしまいました。今流行の悪徳商法の勧誘のようです。サークルは夏に高知県の山間部の夏期休業中の地域の小学校の体育館と調理室などを借りて2週間あまり、広大な面積の山肌に散在している100世帯あまりの家々を訪問して家族構成、職業、健康状態、受療状況など聞き取り、世帯台帳をつくりました。後半は医師、保健師、検査技師の諸先輩に来ていただき健康診断を実施しました。活動は先発隊、本隊、後発隊で構成されていました。先発隊は、高知県庁、管轄の保健所と村役場、そして地区の区長さんにご挨拶に伺いその年の活動の受け入れをお願いし調整することが役割でした。先発隊の1週間後に本隊が入りました。後発隊は9~12月の間に現地に行き、夏の活動の報告を行い、現地の変化を調べ、次年度の活動のお願いをするのが目的でした。部長とされたので年に何度も高知県に行くこととなり、実家（能登町中斉）の墓参りもままならない学生生活となってしまいました。サークルの前身が多田羅浩三先生のつくられた「大阪大学アジア医学踏査隊」であつたころからゴールデンウィーク期間に大阪大学微生物研究所ライ部門の先生（伊藤利根太郎教授または助教授や講師）にご同伴いただき香川県の離島のハンセン病療養所大島青松園に一泊二日で行くことを年間行事としていました。これはサークルの部員勧誘を兼ねていました。学生時代の活動から先輩諸氏や公衆衛生学教室の諸先生と顔なじみとなっていました。当時サークル顧問は公衆衛生学教室の朝倉新太郎先生でした。活動には高知県や新聞社から助成金をもらっていました。また、健診機器や機材は阪大病院や機器メーカー、機材搬送のためのトラックはトヨタレンタリース大阪にご支援をしてもらいました。そのために公文書の依頼文が必要であることから公衆衛生学教室教授の印鑑をもらいに教室に毎年お願いに行っていました。これが結核に関わる前段の話です。

3. 学生時代の諸先生方に世話になる

在学中に便利に利用させていただいた公衆衛生学教室の諸先生方に全面的に頼らざるを得ない事態となりました。5年生時に腰痛と足のしびれがひどくなり阪大病院整形外科に受診したところ脊髄腫瘍が疑われました。卒業試験と国家試験を控えており入院手術は国家試験終了まで延期することと致しました。卒業試験は何とか終えたのですが、3月にある国家試験までは一人暮らしが困難な状況となり、京都三条の同級生の自宅に転がり込み、国家試験会場にも同伴していただきました。そのおかげで受験ができました。翌日阪大病院に入院し、手術を受けました。大手術となり脊髄損傷の後遺症もひどく医師から一生歩くことができないと宣告されました。そこを救ってくれたのが公衆衛生学教室の張知夫助教授でした。適切なりハビリ病院を探していただき2か月入院してリハビリに励み、何とか自立生活が可能になるまでになることができました。今後のことについても大阪府衛生部公衆衛生課

の矢内純吉課長に相談していただいて大阪府に入職することになりました。このことが結核と出会い、さらに亀田先生と井戸さんと出会うことにつながることとなりました。

4. 結核検診との出会い

大阪府は自治医科大学の第一期生を受け入れるために1978年に新採医師の4年間の初期研修制度を設けていました。その制度を活用し最初の2年間は大阪府立成人病センター調査部の藤本伊三郎先生の下で勉強することになりました。調査部はがん登録とがん対策を主としたところでした。集団検診部では胃がん検診や大腸がん検診をルーチンワークとしていたので、私も胃がん検診の業務に入りました。配属された部屋には、大島明先生（調査部長を経て、現在は大阪成人病予防協会専務理事）、日山興彦先生（阪神淡路大震災で死亡）、津熊秀明先生（自治医科大学一期生）、生方享司先生（当時は東神戸病院からの研修医、その後神戸市医師会理事、洪南クリニック院長退職）がいました。翌年に祖父江友孝先生（国立がん研究センターを経て大阪大学環境医学講座教授、現食品安全委員会委員）が鈴木隆一郎先生の下に来られました。

調査部では肝がんと肺がんの対策を主要な研究テーマとしていました。大島明先生から大阪府布施保健所の結核検診受検者台帳があるのでこれを使って肺がんのリスク評価をしてみたらどうかと声をかけて下さいました。結核検診の受検者をがん登録の記録と照合して肺がんのリスク評価と肺がんと診断された胸部X線写真を再読影して評価作業をすることをすることになりました。これが結核検診の胸部X線写真との出会いとなり、さらに保健所で結核登録票との出会いになりました。

5. 結核検診受検者の胸部X線間接写真を見る

結核検診受検者をがん登録と照合し肺がん罹患ないし死亡された方の胸部X線写真を探すこと、また患者の登録票を調べるために大阪府布施保健所（東大阪市西保健所、現西保健センター）に通うこととなりました。当時の保健所長は中村太郎先生、保健予防課長は上田博三先生（その後厚生技官になる）で、結核対策の詳細について時間がある時に教えてくれました。結核患者と診断されると医師は発生届け出を保健所に提出し、届け出を受けた保健所は登録票を作成していること、登録患者に保健師が面接して発見や診断までの状況を聞き取り、さらに登録後の通院治療や生活の様子、患者との接触者の情報と健診結果が登録票に記載されていることを知りました。そういう作業をしたことが結核対策の仕組みについてもっと知る必要があると思うことにつながりました。保健所やその職員のことについては学生時代に高知県土佐山田保健所（現高知県中央東保健所）に出入りしていたのでよく知っていました。当時所長の石川善紀先生に懇意にいただき所長の官舎に何度も泊めていただきました。また所長が不在の折には保健所の宿直室をおかりして寝泊まりさせていただいたことも何度かありました。しかし、保健所の結核業務の詳細に関わったのは今回がはじめてでした。

6. 保健所の結核診査協議会に関わる

調査部におられた自治医科大学一期生の津熊秀明先生は、府庁から要請され大阪府枚方保健所の月2回あった結核診査協議会の事前診査と診査結果を保健師に伝えるために出かけていました。この仕

事を引き継いで欲しいと言われ代わりに枚方保健所に月二回行くこととなりました。枚方保健所の結核診査協議会に提出された患者の胸部X線写真を事前にチェックし、診査会委員や保健師に説明するだけでは物足りなかったので、提出された胸部X線写真を鑑別診断し肺がん疑の者をピックアップして論文として発表いたしました。これが、羽曳野病院の山口亘先生や亀田和彦先生の目に止まり両先生とのお付き合いがはじまることとなりました。

7. 東京都清瀬市で結核のことを学ぶ

亀田和彦先生は結核に関心があるのであれば結核予防会結核研究所に行くべきと強く勧めて下さいました。府庁の担当課長に相談したところ行く必要はないと反対されましたが、調査部の藤本伊三郎先生が課長を説得して下さい 1982 年 1～3 月の 2 か月間東京都清瀬市の結核予防会結核研究所で勉強する機会を得ました。当時研修生は少なく 6 人程度でした。3 人は東京都から派遣された医師でした。他の 2 名は鹿児島県と高知県からの医師でした。森亨先生は茨城県水海道保健所から戻って疫学科長となられたばかりでした。帰阪すると藤本先生が、結核予防会大阪府支部の岡田静雄先生を紹介して下さい、週 1 回淀屋橋にある結核予防会の読影室に行き、集団検診の間接写真を岡田先生の読影前に読み、それをチェックしていただきました。岡田先生の読影スピードはとても速く毎日数千人の間接写真を読影しておられる読影の達人でした。その後、しばらくして亡くなられています。

8. 大阪府立羽曳野病院で結核患者を診療する

亀田先生は結核患者を診療した医師でないと一人前ではないと諭され 2 年間羽曳野病院に臨床医として勤務することとなりました。同時期に自治医科大学 4 期生の土生川洋先生がいました。外科医となるのが夢だったようですが認められず病理部に所属していました。亀田先生は若い医師を集めた結核勉強会を行っており、土生川先生とともに参加させられました。WHO のトーマンの書いた結核対策の Q & A の英語の本の輪読だったように思います。羽曳野病院では RICU の木村謙太郎先生と川幡誠一先生、研究部門の露口泉夫先生、高嶋哲也先生（免疫学）、さらに肺がんグループに所属していた高田実先生、工藤新三先生（現大阪社会医療センター附属病院医師）にご指導をいただきました。工藤先生は亀田先生の結核勉強会に参加され、肺がんグループの医師でしたが結核診療に熱心で亀田先生にとっても気に入られていたと記憶しています。亀田先生と仕事をすることが井戸さんにつながる事となりました。羽曳野病院後、大阪府茨木保健所及び松原保健所の保健予防課長をしました。大和川を挟んで大阪北部と大阪南部の保健所を勤務させていただいたことが大阪でも地域により保健所の雰囲気異なっていることがわかりました。保健所在職時は、的場さん、三浦さん、大町さん、近本さんの各診療放射線技師と一緒に仕事をしました。井戸さんとは面識はありませんでした。

9. 井戸さんと顔あわせることとなる

大阪大学医学部公衆衛生学教室の教授が朝倉新太郎先生から多田羅浩三先生に代わりしました。多田羅先生が就任されると電話がかかってきて大学の仕事を手伝いなさいと言われました。大阪府は異動に強く反対しましたがそれを多田羅先生が押し切り大学に戻されました。大学では結核を研究テーマ

とすることは認めてもらえませんでした。但し兼業として保健所の結核業務と関わり続けることとなりました。大阪府保健所は胸部 X 線検診車の「はと号」を使った定期外検診を実施していましたが、写真の読影医師が高齢化していなくなっていたからです。もと勤務していた診療放射線技師から読影に来て欲しいと懇願されたからです。

この頃、井戸さんは保健所の診療放射線技師でしたが、府庁の結核系の診療放射線技師の柳本さんが急死され、その代わりに保健所から府庁に異動されていたように思います。本庁では井戸さんは、大阪府医師会に委託して実施していた医師研修、養護教諭を対象とした結核研修会、結核予防会に委託して実施していた保健所の胸部 X 線写真の精度管理事業、さらに大阪結核病学会研究会（1967 年から実施）を担っていたように思います。そのため井戸さんから大阪府が実施している結核研修会の講師を頼まれるように会う機会が多くなりました。

10. 亀田先生がつくった大阪の結核コミュニティ

亀田先生は大阪の民間病院（日生病院）に勤務されてから、結核予防会結核研究所附属病院に移られていました。大阪市の撫井賀代先生（現豊橋市保健所長）のお母さん（看護師）と亀田先生が大阪の同じ民間病院で勤務していたようです。結核研究所附属病院に勤務していた亀田先生に結核研究所長の岩崎龍郎先生が、「大阪に戻って、大阪の結核の問題の解決のために尽力してくれないか」とお願いされたそうです。そのため亀田先生は 1974 年に大阪府立羽曳野病院の医師として赴任されることとなりました。羽曳野病院は 1967 年頃から治療期間の短期化の研究と実践に取り組んでいた全国有数の病院でした。山本和男院長は、「結核患者が入院を拒否する、また治療を自己中断するのは、結核の入院期間や治療期間が長過ぎるからである」と考えていたようです。亀田先生は、その山本院長の入院や治療期間の短縮化をする仕事を引き継いでいました。

また、岩崎先生に大阪に戻る折に、保健所の医師や保健師の教育が大事だからそれにも力を注いで欲しいと言われていたようです。そのためか亀田先生は保健所長や保健師との勉強会に熱心に取り組んでいらっしゃいました。久池井暢先生、堀井富士子先生、大塚順子先生の 3 人の女性保健所長も亀田先生が育てた先生で、当方にいろんなことを教えてくれました。亀田先生は、保健所長と勉強会をするだけではなく家族検診（現接触者検診）の共同研究を行い、学会発表や論文発表にも取り組まれていました。また亀田先生は保健師の結核教育に特別に取り組んでおられました。これには大阪府の保健師の方からの強い要望もあったようです。この時期の大阪府の公衆衛生マインドを持った保健師は亀田先生の結核勉強会のメンバーといっても過言ではない状況でした。

大阪府の保健所の医師や保健師の関わりについて記してきましたが、結核の医師人材の育成にも力を注いでいました。羽曳野病院（現地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪はびきの医療センター）を亀田先生が退職した後、病院長は露口泉夫先生となり、結核内科はアレルギー内科の高嶋哲也先生が引き継がれました。高嶋先生は結核専用の外来診療棟を建設しています。また、羽曳野病院で結核診療を担っている永井崇之先生や田村嘉孝先生は高嶋哲也先生が育てた医師です。

現在の結核勉強会には羽曳野病院の橋本章司先生が参加してくれていますが専門はアレルギー・免疫学の医師ですから露口泉夫先生や高嶋哲也先生の DNA を引き継いでおられるように思っています。

11. 診療放射線技師を超えた存在となる

亀田先生は大阪府の保健所長や保健師や羽曳野病院の結核臨床医を育てただけではなく公私にわたり深くつながり育てた人間は井戸武實さんだったと言っても過言ではないと思っています。1990年代の大阪府庁の結核行政は井戸さんと亀田先生が進めることとなっていたように思います。過去において府庁の兼務医師として笹岡明一先生、山口亘先生などがいらっしゃいましたが、井戸さんが府庁に異動された時には亀田先生に代わっていました。亀田先生の結核コミュニティーに井戸さんが入ることとなり、井戸さんは一人の診療放射線技師という存在からそれを超えて保健所長や保健師及び結核対策全般に関わることができることとなったように思えます。亀田先生は、公衆衛生マインドを身につけた人情味のあった不思議な先生でした。井戸さんが亀田先生に寄り添っている姿を拝見するたびに、井戸さんの育ての親、結核の師匠は亀田先生なのだなあと感じさせられていました。晩年は井戸さんが亀田先生を支える立場となり、亀田先生は奥さまが亡くなられてから一段と井戸さんを頼りに過ごされていました。亀田先生は2018年4月3日に享年89で逝去されました。

12. 大都市の結核対策の研究と対策が進められる

1995年の阪神淡路大震災、1996年の堺市学童集団下痢症が発生しました。これが、当方の人生に結核とは別に新たな公衆衛生への道を歩ませる想定外の出来事となりました。当時公衆衛生領域には健康危機管理という業務は位置づけられていませんでした。この事態に公衆衛生の人間として傍観して良いのかと教室の会議で問われ大学院生を連れて忙殺されることとなったからです。現在関西大学社会安全学部にいることになったのはこのことがあったからです。

1996年の秋頃時期を見計らったかのように結核研究所の森亨先生が「東京都台東区や新宿区、大阪市西成区など大都市の特定地域の結核罹患率が増加してきている。分担研究として大都市の特定地域の結核の実態調査と対策のあり方の研究を手伝ってもらいたい」という内容の電話をしてくれました。そのため、全国の特定地域を管轄する保健所の医師を集めた研究会を組織しました。皆さんが知っている研究協力者として加藤誠也先生（現結核研究所長）、神戸市保健所の白井千香先生（現枚方市保健所長）、大阪市浪速保健所の撫井賀代先生（豊橋市保健所長）、大阪府立公衆衛生研究所の田丸垂貴さんなどがいらっしゃいます。この時期はまた不動産バブルが崩壊して平成不況に突入していました。

13. ホームレス問題研究会とホームレス者の健康診断をはじめ

大阪のみならず全国的に都市部にはホームレス者（野宿生活者）が増え、大阪でも淀川や大和川の河川敷、大阪城公園、長居公園など至る所にブルーテントが広がってきていました。この事態に対し、四天王寺国際佛教大学（現四天王寺大学）の逢坂隆子先生はホームレス問題研究会を立ち上げられました。そして、研究費を獲得して野宿生活者の健康調査と健康問題の研究事業をはじめました。医師、保健師、診療放射線技師やボランティアを集めて野宿者の健康診断と健康調査を実施しようということとなりました。野宿者の低栄養、高血圧、糖尿病などに着目して健診をはじめたのですが、胸部X線検査で有所見者が多いことから次第に結核検診に特に力を注ぐこととなりました。これには保健行政担当者を巻き込むには結核問題が重要との共通認識があったこともありました。

14. あいりん地区の高齢者特別清掃事業就労者の結核検診をはじめる

2002年にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が制定され、河川敷や公園のホームレス者が少なくなりました。他方であいりん地区の野宿者はあまり減っていませんでした。そこで、あいりん地区を活動の場とすることとなっていきました。まず、大阪市が釜ヶ崎支援機構に委託して実施している「高齢者特別清掃事業」の就労者を対象として健康診断を行うことを計画いたしました。特別清掃事業を請け負っていた釜ヶ崎支援機構の指導員は、就労者の中に脳卒中で倒れる、循環器疾患で死亡する者がいることに困っていたことから循環器系疾患の健診の実施を望んでいました。結核検診の実施には積極的ではありませんでした。そこで、ホームレス問題研究会のテーマとして地域の団体を招いて結核問題が深刻であること、ホームレス者の健康問題として結核問題の解決がとても重要であることなどを繰り返し取り上げ、結核対策と結核検診の重要性について認識していただきました。初年度の健診では循環器系の検査が終わると、胸部X線検査を受けずに帰る人が多い有様でしたが指導員の理解を得たことにより次年度はほとんどの者が受検してくれるようになりました。また、初年度は間接撮影の検診車を使ったことから現像して読影するので日を要したことが結核疑いの多くの者を受診に結びつけることができなかった要員でした。そのため、次年度からCR検診車を使い、その場で結核が疑われると付き添って市立更生相談所（あいりん地区の特別の福祉事務所）に連れて行き、医療扶助の手続きを行い、病院に車を待機していただき確実に医療機関に結びつける体制をつくりました。その結果、有所見者や要精密検査の者のほとんどが医療機関につながることとなりました。健診費用は黒田研二先生の研究費から支出していただきました。黒田班の研究事業により、野宿者の結核問題は「どうやっても解決できない」という固く思い込んできた常識が見事に覆りました。

15. 大阪市があいりん地区を含めた結核対策基本指針を示す

大阪府は2001年に結核対策基本指針を策定しました。これは画期的なものです。その指針の中にあいりん地区の結核対策が、大阪市の結核対策の肝であると明確に位置づけて取り組むこととしてくれたからです。ここに至るまでに1996年に大阪市においても腸管出血性大腸菌の流行があり大阪市の保健担当局内に感染症対策室（室長は大阪市立総合医療センター感染症センターの阪上賀洋先生、室員同医療センター検査部長の巽陽一先生）が設けられたこと、さらに大阪市のあいりん地区の野宿者に赤痢が発生したこと（1998年5月～1999年4月に真性赤痢患者186名、疑似赤痢患者46名）がありました。大阪府は2008年の夏季オリンピックの誘致を目指していたこともありあいりん地区の結核問題や感染症対策に力を注がざるを得ない政治行政的な立場に立たされていました。大阪府は結核問題の解決のために、大阪市の結核の疫学分析を結核研究所に委託し、その報告書を作成してもらっていました。それに基づき関係者を集めた専門委員会を設置してようやく大阪市結核対策基本指針の策定と対策の評価委員会の設置に至ったのでした。結核研究所は、巽先生にもニューヨーク市の結核対策を視察してもらい、結核問題はあいりん地区であっても解決可能であることを認識させる働きかけをしていました。巽先生はその後大阪市立北市民病院長、市の病院局長になられています。

ところが、大阪社会医療センター付属病院が結核患者の診療をしないという状況には変化がなく、結核患者は域外の遠方の病院に入院させる対応が続いていました。大阪市は、大阪社会医療センター付属病院に補助金を出して、午後に内科外来の空いた診察室を使って菌陰性結核患者の「あいりんDOTS事業」を委託実施しました。大阪市保健所の保健師の有馬和代さん（現太成学院大学）が担当し、DOTSを行う看護師は大阪市が雇用した非常勤看護師でした。これまで大阪社会医療センター付属病院は菌陰性の患者であっても結核患者と診断される機械的に転院させていたことが少し前進したこととなりました。ところで、大阪市が地区で実施していた結核の「あいりん健診」は間接撮影のX線撮影車を使ったものでした。そのため、有所見者の多くが治療につながっていませんでした。そこで黒田研二先生の研究事業の資料を持って大阪市環境保健局長室に伺い、CR検診車を使うことにより有所見者のすべての者を医療に結びつけることができたことを説明させていただいたところ、大阪市はあいりん地区における結核健診をCR検診車に使ったものに切り替えてくれました。

16. NPOヘルスサポート大阪が設立される

あいりん地区の結核対策の大きな問題点として結核の治療期間が半年～1年と長いために治療脱落者が多いこととがありました。結核患者に治療終了するまで入院を強いていたことにより自己退院者が多いことにつながり、地区に戻っても結核患者を地域内で診療してくれる医療機関がないという状況が続いていました。つまり、一つの問題は、地区に帰った患者を受け入れてくれる宿泊施設がないこと、二つ目の問題は結核の外来診療を引き受けてくれる医療機関がないこと、三つ目の問題は、住所不定の患者はどこにいるのかわからない者もいて、保健所保健師だけでは服薬支援が難しい状況にある、ということが残されていました。そのためにその課題を克服するにはNPOをつくって結核対策を支援する必要があると判断しました。それがNPOヘルスサポート大阪（通称、HESO）でした。理事長は矢内純吉先生（元大阪府環境保健部長）になっていただき、代表は逢坂隆子先生でした。事務局長には西成区のホームレス者の社会的支援活動を行っていた西森琢さんに就いていただきました。

17. 大阪市保健所に結核対策担当医師が置かれる

大阪市は結核対策基本指針を策定してあいりん地区の結核対策を進めてくれるようになりました。しかし大阪市保健所内に結核対策を指導する専任医師がいなかったことが課題となっていました。当時、結核研究所長になられた石川信克先生は、東京都の新宿区・荒川区・台東区、大阪市の西成区の野宿者の結核問題に自ら関わられていました。また結核研究所におられた下内昭先生のご家族は神戸におられることから大阪市の結核問題に関わってもよいと考えていることがわかりました。経緯はわかりませんが石川先生と大阪市との話で下内昭先生が大阪市保健所の結核対策の責任者として赴任されました。NPOヘルスサポート大阪初代事務局長の西森琢さんを紹介して下さったのも下内先生でした。下内先生が赴任された時の保健所の担当課長は半野田孝郎さん（その後大阪市西区長を経て更生保護施設愛正会職員となられている）でした。半野田さんは事務職員を超えて熱い思いを持たれた方で、下内先生と一緒にあいりん地区の実態を見て回り野宿者の生活実態にあわせた結核対策に大きく進展させていただいたと思っています。この時期、NPOの事務局長に就任していただいていた西森琢さん

が退職されてしまいました。その後事務局長を引き受けていただいたのが井戸さんでした。

井戸さんはNPOヘルスサポート大阪の事務局長となると、あいりん地区の事務所に毎日通うことにより見事に地区に溶け込んできました。あいりん地区の諸団体の方々からも信頼される存在になりました。西成労働福祉センター、NPO釜ヶ崎支援機構、サポーターズハウス連絡協議会、大阪社会医療センター付属病院、大阪市保健所あいりん分室、大阪市立更生相談所、西成市民館、ふるさとの家等の関係職員と顔なじみとなられるようになられていました。また、あいりん地区の野宿者とも顔なじみとなられていました。NPOのDOTS事業は、大阪府を退職された看護師や保健師を雇用して実施していましたが、それらの看護職の相談役にもなっておられました。井戸さんは、あいりん地区の状況について多くの人々の要望を受け、関係機関を調整して研修や教育の機会を設けることにも取り組まれていました。あいりん地区で「水を得た魚」のように過ごされていた感じがしています。

18. あいりん地区における結核診療体制が進展する

あいりん地区の結核対策の課題として地区内に結核患者の診療をしてくれる医療機関がないことについては前述しました。発見患者は、和歌山県、市外の医療機関に治療完了するまで入院してもらっていました。そのために自己退院者が多く、再発者が多いという状況が続いていました。あいりん地区には大阪社会医療センター付属病院がありましたが、結核患者の診療はしてもらえない状況にありました。その理由は病院の医師は大阪市立大学医学部附属病院（現公立大阪大学附属病院）からの派遣に頼っており結核患者を診る病院となると結核の感染リスクが高くなると恐れ、来てもらえなくなると考えていたようでした。しかし、病院の受診者に結核合併患者が多くいることを自ら経験し、院内で結核外来が必要であると考えている医師がいることがわかりました。副院長兼整形外科部長の中田信昭先生でした。また、病院事務局の総務課長も創立時はアルコール依存症や結核患者の診療する病院としてスタートしたにも関わらず現在全く対応できていないことを何とかしないといけなかったと考えていることがわかりました。結核外来を行うことの理解が得られたのですが、結核診療を担当していただく医師を探す必要がでてきました。白羽の矢を当てたのが亀田先生でした。羽曳野病院を退職してから結核患者を診療したいと言っていると聞いていたので亀田先生にお願いしてみましたが、ホームレス者は言うことを聞いてくれないので診療したくないと断られてしまいました。しかし、井戸さんを通して繰り返し説得し、困ったら井戸さんがサポートするとの条件で引き受けていただけました。大阪社会医療センター付属病院で結核外来がはじまりました。しかし、社会福祉法人大阪自彊館の診療所医師が退職し、その後に亀田先生がいかれることとなり、結核外来を担う医師がいなくなりました。そこで当方が週1回月曜日に外来診療を担当することとしましたが、当方も関西大学に異動したことで続けられなくなりました。そこで後任を探すまでは齋藤忍院長（消化器内科、肝臓病の専門医）が外来を引き受けることとなり、その後市立大学呼吸器科を退職された工藤新三先生が担当してくださることとなり、現在に至っています。2019年に大阪社会医療センター付属病院が立て替え移転して新病院となりました。新病院には感染症病床4床が設置され、大阪社会医療センター付属病院は名実ともに結核診療に対応できる病院となり、あいりん地区の結核対策の中心医療機関となっています。隔世の感があります。

19. ニューヨーク市が新たな結核対策のイメージを提供してくれる

21世紀に入り、世界と日本の結核対策は大きく変化することとなりました。米国において大都市で結核患者数が激増したために WHO の DOTS 戦略の考え方と新しい生命科学の検査技術や診断技術を導入した結核対策が進められ、成功をおさめていました。結核研究所は、1999年に厚生省から予算を得て、先進地に学ぶ結核ツアーをはじめました。参加者は、国立の結核療養所の幹部医師、保健行政の医師及び保健師、結核予防会の医師及び保健師でした。毎年、ニューヨークやサンフランシスコに行って米国の新たに立て直した結核対策に触れさせ、時代が変化したことを実感させるという戦略だったように思われます。日本の結核対策に影響を与えている結核予防会、国立療養所、保健行政の幹部職員が同じ目で米国の結核対策を見聞きしたことが、保健所、病院、予防会の関係者が短期間に新しい結核対策のイメージを共有することにつながることとなりました。私も2000年のニューヨーク市の結核対策の視察旅行に参加させていただきました。

20. 結核対策を担う医師が現れる

大阪の結核対策は、当方が大阪府に入った時は保健所の結核業務の多くは羽曳野病院の山口亘先生が担っていました。山口先生は結核業務を担う後継者を育てることまでしていませんでした。それに対して亀田先生は結核対策を担う人間を育てることに力をついだ先生でした。亀田先生が羽曳野病院を退職された後、病院長となられた露口泉夫先生と内科部長になられた高嶋哲也先生が二人三脚で進めていかれました。高嶋先生の下に自治医科大学卒業の永井崇之先生、田村嘉孝先生などが結核診療を担うようになり、その後多くの自治医科大学の卒業生が結核診療を支えてきています。

田村先生は羽曳野病院での研修の後、大阪府庁の保健予防課の結核担当医師として配属されました。府庁の結核担当部署に専任の医師がいるようになったことがとても大きな意味がある時期でした。胸部X線検査所見を重視した結核対策から患者の結核菌検査所見を重視（抗酸菌同定検査、薬剤感受性検査）したものに劇的に変化した時期だったからです。大阪府は、保健所の所長、保健師、及び結核医療機関の医療従事者にDOTSと結核患者の治療評価のコホート検討会を行う体制を進める方針を示し、二か所の保健所でモデル事業をはじめようとしていました。DOTS事業と治療評価の検討会を進めていくには府庁に専任の担当医師がいることは不可欠でした。その役割を田村嘉孝医師が担うこととなりました。大阪府は、大阪北部の吹田保健所と大阪南部の和泉保健所をモデルとして結核患者の治療評価事業をスタートさせました。2002年頃のことだったように思います。それまで保健所の結核患者管理は地区担当の保健師に任せていましたが、保健所に感染症チームを設け、組織的に対応する体制とされました。それに加えて、保健師だけでなく保健所長、医師、診療放射線技師、事務職員に加えて、外部の医療機関や学識者を入れた結核患者の治療評価を行うこととなりました。それが数年後には全府下の保健所で実施されることとなりました。

21. 老舗の結核病院の刀根山病院が結核病床を廃止する

結核病院において結核を専門に診療する医師の確保が難しい状況となってきています。羽曳野病院

においては、亀田先生の後には高嶋先生が引き継ぎ、その後は永井先生と田村先生が引き継いでおられます。そのため、現在も羽曳野病院においては専任の医師で結核診療体制が維持されています。これに対して日本初の公立の結核療養所を起源とする刀根山病院においては結核病床が廃止され、また結核診療を行う専任の医師がいなくなっています。現在は、刀根山病院の結核外来は兵庫中央病院に異動された藤川健弥先生が担っています。

藤川先生はもともと刀根山病院の医師でした。刀根山病院に藤川先生が行かれることとなったのは刀根山病院の診療部長の前倉亮治先生のところに行き「刀根山病院は北摂地域の結核患者の診療を担う基幹病院であるのに主治医による結核患者の治療方針にバラツキがあるので院内で統制してほしい」とお願いにいったことが契機となりました。前倉先生は、院内の結核診療を統括するには病院には自分一人しかおらず、もう一人医師がいてくれたら行うと約束してくれました。それで藤川健弥先生の意向を伺い、藤川先生が刀根山病院の医師になられたのでした。結核勉強会にも藤川健弥先生は最初から参加してくれています。また、大阪府下の保健所の結核業務について保健所の保健師の結核患者支援に多大なる貢献をしてくれています。

22. NPO ヘルスサポート大阪が解散となる

あいりん地区の結核対策は、大阪市保健所及び分室、大阪社会医療センター付属病院、簡易宿泊所組合、NPO釜ヶ崎支援機構、西成労働福祉センターなどが協働して進める体制ができてきました。NPOヘルスサポート大阪は、人的体制や財政基盤が脆弱であり、組織運営や事務作業を井戸さんにだけ依存する状態となり、組織のあり方の見直しが必要となっていました。NPOが頑張れば頑張るほど大阪市はNPOを安い委託先としか見なさない官民格差の扱いの不満も高まっていたことがありました。解散するかどうかの喧々ガクガクの議論がありましたが、NPO設立当初の役割は終わったと判断され解散することとなりました。

23. 大阪公衆衛生協会を基盤としたSTBKワークショップがはじまる

財団法人大阪公衆衛生協会の話に移ります。大阪府知事に橋下徹さんが当選され、大阪府は外郭団体の大幅整理と補助金や事業委託の見なしが進められました。大阪公衆衛生協会の多くの事業は大阪府の委託事業でした。協会運営に府庁職員や市町村職員の手を借りていましたが、府庁の職員に支援していただくことも困難な状況となりました。事務所は大阪府の城東庁舎にいていたのですが、大阪府の補助金がカットされただけでなく、家賃や光熱費などの支払いを求められ、収入がなくなり、支出だけが増える状況となりました。安くて便利なテナントを探して移転することとし谷町筋のビルに移転することとしました。また一般社団法人として生き残るのか、公益財団法人として存続するのか、南波正宗会長（元大阪府医療監）と池田政雄事務局長（元大阪府統計課長）と専務理事の当方で議論を重ね公益法人化をめざすことを選択することとしました。そして新たな公益事業として「ストップ結核パートナーシップ事業」を位置づけました。大阪公衆衛生協会は1954年に大阪府と大阪大学の関係者により創設された歴史と伝統のある団体でした。公益法人課に併せて事務局長の池田さんは80歳を過ぎており、また奥さまがご病気で看病が必要となり、退職されることとなりました。

た。池田局長と後任を探し、最終的に井戸さんにお願いすることとなりました。

井戸さんはNPOヘルスサポート大阪の解散の後もう責任ある仕事はできないと言われていましたが、公益法人の協会事業の柱が「ストップ結核パートナーシップ関西」であり、結核の仕事であるとお願ひし、引き受けてもらいました。ちょうど、この時期に国立医薬品基盤研究所（現国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所）におられた松田岳彦さんが羽曳野病院免疫内科の松本智成（大阪府結核予防会大阪複十字病院）と二人で、私のいる関西大学の研究室に訪ねて来られました。結核勉強会をしたいとのことでした。井戸さんと相談して公衆衛生協会の事務所がある双馬ビル（現ソフィア大手前ビル、大阪市中央区谷町一丁目3番1号 4階）で「結核勉強会」を行うこととなりました。STBKは、事務局を大阪公衆衛生協会におかれていましたが、ワークショップの企画運営をする人員がいるわけではなかったので、結核勉強会がその役割を担うこととなりました。

24. 大阪公衆衛生協会が解散となる

公益法人化後、協会の会長は、南波正宗先生から高野正子先生に代わりました。高野先生は大阪府の保健所長を歴任されて高槻市保健所長をされておられました。退職とあわせて協会の会長にご就任をお願いいたしました。協会の事業としては中核市を集めた活動を進めたいと考えていたからでした。しかし、協会経営は、低金利で金利収入が激減、大阪府の財政再建のために補助事業削減、さらに企業経営が厳しく寄付金が激減し、毎年一千万円ほど基金を取り崩した運営をせざるを得ず、数年先に資金が枯渇することが現実となっていました。公認会計士より破綻するまえに清算処理した方がよいとの助言をいただきました。理事の中で解散手続の行政事務に精通されている清水秀都さん（現枚方市副市長）を清算人として2021年3月に解散手続が完了いたしました。高野先生には会長、井戸さんには事務局長となっていていただきましたが協会の解散作業に巻き込むこととなってしまい、申し訳なく思っています。

25. ストップ結核パートナーシップ関西はなぜつくられたのだろうか

「ストップ結核パートナーシップ関西」のはじまりは当方が大阪大学にいた時に二つのことが重なったことではじまりました。一つには、ストップ結核パートナーシップという活動をWHOがはじめ、日本でも2007年に「ストップ結核パートナーシップ日本」が設立されていました。これは「ストップ結核ジャパンアクションプラン」に基づき外務省、厚生労働省、（独）国際協力機構、（公財）結核予防会、製薬産業の官民連携により国内外の結核対策を促進し、結核の世界的流行を終息のための啓発するアドボカシー団体として設立されたものでした。現在、ストップ結核パートナーシップは、UNOPS（国連プロジェクトサービス機関）主催のStop TB Partnership（本部ジュネーブ）のパートナーシップ組織となっています。

当方に、「ストップ結核パートナーシップ日本」の森亨先生と田中慶司先生（元厚生労働省健康局長）から「大阪でも活動を行ってもらえないか」と相談してこられました。二点目として、当時、当方は大阪大学を一旦退職して2007年度に大阪大学大学院医学系研究科が文部科学省の「健康医療問題解決能力の涵養の教育プログラム」を進めることとなり、このプログラムの特任教授になりました。

た。新しい大学院の社会人学生として白井千香先生（神戸市保健所）、田村嘉孝先生（羽曳野病院）、藤川健弥先生（刀根山病院）などに2008年4月に入学していただきました。この大学院のプログラムの一環としてストップ結核パートナーシップを行うことを考えたのです。2010年に大阪大学銀杏会館でSTBKの初会合を開催いたしました。会には大阪府内だけでなく、兵庫県、和歌山県などの近畿圏の保健医療関係者30人くらいが集ってくれました。当方が、2010年4月に関西大学に異動したことにより、2011年度のSTBKのイベントは関西大学で行うことといたしました。2011年度は、「国際シンポジウム～世界から関西の結核を考える～」をタイトルとして開催いたしました。主催はストップ結核パートナーシップ日本・関西大学社会安全学部、後援を日本リザルツにいただき、外務省・厚生労働省・大阪府・大阪市・財団法人大阪公衆衛生協会・財団法人結核予防会大阪府支部に協賛していただきました。会場の関西大学のミューズホールに200人以上の者が参加して下さいました。元大阪市長の關淳一先生も参加され発言をして下さいました。国際シンポジウムとして開催したので、WHOの元結核対策部長のJacob Kumaresanさんや米国ニューヨーク市の元結核対策部長のDr. Paula Fujiwaraさん、フィリピンのDr. Roderick Pobleteさんに講演をしていただきました。その後、駿田直俊（国立病院機構和歌山病院副院長）、田所昌也（兵庫県健康福祉部健康局疾病対策課長）、松本健二（大阪市保健所感染症対策監）、井戸武實（NPOヘルスサポート大阪事務局長）、田丸重貴（大阪府立公衆衛生研究所感染症部細菌課主任研究員）、大井恭子（滋賀県甲賀健康福祉事務所健康衛生課主任保健師）、高山佳洋（大阪府保健医療部医療監）など近畿地方の結核に関わる保健行政や医療機関・研究所の方にご報告いただきました。下内昭（財団法人結核予防会結核研究所副所長）にもシンポジウムの外国人の発表の翻訳やまとめをしていただきました。

26. 大阪公衆衛生協会のSTBKワークショップの歩み

2012年度以降は大阪公衆衛生協会主催として開催することとなりました。2012年は大阪公衆衛生協会が主催し、ストップ結核パートナーシップ日本、国際NGOリザルツの後援をいただき、大阪キャッスルホテルで国際セミナーとして開催しました。メインゲストとしてWHOのDOTS戦略を立案された古知新先生に講演をしていただきました。政治、行政、民間の世界の人々に参加いただくことができました。2013年度は大阪公衆衛生協会が公益法人となつてからの初めての開催となりました。そのため「ストップ結核パートナーシップ関西」の結核セミナーは2013年度を第一回としています。開催場所は大阪病院年金会館でした。2014年は第2回結核セミナーとして、BCG研究所やキアゲン（QIAGEN）の支援の下、「あべのハルカス」で開催しました。2015年度はあいりん地区の結核対策に焦点をあてて西成区の西成市民館で第3回結核セミナーを開催しました。

2020年に新型コロナウイルス感染症が流行したことで勉強会はZoomを使って開催することとなりました。大阪公衆衛生協会事業としてSTBKのセミナーが軌道にのつたところでしたが財政事業の悪化の理由で大阪公衆衛生協会が2021年度に解散となりました。そのため、STBKの事務局を2023年に大阪大学医学部公衆衛生学講座教授に就任された川崎良先生にご無理をお願いして教室にしばらく置かせていただくこととなりました。2023年度及び2024年度のSTBKのワークショップは阪大公衆衛生学教室を事務局として開催することとなりました。新たな体制となった中での井戸さん

の訃報でした。そこで、2025年度のSTBKの第12回ワークショップは井戸さんを偲ぶ会として重ねて開催することといたしました。

27. おわりに

大学を卒業してからはじめて結核との関わりがはじまったと思っていましたがこれは大きな間違いでした。私の祖父母、つまり父の両親は父が小学生の時に幼児の第2人を残して結核で死亡していたことがわかりました。昭和初期の石川県は全国一結核の死亡率が高い地域であったからでした。親戚夫婦が家に移り住んで父と兄弟を育て、そこにおじさん夫婦の子ども達と私の兄弟が同じ兄弟姉妹のように生活するという不思議な家庭環境でした。先祖のことを何も知らずに大阪に出てきて、大阪で結核の仕事に関わることになったのでした。結核の仕事をさせるために誰かがシナリオをつくっていたのかと疑うような人生となりました。大阪で出てきたことによって、卒業後に亀田先生、井戸さんをはじめ多くの人々とつながることとなりました。

ところで、井戸さんの追悼文集の作成を提案されたのは三浦康代さんです。「井戸武實」、「結核」ということとあわせて現在の結核勉強会までの流れについて書かせていただきました。井戸さんの追悼文を書く作業をはじめると、井戸さんの追悼を超えて、これまで私自身が大阪で結核に関わってきた方々の顔が次々に浮かび上がってきたので、そのことも書かせてもらうこととなりました。井戸さんを追悼するにはそのような人々のことも思い出して書く必要があると考えたからです。しかし、思い違いも多々あると懸念しています。

井戸さんは、「無理です」、「できません」と言わない人でした。そのため、ついつい診療放射線技師の枠を超えた役割と業務を担わせることとなりました。井戸さんには実に多くのことを頼ってしまいました。これまでの井戸さんのご貢献に深く感謝を申し上げます。



井戸さんが大阪府職員の最後の時期の写真（2006年9月26日）（写真撮影：高鳥毛敏雄）
茨木保健所管内の飯場の接触者健診を行うために井戸さんが藤井寺保健所から「はと号」を持ってきて夜間健診を行っている。
写真左は大阪府茨木保健所診療放射線技師島田真吾氏（現大阪府池田保健所地域保健課長）

Ⅲ. 年表（1945—2025）

井戸武實の歩みと社会の動き

三浦康代

元奈良学園大学保健医療学部教授

| 西暦 | 和暦 | 満年齢 | 井戸武實の歩み | 社会の動き | |
|------|------|-----|---|--|--|
| 1945 | 昭和20 | 0 | 1月1日 井戸武實（いどたけひろ）和歌山県にて男7人兄弟の4男として誕生（「戦中の一番世の中が大事なときに誕生」「父が早世したが大家族で実良かった」と自身のエンディングノートに表現） | 三河地震/広島・長崎に原爆投下/ボツダム宣言受諾・終戦/枕崎台風/GHQの指示により、厚生省は引揚に伴う結核患者や急性伝染病への対処に追われた/結核予防会第一健康相談所がレントゲン器械で模範地区住民検診を開始/終戦直後の総人口約7200万人 | |
| 1946 | | 21 | 1 | 結核予防会が東京焼け跡で無料結核検診を開始し有所見率平均10%/GHQが厚生省に対して「結核患者及びその疑いのある者の検診と隔離」の命令を発す/昭和南海地震 | |
| 1947 | | 22 | 2 | GHQが「結核対策強化に関する覚書」を発す/労働基準法制定/福井地震/保健所法全面改正（保健所は人口10万ごとに都道府県・政令市に設置、保健婦の増員）/農林省が開拓保健婦制度開始/結核予防会主催の街頭検診から全国的な結核予防国民運動に発展/結核が死因順位の第1位(1950年まで) | |
| 1948 | | 23 | 3 | 結核予防会結核研究所が第1回結核専門医講習開始/予防接種法公布/保健婦助産婦看護婦法制定/保健婦駐在制度開始が香川県・高知県・沖縄県、和歌山県等で実施（1994年まで続く） | |
| 1949 | | 24 | 4 | 湯川秀樹博士に日本人初のノーベル賞/BCG接種が法制化、30歳未満に毎年1回ツベルクリン反応検査を受け、BCGによる免疫獲得ができない場合は繰り返しBCG接種/結核予防週間が全国的に10/25～10/31に統一され、全国各地で街頭無料検診、街頭相談等を実施/小川辰次が結核菌培養小川培地を作製 | |
| 1950 | | 25 | 5 | 1950年～1970年スモン病多発/朝鮮戦争勃発/社会保障審議会が結核対策について勧告（被用者については年1回以上の定期健康診断、被用者以外の6～30歳までの一般住民は毎年1回健康診断を受けること）/平均寿命男59.6歳、女63.0歳 | |
| 1951 | | 26 | 6 | 本宮町立静川小学校入学（1989年に休校後も木造平屋建て校舎が残り、現在は朝ドラのロケ地にも活用） | 結核予防法制定/診療エックス線技師法制定/結核予防会結核研究所が医師、レントゲン技師及び保健婦の再教育を実施/結核予防法全面改正(予防接種、結核健診、適正医療の普及の3本柱①結核健診受診者の範囲の拡大②BCG予防接種は30歳未満の国民に毎年行うように拡大③結核患者登録④公費負担の実施)/結核予防会と保健所等がレントゲン自動車でのX線間接撮影による結核集団検診を盛んに実施/サンフランシスコ講和条約調印/日米安全保障条約調印/結核が死因順位第2位となる |
| 1952 | | 27 | 7 | | X線間接撮影による結核健診受診者1,240万人超、BCG接種1,000万人超/「鉄腕アトム」連載開始 |
| 1953 | | 28 | 8 | | テレビ放送開始/南紀豪雨/町村合併促進法により市町村数が3分の1に/「大坂公衆衛生の会」発足/厚生省が第1回結核実態調査実施（結核患者数は国民の3.4%、要入院者は1.6%と推定）/保健所保健婦の家庭訪問件数がピーク/結核が死因順位の第5位となる |
| 1954 | | 29 | 9 | | 「大坂公衆衛生協会」創設/消滅丸台風/厚生省の「検診用エックス線聴診器」が、レントゲン自動車のエックス線防護に万全の処置をとる必要があることを指摘し事態は著しく改善/固定電話普及率1% |
| 1955 | | 30 | 10 | | 結核予防法改正（健診の範囲拡大、患者の早期把握、療養施設の拡充、医療費負担の軽減）/国民総医療費の26.8%が結核関連/森永ヒ素ミルク中毒事件/高度経済成長期始まる/高齢化率5.3% |
| 1956 | | 31 | 11 | | 国際連合に加盟/蚊・ハエ撲滅運動開始/漫画「鉄人28号」連載開始 |
| 1957 | | 32 | 12 | 本宮町立静川（うけがわ）中学校入学（1999年に統合し本宮中学校となる） | 南極に昭和基地、気象観測開始/結核予防法改正（健康診断、ツバ検査及び予防接種に要する費用は全額公費負担となり、健康診断は乳幼児を除く全国民が年1回受けけるように義務付け） |
| 1958 | | 33 | 13 | | 東京タワー完成/厚生省が第2回結核実態調査実施（前回調査より重症者は25%減少、入院を必要とする者35%減、患者のうち医療を受けている者75%）/結核予防会に全国競輪輸送者協議会、日本自転車振興会、競輪施設協会の3団体から1億円の寄付（各都道府県に高性能のレントゲン車配車） |
| 1959 | | 34 | 14 | | 厚生省が全国216ヵ所の保健所管轄地区を「結核対策特別推進地区」に指定し、一般住民に対する検診の強化、患者管理の徹底による完全受療、完全治癒、濃厚感染源の一掃を目標として、エックス線自動車の整備を図る/皇太子明仁親王と美智子さま御成婚/伊勢湾台風/大阪府池田保健所が保健文化責受責 |
| 1960 | | 35 | 15 | 和歌山県立南紀高等学校入学 日中は和歌山県玉置病院にて勤務 | 60年日米安全保障条約改定反対闘争/池田内閣「所得倍増計画」発表/カラーテレビの放送開始/ 昭和35年以降、十数年は4～5割の国民が結核健診を受け、早期に診断された結核患者数は230万人以上であった/1960年代「保健所黄昏論」がささやかれる |
| 1961 | | 36 | 16 | | 結核予防法改正（患者管理制度により、保健所が発見された全患者の登録票を整備、患者の状況把握、確実な治療と治癒に持ち込む。排菌している患者の医療費は8割まで国庫負担）より入院患者数は急増/第1次釜ヶ崎暴動/第2室戸台風/災害対策基本法成立/国民皆保険制度の実現/平均寿命男65.4歳、女70.3歳 |
| 1962 | | 37 | 17 | | 三種の神器「白黒テレビ・冷蔵庫・洗濯機」の消費ブーム/テレビ普及率48.5%/ツイストが大流行/ 大阪府が「財団法人西成労働福祉センター」設置/売血による黄色い血問題深刻化/ BCG接種等による発病予防、結核健診の完全実施により、新登録患者数が6年ごとに半減 |
| 1963 | | 38 | 18 | | 第3回結核実態調査(要医療者減少)/老人福祉法制定/坂本九「上を向いて歩こう」アメリカで大流行 泉佐野・尾崎両地区で腸チフスの地域流行（患者104名） |
| 1964 | | 39 | 19 | 和歌山県立南紀高等学校卒業「故郷を出て定時制高校に通いながら、昼は病院でレントゲン撮影、臨床検査、薬の調剤、手術の助手もした。高校では健康に恵まれ4年間皆勤で知事より表彰された」と自身のエンディングノートに表現/大阪府専門学校入学（日中は湯川胃腸病院に勤務） | ライシャワー事件/新潟地震/東海道新幹線開通/東京オリンピック開催/真性コレラで死亡者 |
| 1965 | | 40 | 20 | | 母子保健法制定/ 富田林市、河内町で集団赤痢発生(220名)/この頃より水洗便所急増/平均寿命男67.7歳、女72.9歳 |
| 1966 | | 41 | 21 | 大阪府療養専門学校卒業/ 11月 大阪府に入庁し本庁勤務（衛生部保健予防課） 診療エックス線技師（のちに診療放射線技師）として着任し、結核対策業務および医療法による医療監査員業務に従事 | 敬老の日が祝日となる/「釜ヶ崎」を「あいりん地区」と改称 豊中のすし店で集団食中毒(患者1008名) |
| 1967 | | 42 | 22 | 大阪府藤井寺保健所に異動/ 3学年上の静香さんと恋愛結婚 | BCG接種法が疫内接種法から経皮接種法（9本の管計で2ヵ所に圧刺）に変更となり、接種局所の反応は極めて軽微になり好評。乳幼児では85～90%、学童では95%以上が接種/総人口1億人突破/公害対策基本法公布 |
| 1968 | | 43 | 23 | | 診療エックス線技師法が一部改正され新たに診療放射線技師法制定/第4回結核実態調査（要医療者減少）/三徳円事件/イタイイタイ病を公害疾患と認定/大阪府下で日脳患者多数（死亡156名） |
| 1969 | | 44 | 24 | 長女誕生 | 東名高速道路開通 |
| 1970 | | 45 | 25 | | 大阪万国博覧会開催/70年日米安全保障条約改定反対闘争/あいりん労働福祉センター（あいりん総合センター）完成/大阪社会医療センター附属病院開所（初代院長本田良寛医師）/水質汚濁防止法制定/開拓保健婦は農林省から厚生省へ移管され、都道府県の保健婦となる/全国高齢化率7.1%/生涯未婚率男性1.7%・女性3.3% |

（イラスト：よもぎもち https://www.instagram.com/s_m_maikodayo/）

| 西暦 | 和暦 | | | 井戸武實の歩み | 社会の動き |
|------|------|-----|----|--|--|
| | | 満年齢 | | | |
| 1971 | 昭和46 | 26 | | | 悪臭防止法制定/固定電話普及率30% |
| 1972 | | 47 | 27 | 長男誕生 | 冬季札幌オリンピック開催/山陽新幹線開通/沖縄返還/ 難病対策要綱策定/老人福祉法一部改正（老人医療の無料化） |
| 1973 | | 48 | 28 | | 第一次オイルショック/第5回結核実態調査（要医療者減少、東日本に比して西日本の有病率が高い） |
| 1974 | | 49 | 29 | | 小野田寛郎少尉ルパン島より29年ぶりに帰国/結核予防法改正（毎年実施していた検診を、患者の発生状況、エックス線被曝による健康影響等を考慮し、小中学校の検診回数の削減、BCG接種の定期化(4歳未満、小1、中2の3回)）2003年まで続く |
| 1975 | | 50 | 30 | 大阪府松原保健所に異動 | 日本で初めてCT：Computed Tomography（コンピュータ断層撮影）が導入される/全国高齢化率7.9% |
| 1976 | | 51 | 31 | | ロッキード事件 |
| 1977 | | 52 | 32 | | 日航機ハイジャック事件 |
| 1978 | | 53 | 33 | | 日中平和友好条約/西成労働福祉センターが「センターだより」創刊/全国水道普及率90%以上に拡大 |
| 1979 | | 54 | 34 | | WHO天然痘終結宣言/第二次オイルショック |
| 1980 | | 55 | 35 | | 平均寿命男73.5歳（世界一位）、女78.9歳（世界二位） |
| 1981 | | 56 | 36 | 大阪府泉大津保健所に異動 | 中国残留孤児 初来日/アメリカでエイズ患者発生 |
| 1982 | | 57 | 37 | | 「大阪公衆衛生協会」（梶原三郎協会長当時）が「第34回保健文化賞」受賞/ 老人保健法公布/全国下水道普及率30%以上、全国水洗便所普及率約60%（浄化槽を含む） |
| 1983 | | 58 | 38 | 法改正により診療放射線技師となる | 診療放射線技師法改正により、診療エックス線技師は廃止され、診療放射線技師に一本化/ 老人保健法施行/三宅島 大噴火 |
| 1984 | | 59 | 39 | | グリコ・森永事件 |
| 1985 | | 60 | 40 | | 「大阪公衆衛生協会」が財団法人となる/ 日本航空123便墜落事故/日本でエイズ第1号患者報告/全国高齢化率10.3% |
| 1986 | | 61 | 41 | | チェルノブイリ原発事故発生 |
| 1987 | | 62 | 42 | | 国鉄民営化/精神保健法（旧精神衛生法）成立 |
| 1988 | | 63 | 43 | | 青函トンネル開業/リクルート事件 |
| 1989 | 平成 1 | 44 | | 大阪府富田林保健所に異動 | 消費税3%開始/エイズ予防法施行/大阪にてアスベスト調査開始 |
| 1990 | | 2 | 45 | | 「2000年までにフロン全廃」（モントリオール議定書）/鶴見緑地で国際花と緑の博覧会開催/ 大阪社会医療センター付属病院開所（外来診療業務開始）/平均寿命男75.9歳、女81.9歳 |
| 1991 | | 3 | 46 | 大阪府保健衛生部保健予防課結核係主査として大阪府全体の結核対策に従事し、府下の病院・診療所などに在勤するすべての医師に結核の基礎から臨床、対策にいたる研修の企画実施に尽力(2000年まで) | バブル経済崩壊/雲仙普賢岳火砕流/リサイクル法公布/脳死臓器が脳死者から臓器移植を認める答申 |
| 1992 | | 4 | 47 | | 毛利衛ら宇宙へ（日本人科学者初）/世界のHIV感染者1000万人突破/育児休業法施行/国内初の顕微受精による赤ちゃん誕生/国家公務員の完全週休2日制スタート/学校週休2日制スタート |
| 1993 | | 5 | 48 | | 北海道西南沖地震/環境基本法成立（公害対策基本法廃止）/地球温暖化防止条約発効/ 外国人技能実習制度スタート/皇太子徳仁親王と雅子さま御成婚/出生率過去最低/離婚率過去最高 |
| 1994 | | 6 | 49 | | 松本サリン事件/1947年制定の保健所法が地域保健法に改正（保健所数の半減等）/保健婦駐在制度廃止/ 関西国際空港開港 |
| 1995 | | 7 | 50 | | 阪神・淡路大震災（M7.3）/地下鉄サリン事件/育児・介護休業法成立/全日空機ハイジャック事件/ 全国高齢化率14.5% |
| 1996 | | 8 | 51 | | 携帯電話1000万台突破/腸管出血性大腸菌O-157の全国的な流行/堺市でO157大集団発生/大阪府下のHIV感染者が100人を突破 |
| 1997 | | 9 | 52 | 初孫誕生 | 地域保健法全面施行/神戸連続児童殺傷事件/地球温暖化防止京都会議/臓器移植法施行/消費税5%に引き上げ |
| 1998 | | 10 | 53 | | 郵便番号が3桁から7桁に/長野冬季オリンピック開催/明石海峡大橋開通/和歌山毒物カレー事件/ あいりん地区の野宿者に赤痢発生（1998年5月～1999年4月に真性赤痢患者186名・疑似赤痢患者46名） |
| 1999 | | 11 | 54 | | 感染症法施行/「結核緊急事態宣言」発令/ダイオキシン対策法成立/ 大阪市が大阪社会医療センター付属病院の場を借りて看護師による来所型のDOTS開始 |
| 2000 | | 12 | 55 | 大阪府藤井寺保健所地域保健課放射線検診科長（課長補佐）に異動 エックス線自動車（はと号）の運用に尽力 | 大阪府が22保健所7支所から15保健所14支所へ再編/大阪府に全国初の女性知事誕生/移動電話が固定電話を抜く/ 介護保険制度スタート/児童虐待防止法施行/交通バリアフリー法成立/結核罹患率（人口10万対）31.0 |
| 2001 | | 13 | 56 | 大阪市が「第1次大阪市結核対策基本指針」を(STOP結核作戦)策定、あいりんの結核罹患率（10万対）は2009年で50以下に半減し目標は達成された 二人目の孫誕生 | 「大阪ホームレス健康問題研究会」が発足(発起人 黒田研二・逢坂隆子)/「ホームレスの死亡調査(大阪ホームレス研究会と大阪府監察医事務所が共同で2000年に大阪市内で発生したホームレスの全数調査実施)/大阪府があいりんで地域型DOTS開始/大阪教育大学付属池田小学校児童殺傷事件/アメリカで同時多発テロ |
| 2002 | | 14 | 57 | | 保健婦助産婦看護婦法一部改正し保健師に名称変更/ホームレス自立支援特別措置法成立 住民基本台帳ネットワークスタート/北朝鮮による拉致被害者のうち5人が24年ぶりに帰国 |
| 2003 | | 15 | 58 | | 大阪府が14保健所7支所に再編/小学生・中学生に対するツツとBCG接種廃止/受動喫煙防止を義務付けた健康増進法施行/SARSを新興感染症に指定/大阪市高齢者特別就労（清掃）事業従事者健康調査（2003～2005年） |
| 2004 | | 16 | 59 | 三人目の孫誕生 | 大阪府が14保健所に再編（支所の廃止）/拉致被害者の子どもたち5人が帰国/新潟県中越地震/発達障害者支援法成立/ノロウイルス感染の集団発生多発 |
| 2005 | | 17 | 60 | 大阪府藤井寺保健所定年退職後、2年間同保健所にて再任用職員となる | WHO勧告によりBCG接種対象者を生後6か月までに変更/JR福知山線脱線事故で107名死亡/合計特殊出生率1.26/全国高齢化率21.0% |

| 西暦 | 和暦 | 井戸武實の歩み | | 社会の動き | |
|------|------|---------|--|---|--|
| | | 満年齢 | | | |
| 2006 | 平成18 | 61 | 10月 NPO法人 HEALTH SUPPORT OSAKA (HESO) が設立される 大阪市がHESOの要請でCR (Computed Radiography) 検診車を用いた結核健診開始 (結核の即日判定、即日治療開始) | ライブドアショック//1951年から続いた結核予防法廃止/高齢者虐待防止法施行/ 自殺対策基本法成立/飲酒運転による交通事故が多発/生活保護世帯初めて100万超 | |
| 2007 | | 19 | 大阪府藤井寺保健所退職 井戸武實はNPO法人 HEALTH SUPPORT OSAKA (HESO) 常任理事兼事務局となる | 結核予防法が感染症法に併合(結核は二類感染症に分類)/がん対策基本法施行/飲酒運転ドライバーの罰則強化/ 郵政民営化開始/原油価格、穀物価格の高騰/平均寿命男79.2歳,女86.0歳 | |
| 2008 | | 20 | 63 | 後期高齢者医療制度/メタボ対策義務化始まる/秋葉原通り魔事件/リーマンショック/ 結核予防会結核研究所が結核菌バンク、臨床・疫学部および疫学情報センター開設/大阪府のはと号全廃 | |
| 2009 | | 21 | 64 | 国内初の新型インフルエンザの感染者確認/裁判員制度スタート/ 高齢ドライバーの免許更新で認知機能検査義務付け | |
| 2010 | | 22 | 65 | 診療放射線技師法一部改正 (診療放射線技師の業務に「画像診断における読影の補助や放射線検査等に関する説明や相談を行うこと」が新たな役割として追加) / 待機児童過去最多/子ども手当支給開始/家畜の伝染病口蹄疫で宮崎県が非常事態宣言/東北新幹線全線開通 | |
| 2011 | | 23 | 66 | 大阪市が「第2次大阪市結核対策基本指針」策定、今後10年間で結核罹患率を半減する目標 (人口10万人あたり25人以下にする) を設定。HESOが「平成23年度即立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業西成区に住む単身高齢者の健康生活支援事業」を実施。井戸は翌年、103ページ分の報告書作成 | 日本のGDP世界3位に後退/東日本大震災 (M9.0) /福島第一原発事故/九州新幹線全線開通/ 小学校の英語必修化/生肉ユッケで食中毒5人死亡/生活保護受給者200万人超(59年ぶり) /復興基本法成立 大阪社会医療センター附属病院が結核の核酸増幅検査 (TRC法) 開始、翌年にはLAMP法導入 |
| 2012 | | 24 | 67 | 井戸武實が読売新聞社より「第40回大阪府医療功労賞」受賞 | 大阪府保健所が13に編成/東京スカイツリー開業/100歳以上5万人超過去最多 |
| 2013 | | 25 | 68 | 3月 NPO法人 HEALTH SUPPORT OSAKA (HESO) 解散 4月「財団法人大阪公衆衛生協会」が公益財団法人となり、井戸武實が事務局長に就任 釜ヶ崎支援機構による「高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査」を指導、実施 | BCG接種対象者を1歳未満に変更/障害者総合支援法施行/いじめ防止対策推進法成立/富士山世界文化遺産登録/ 西成労働福祉センターが公益財団法人化/ 和食がユネスコ無形文化遺産に登録/ 改正生活保護法・生活困窮者自立支援法成立 |
| 2014 | | 26 | 69 | 高島毛敏雄の助言で1年間の準備期間を経て有志による第1回「大阪結核勉強会」が発足し、井戸武實は事務担当。「ストップ結核パートナーシップ関西」第1回ワークショップ開催にも関わり、以後2024年の第11回開催まで尽力 | 大阪府保健所が12に再編/診療放射線技師法の一部が改正され、業務内容が拡大/ 大阪市に日本一高いビル「あべのハルカス」開業/消費税8%に引き上げ/ 難病法成立/広島山砂災害・御嶽山噴火 |
| 2015 | | 27 | 70 | 任意団体「ネパールの医師になりたい少女を支援する会」実行委員長としてネパールの女子高生が現地大学医学部への進学に必要な学費250万円を目標に募金活動開始 | 振り込め詐欺被害額が初めて500億円超/女性活躍推進法成立/医療事故調査制度スタート/マイナンバー法施行 |
| 2016 | | 28 | 71 | この頃よりFacebook開始 | 北海道新幹線開通/電力自由化スタート/障害者差別解消法施行/熊本地震/平均寿命男80.5歳,女86.8歳 |
| 2017 | | 29 | 72 | | 大阪日日新聞が大阪社会医療センター附属病院び本田良寛初代院長の連載記事全9回/ 生活保護受給者・生活保護不正受給とも過去最多 |
| 2018 | | 30 | 73 | | 大阪府保健所が11に再編/子ども食堂急増/成人年齢18歳に引き下げる改正民法成立/西日本豪雨/ 民間企業の障害者雇用率過去最高に/埼玉熊で観測史上国内最高気温41.1℃/ いじめ過去最多/不登校14万人超過去最多/子どもの自殺が平成で最多 |
| 2019 | 令和 1 | 74 | 「新あいりんシェルター居場所権利利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査」に参加 | 大阪府保健所が10に再編/消費税10%に引き上げ (軽減税率対象物8%) /12月に中国の武漢市で原因不明の肺炎が集団発生 (翌2020年1月に新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) であることが判明) /あいりん総合センター閉鎖/西成労働福祉センターが移転 | |
| 2020 | | 2 | 75 | 大阪結核勉強会が大阪社会医療センター付属病院新病院を見学 (新病院は旧病院から南に約300mの位置に新築移転。新たに設置された陰圧室や、結核検査の採痰時に飛沫の拡散を防止する採痰ブース等を見学。1階には病院の歴史を示す資料コーナーがあった) | 大阪府保健所が9に再編/新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し指定感染症 (2類相当) に指定、保健所が新型コロナ発熱患者相談窓口開設、感染拡大防止のため小中高が一斉休校(2月)緊急事態宣言(4月)/東京五輪が翌年に延期/レジ袋有料化/結核予防会結核研究所が入国前結核スクリーニング精度管理センター設置/大阪社会医療センター付属病院新病院開院/結核罹患率 (人口10万対) 10.1/生涯未婚率男性28.3%・女性17.8% |
| 2021 | | 3 | 76 | 3月 「公益財団法人大阪公衆衛生協会」解散 | 新型コロナウイルスワクチン接種開始/大谷翔平選手が米大リーグの最優秀選手に/ 結核罹患率 (人口10万対) 9.2で低基盤入り |
| 2022 | | 4 | 77 | 「ネパールの医師になりたい少女を支援する会」で支援したネパールの学生が現地大学医学部を卒業 | ロシアによるウクライナ侵襲開始/冬季北京オリンピック・パラリンピック開催、日本勢のメダル数最多/熱海で大規模な土石流災害/東京オリンピック・パラリンピックが無観客で開催/結核罹患率 (人口10万対) 8.2 |
| 2023 | | 5 | 78 | 4月 第47回全国吟詠コンクール大阪府東連合大会一般三部優勝 吟題「春夜洛城に笛を聞く」 5月 大阪府大会出場 8月 近畿決勝大会出場 エンディングノートを作成 「大切な思い出」の欄に「人生に悔いなし!!書き切れない!!」と表現 | 新型コロナウイルス感染症は5類感染症 (定点把握感染症) に移行、保健所の新型コロナ発熱患者相談窓口終了/ 阪神タイガース38年ぶりの優勝/合計特殊出生率1.20過去最低/結核罹患率 (人口10万対) 8.1 |
| 2024 | | 6 | 79 | 3月 2014年発足の大阪結核勉強会に第106回まで毎月参加 (時に和歌山親族宅よりリモート参加) 3月「ストップ結核パートナーシップ関西」第11回ワークショップの二次会場で感動の詩吟を披露 5月6日 永眠 (享年80) | 能登半島地震(M7.6)/北陸新幹線、金沢一敦賀間開業/総人口約1億2488万人/平均寿命男81.1年、女性87.1年/ 大阪府が「あいりん総合センター」を解体するため路上生活者に立ち退き訴訟、大阪府の申し立てにより地裁が路上生活者に立ち退きの強制執行/小中高生の自殺が過去最多 (529人) |
| 2025 | | 7 | 1月 「ストップ結核パートナーシップ関西」第12回ワークショップに遺族 (妻・長女・長男・孫娘) も参加 | 「あいりん総合センター」解体後の活用方法は行政や住民、労働者団体などの約30団体が構成される「あいりん地域まちづくり会議」で検討中/大阪で中国系民泊が急増中 (特に西成区) /大阪・関西万博開催 | |

文献：

- ・高島毛敏雄，原昌平．第9章 結核対策、脱・貧困のまちづくり「西成特区構想」の挑戦、鈴木亘編、明石書店、2013、<https://www.city.osaka.lg.jp/nishinari/cmsfiles/contents/0000187/187570/09.pdf>
- ・高島毛敏雄、大阪公衆衛生協会の設立から解散までの歴史、大阪公衆衛生、2021; 92:4-10.
- ・松田岳彦、大阪結核勉強会からストップ結核パートナーシップ関西へ、社会医学研究、2021; 38 (2), 156-162.
- ・小池慎也編、全衛連創立50周年記念事業 健康診断関係年表②【感染症に関する健康診断】結核健康診断、2019; 98-139 <https://www.zeneiren.or.jp/anniversary/index.html> (2025年2月15日アクセス)
- ・大阪府立公衆衛生研究所、大阪府立公衆衛生研究所50年の出来事1960年～2009年、創立50周年記念誌、2010; 6-16、地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所IP
<https://www.iph.osaka.jp/s001/010/010/050/020/20180101030000.html> (2025年1月30日アクセス)
- ・社会福祉法人大阪社会医療センター、50年のあゆみ(1970～2020)、https://osmc.or.jp/history_20210319/ (2025年2月20日アクセス)
- ・公益財団法人結核予防会結核研究所(RITJATA)、結核研究所関係年表、<https://jata.or.jp/outline/history/#chronology> (2025年2月23日アクセス)
- ・厚生労働省、人口動態統計年報 主要統計表 死因順位別にみた死亡数・死亡率(人口10万対)の年次推移、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/soikin/hw/jinkou/sui09/deth7.html> (2025年2月23日アクセス)
- ・内閣府、防災情報のページ 自然災害による死者・行方不明者数、https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/r04/honbun/3b_6s_07_00.html (2025年2月21日アクセス)
- ・藤島君，安本理紗、第二次世界大戦後の感染症対策としての産学官連携スキーム-結核対策を事例として-、makoto、2024; 206:2-7
- ・三浦康代監修、八幡校区敬老会(尚歯會)「100回の歩みと人々の暮らし」、八幡地区連合自治会(姫路市地域資源保存継承助成事業による)、2018; 23-24.
- ・日本ピーシーエー製造株式会社、結核の歴史 結核とBCGの歩み、https://www.bcg.gr.jp/general/cat1/post_6.html (2025年2月22日アクセス)
- ・NHK、キーワードでみる年表 平成30年の歩み、<https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/chronology/> (2025年2月20日アクセス)
- ・菅谷正範、診療放射線技師の歴史を知らう、スタディサプリ進路IP、<https://shingakunet.com/bunnyq/w0033/x0440/rekishi/> (2025年2月26日アクセス)
- ・厚生労働省：第22回生命表(完全生命表)の概況 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/soikin/life/23th/index.html> (2025年1月12日アクセス)
- ・総務省統計局：人口推計、www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tstat (2025年2月11日アクセス)

Ⅳ. 井戸武實の主な学会発表と著書等

井戸武實の主な学会発表と著書等（発表年順）

- ◇井戸武實，高松勇，加納榮三．医療従事者に対する結核専門教育(第Ⅰ報)．日本公衆衛生学会総会抄録集．1995；54，1286.
- ◇松元清美，山田一郎，井戸武實．結核サーベイランスデータの利用法 K3 フォーマットへのデータ変換．日本公衆衛生学会総会抄録集．1996；55 (3)，537.
- ◇井戸武實．大阪府下での医療従事者新登録患者調査．結核．1997；72，371.
- ◇逢坂隆子，高鳥毛敏雄，黒川渡，山本繁，黒田研二，西森琢，井戸武實．大阪におけるホームレスへの健康支援 ―社会医学を学ぶ者たちの実践的研究．社会医学研究．2007；25，15－28.
- ◇井戸武實．あいりん地域における健康支援活動．公衆衛生．2009；73(4)，244-245.
- ◇井戸武實．薬を飲み忘れるのは正常な人間-訪問型 DOTS 事業．福祉のひろば．2009；479，6-7.
- ◇大宮陽子，井戸武實，山本繁，高鳥毛敏雄，逢坂隆子．釜ヶ崎の単身男性結核患者にみられた「訪問型 DOTS による行動変容」．結核．2011；86 (3)，358-358,
- ◇田原遠，田淵貴大，針原重義，坂東徳久栄，井戸武實．大阪市あいりん地域のホームレスにおける栄養学的特性―同地域の生活保護受給者との対比―．栄養学雑誌．2011；69 (1)，29-38.
- ◇特定非営利活動法人 HEALTH SUPPORT OSAKA．平成 23 年度即立行政法人 福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 西成区に住む単身高齢者の健康生活支援事業．2012；1-103.
- ◇石井英子，井戸武實．大阪あいりん地区の結核対策についての一考察．椋山女学園大学研究論集 社会科学篇．2013；(44)，48-56.
- ◇三浦康代，井戸武實，田中義則，三浦裕子，山本繁，高鳥毛敏雄．釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告．社会医学研究．2015；32 (1)，31-39.
- ◇井戸武實．外国生まれの結核患者の増加とその対策を考える「第 7 回ストップ結核パートナーシップ関西ワークショップ」の報告．目で見る WHO．2020；73，10-13.
- ◇三浦康代，下内昭，井戸武實，田中義則．新あいりんシェルター居場所棟利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告．社会医学研究．2021；38 (1)，54-67.

V. 資料

資料 1

NPO ヘルスサポート大阪が大阪市保健所から釜ヶ崎を中心とするホームレスの結核対策の一部を受託するにあたって、大阪市に提出した資料

CR 健診車運用によるホームレス結核検診受診から治療完了まで

1) ホームレス結核検診の特殊性

結核対策は、結核患者がいつ、どこで発生しようとも、発生する結核患者の排菌機関をできる限り短くすることを目標をおくが、その方法のひとつとして、DOTS が実施されているといえる。ホームレスは検診機会も少なく、経済的な理由から、受診への障壁も大きいために、患者が発見された後の対策である DOTS を中心にすすめるだけでは、必要な効果をあげることを期待できない。そのため、あいりん地域などでは、患者を発見するための、より積極的な検診活動が不可欠である。単に検診をおこなうのではなく、今まで検診を受けたことのないような者をいかに受診させるか、検診受診者の中の要医療者をいかにして 100%医療に結びつけるか、医療に結び付けた者を治療徹底を確認しながら治療終了までいかにして支援するか、を併せて進めていくことが、ホームレスの結核対策の基本となる。

通常の市民に対する結核対策の場合には、検診活動は専門の検診業者に任せ、保健・医療スタッフは目の前の患者のみを対象とし、治療は病院に任せるという分業方式が多いが、それでも対応できるのかもしれない。しかしながら、ホームレスのような集団やあいりん地域などでは、いまだに高度に結核が蔓延した状態が現在もなお存在している。その事実、通常行われている結核対策では対応が充分できないこと、従前のスタイルの踏襲では明るい展望は開かれないことを示すものである。もっときめ細かいニーズ・生活実態に合わせた、より積極的な検診活動を企画し、そこで発見された結核患者の治療を 100%終了させるための多種多様な柔軟な支援が準備されないと有効な成果は期待できない。

しかも、あいりん地区を代表とするような地域、ホームレス者を代表とするような人口集団層では、プロセスの数が多ければ多い程（初めに＜あそこの窓口＞に行き、次は＜あそこの係＞に、そして又＜ここに来てください＞のような）、また時間がかればかかる程、その検診過程でぼれ落ちてしまうのは必然的である。路上生活者を初めとするホームレスは、検診で異常所見が見られ、医療や精密検査が必要であったとしても、一度その場をはなればそのまま行方がわからなくなるのは、よくある話である。事実、2003 年度厚生科研黒田班により大阪市高齢者就労事業登録者に対して実施した結核検診では、治療や精密検査が必要な多くのホームレスを医療に結び付けられないまま終わってしまった。そのため、2004 年度は、結核検診後直ちに現像に回し、読影し、要医療・要精査の判定がついたものは、すぐに当事者に結果を返し、担当スタッフによって説明と同意活動が始められた。（この時、多くの場合、飼っている＜ペットなどの＞動物、自転車、ロッカーの荷物、友人や仕事の約束、治療終了後の生活の不安などの条件で入院を拒否することが多い。）そのためなんらかの形で最低、治療が開始されるように十分な人材と準備を整える必要性に迫られたし、当事者のニーズに柔軟に対応することが求められた。この体制整備があったので、2004 年度には、要医療患者を全員、治療ルートへ乗せることに成功したと総括できる。

2) ホームレスの治療上の問題点

またうまく入院治療までこぎつけても、引き続き病院訪問をするなどして患者のフォローをし、入院中の患者のニーズを医療関係者にも伝えるとともに、患者を核にした、支援者、更には臨床医、医療ケースワーカー、看護師、保健師、福祉部門ケースワーカーなどと協力体制をとりつつ治療を進めた結果、自己退院の患者がいなくなり、転院や退院後も治療を継続するようになった。そのような支援が充分でないと、患者はいきなり病院から消えてしまい、治療が完了しない事態を招くという失態になる。そういう苦い経験も持っている。

行政上の組織や枠組にはそれぞれ守備範囲があるのは当たり前とはいえ、検診で患者発見をする公衆衛生部門である保健所と、患者の治療を担当する病院・診療所の役割と任務もはっきり区分されているし、生活支援は福祉部門のケースワーカーの仕事となっているなど、余りにもバラバラで行われているのが現状である。そのため治療上の様々な問題を抱える患者であればあるほどに、それらどの場所でも手が負えなくなり、結果として治療完了せず、最悪の場合は度重なる再治療の結果、菌が耐性を持ち、落とさなくてもいい命を落とす不幸な事態になるのである。私どもはそのような事例を何人も見ている。このような状態が持続する限り、結核菌の排菌者としての、しかも多剤耐性の結核菌感染源としてのホームレス患者が増えていくという悪循環を断ち切れない。

3) ホームレス結核患者への具体的対応

結核対策には既に多くの知見と経験の積み重ねがあり、法的な整備もされているので、当事者を中心としたサービス（つまり顧客）という観点から動けば、自ずと道を拓くことが可能である。顧客のニーズを知り、それに対応するサービスを提供していけば、後は時間の問題で患者を減らすことができる。検診活動（受診勧奨を含む）という入り口では、まずホームレスという顧客をよく知り、その顧客がもっとも受診したがる内容にすることが重要である。そのこと抜きに、いくら動き、施策化しても無駄であることを認識すべきである。

その次に患者となる人のニーズ（結核検診後、治療開始までの当事者との係わりの中ですでに把握できているニーズなど）に沿って治療が行われる必要がある。また、DOTS による治療終了までの間に判明した新たな顧客情報も含めて、検診活動という入り口にフィードバックされれば、より多くの顧客の勧誘（結核検診受診者の勧誘）が可能になるであろう。

実際 2004 年度の黒田班の検診活動でも、ホームレス患者の生活や価値観の理解に基づく励まし、奨め、説得なしには、（ただ単に要医療の判定がでただけでは）1 人として治療に結びつかなかったと考えられる。研究結果の事例の中でも、1 人の患者の説得のために数時間が費やされた例もある。しかしこの方は、その結果、結核が治っただけでなく、社会復帰して生活も安定し、同時に私どもとの人間関係も豊かに回復し、人間的にも大きく成長していったことを付記したい。

4) CR 検診車による結核対策の課題

CR 検診車運用の場合は、従来の検診よりスピードが要求される。おそらく要医療の判定が下された患者には、その場で即刻、結果の説明と治療開始の同意を得る努力が開始されねばならないし、時には標準治療をその場で開始する必要が生じるであろう。そのためには、すでに述べたようなホームレス結核検診の特殊性や治療上の問題点を十分に理解し、自ら、患者への治療開始説得が行なえるような医師を常時同乗させることが必要になる。生活問題への対応も時間を待たずに平行して行われねばならない。従来の結核検診車にくらべて、より一層、保健所あるいは分室をはじめてする保健・医療・福祉との協力体制の確立が必須となる。要精密検査者へのフォローも社会医療センターや保健所分室などとの関係下においてスムーズに進行していかなければならないだろう。つまり、そのことが担保されないと、CR 検診車導入の意義も薄れるだろうし、経費の無駄論にも通じるかもしれない。

さらに、CR 検診車のような移動式の検診方法は、受診する対象者に合わせて、場所を動かすことができるのが利点であるが、CR 検診車が有効に活動すればするほどに、それと呼応して、いつでも、何にでも対応できるような結核対策上の拠点が必要となる。排菌している入院患者がいつ自己退院してくるかもしれないし、排菌患者や多剤耐性患者であってどうしても入院治療を拒否する患者もでてくるであろう。それに対応できないようでは、折角 CR 検診車が活躍してもその意義は薄れる。CR 検診車が発見した結核患者の、どのような事態にも、いつでも対応できるような結核

対策拠点が、特にあいりん地区においては重要な意味を持つ。大阪市保健所あいりん分室などを強化し、精密検査に対応するのみならず、治療もないうる拠点として強化し活用することが、あいりん地域の結核対策上、必須である。

5) ホームレス者結核対策を成功させるためのその他の課題

特に、あいりん地域においては、ホームレスは今でも現に日雇い労働者であるという誇りを持つものが多くいる。大阪市高齢者特別就労事業登録者も西成労働福祉センターから就労を紹介されて、日雇い仕事としての清掃事業などに就労しているし、仕事さえあれば、日雇い土木建設関連業務につくものも多い。労働行政との連携、具体的には、西成労働福祉センターとの十分な連携をもつことなしには、CR 検診車の運用をはじめとして、あいりん地域におけるホームレスの結核対策を有効にすすめることはできないであろう。

また、ホームレスにかかわっている公的機関・団体がすでにいくつも存在している他に、炊き出し・相談活動・病院訪問活動などを続けて支援しているも民間グループ・団体が、あいりん地域はもとより、それ以外の地域においても数多くある。そのような公私の機関・グループ・団体とホームレスたちとの間にすでに築かれている信頼関係は、結核対策を推進する上での貴重な社会資源である。そのようなグループ・団体・機関の協力なしには、ホームレスの結核対策の成功は不可能といっても過言ではない。現に、2003 年度から 3 年間にわたって実施した厚生労働科研黒田班による大阪市高齢者特別清掃事業登録者の結核検診も釜ヶ崎支援機構の協力を得て初めて行ないえた。また、文部科研逢坂班による 2005 年 9 月の三角公園横での CR 検診車による研究事業、同年 10 月 30 日の中ノ島公園・淀川河川敷・JR 大阪駅前における同様な CR 検診車を中心にすえた研究事業も、平常からホームレスを支援するグループ・団体・多くのボランティアの協力を得て初めて成功したと考える。

さらには、結核治療を完了したホームレスや元ホームレスたちを、peer supporter として育成することができれば、ホームレスの結核対策にとっては、他のどのように優秀な専門職にもまして、極めて有効な社会資源となるであろう。それだけではなく、本人自身にとっても生きがい・やりがいの感じられる仕事づくりとなりうるだろう。われわれは、これまでのホームレス結核検診を研究事業として推進している中ですでにそのことを経験している。

上記のような多くの課題を有するホームレスの結核対策を成功させるためには、大阪市関連部局がその役割を十分に果たせるように一層の連携を深める必要があることはいうまでもない。それとともに、“必ず成功させる”という行政全体としての強力な意思決定がなければ、いくら CR 検診車が動いてもさしたる効果を期待できないであろう。その上で、大阪社会医療センターや西成労働福祉センターその他の公的機関や民間の様々な団体・グループが力を合わせることによって、はじめて、ホームレスの結核対策・あいりんの結核対策は前に進んでいくであろう。

以上のような多くの課題とあわせて、ホームレスの結核対策は、検診受診への勧誘、検診による患者発見、精密検査実施、結核治療への説得と同意、入院・通院による結核治療終了まで、通常の結核対策以上に、結核患者を中心とした 1 本の線上に包括的な形で人や物を配置し、ニーズにあわせて柔軟に対応することが肝要である。そのためには、前記のとおり、様々な段階で把握した顧客情報をもとに細やかに対応できるように、入り口である検診活動から DOTS による治療終了までを一体的に運用できる体制を組むことが必要であり、最低、検診活動と検診後の DOTS は一体的に運用することが求められる。これにより初めてホームレスとの間に信頼関係を築くことができ、困難を抱える患者に対しても治療終了までこぎつけるように支援していくことが可能となる。さもないと折角多くの資源を投入しても最終的な目標である結核患者を、特に多剤耐性の結核患者を減らすという成果物を得ることができないであろう。

センターだより

第434号
2011年 7月 15日発行
(財)西成労働福祉センター
大阪市西成区萩之茶屋 1-3-44
☎06-6641-0131

日本での結核は、罹患率（※1）も死亡率（※2）も、ともに先進国の中でも高い状況です。特に釜ヶ崎での罹患率は、全国平均の29倍にもなっています。

（※1=1年間で、新たに結核にかかった人数を、人口10万対で表わしたもの）

（※2=1年間で、結核が原因で亡くなった人数を、人口10万対で表わしたもの）

地域に暮らす人々の命と生活、健康を守るための支援を行う「NPOヘルスサポート大阪」（略称HESO）の井戸事務局長に、釜ヶ崎の現状をうかがいました。

日本最大の感染症！

それが結核ですもん

かつて日本では、結核で亡くなる人が年間10万人にものぼり、「国民病」と言われた時代がありました。戦争による食糧難や貧困などの混乱が原因でした。大規模に蔓延した結核も、多方面の努力によって徐々に減ってきましたが、それが97年から連続して増え始め、99年には、厚生労働省が「結核緊急事態宣言」を出しました。

戦中・戦後の大戦後期に多くの方が結核に感染して、熱をとるにつれて免疫力がおとろえ、体の中で眠っていた結核菌が活動を再開するためです。それ以外に新たな感染による発病もあります。

釜ヶ崎にはまだこんなに！

何とか結核をなくせないか！

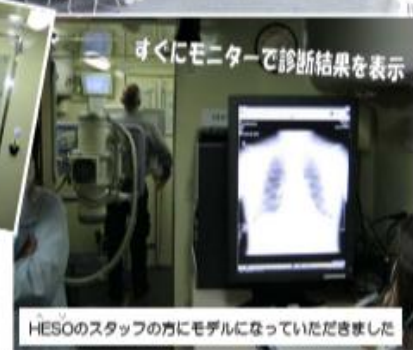
2003年度から、NPO釜ヶ崎支援機構や多くのボランティアの協力を得て、特待登録者に対する結核健診を中心とした健診を行ってきました。2006年4月に大阪市は「CR健診車」を導入し、今ではその場で診断が下せるようになりました。

このようなHESOによる取り組みもあって、釜ヶ崎の罹患状況は少しずつ改善されてきています。

結核患者の罹患率は、1998年には10万対に1,410だったのが、2002年には956.7、2006年には676.7、2009年には550.0と暫実に減ってきました。ところが全国平均は19.0。釜ヶ崎は全国の29倍と依然として非常に高い状況なのです。

また、健診で結核が見つかるのは、全国平均では10万人に7人程度ですが、釜ヶ崎の健診では100人に1人と全国の150倍も高い率で見つかるのです。だからこそ、釜ヶ崎での結核健診は重要であって、みなさんに受けていただきたいのです。

診断結果がすぐにわかるCR健診車



HESOのスタッフの方にモデルになっていただきました

釜と正月には無料の健診を！
釜ヶ崎から結核をなくそう！

「結核」と診断されても、

治療にしり込みしないで！

大阪市のCR健診車は、月に3回、センターの寄場で無料の健診を行なっています。“釜と正月”がムリならせめて年に1回でも健診を受けましょう。

もし、結核が見つかったら、住むところのある人なら通院で治療が受けられます。結核は、6ヶ月から9ヶ月間、薬を飲み続けなければなりません。

薬を続けるのに無理のある人や自信のない人には、HESOのみなさんがDOTSといって、自宅などを訪問してくれながら薬を飲むのを支援してくれます。

住むところがない人の場合は、入院での治療になりますが、入院は無料で受けられます。退院後に薬を飲むことの支援もHESOのみなさんが訪問型DOTSで応援してくれます。

安心して、勇気を持って、治療を始めましょう。

かからないためにはどうしたらいい？

ずっと昔に感染して、免疫力で発病を防ぐことが出来ていた人も、これから歳をとり免疫力が弱くなっていきます。煙草を吸う人・お酒をよく飲む人・食事の栄養バランスが悪い人は、みんな要注意です。一度も感染していない人でも、生活環境が悪い、特に換気が悪いと感染の危険性は高くなります。

もし、咳や痰が3週間以上続いたり、血痰が出たり、胸の痛み、呼吸困難や体重減少が見られたら、結核を疑ってすぐに病院で検査を受けて下さい。

そして、くどいようですが、元氣な人も“釜と正月、せめて年に一度は”無料の健診を受けましょう。

| 講習科目 | 選考・説明日 申込み期間 | 募集人数 | 講習日程 | 講習会場 |
|------------|--------------------------|------|-----------------|------------|
| アーク溶接 | 8月4日(木) 受付 6/28～7/28 | 15人 | 8月11日(木)～13日(土) | キヤクビラー(奥木) |
| 不整地運搬車 | 8月12日(金) 受付 7/5～8/5 | 15人 | 8月19日(金)～20日(土) | キヤクビラー(奥木) |
| 小型移動式クレーン | 8月18日(木) 受付 7/5～8/5 | 20人 | 8月25日(木)～27日(土) | キヤクビラー(奥木) |
| チェーンソー(伐木) | 8月22日(月) 受付 7/15～8/15 | 10人 | 8月29日(月)～30日(火) | キヤクビラー(奥木) |

-474-
カマヤん あはら



**無料
結核健診日程**

誰でも健診が
受けられます



11月25日(火)
10:30から12:00まで
三角公園南側

(雨のときは総合センターに変更)

12月 2日(火)
10:00から11:30まで
あいりん総合センター西側

12月 9日(火)
10:00から11:30まで
あいりん総合センター西側

住民健診で結核が見つかるのは、全国平均では10万人に7人ですが、益ヶ崎では100人に1人弱発見されています。発見率は全国の100倍を超えています。なぜ、こんなに多いのでしょうか。

感染の連鎖

大阪公衆衛生協会の井戸さんは「理由は、感染の連鎖」と言います。「益ヶ崎は、狭い(きょうあい)な場所、つまり、せまい空間が多いのです。大勢の人が集まっている場所に結核患者がいると、その人のせきやくしゃみから感染するのです。人の体は感染をさける仕組みがありますが、10人に1人は感染が成立します。そのうち10人に1人が発病します。つまり100人に1人、結核を発病するのです」。

「結核を少しでも早く発見するためには、結核健診を半年に1回受けることが必要です」と井戸さんは強く訴えています。

年間2万人以上の新しい患者が発生し、年間2,000人以上の人が命を落としている結核。益ヶ崎は罹患率が高いです。特捜労働者でも、毎年、複数の結核が見つっています。しかししっかりと服薬すれば治るのです。

結核をなくすための取り組みを行なっている「大阪公衆衛生協会」「西成区保健福祉センター分館」「三徳薬」をたずねて話をうかがってきました。

結核をなくそう

さらに次の3つを提案してくれました。

- 食事の栄養バランスに気をつけ、飲酒・タバコを減らし、体力・免疫力を保持
- 人が集まるせまい空間には、空気清浄機(掃気機)をろ過するフィルターのついたものを設置する
- 益ヶ崎で結核の入院治療もできる医療体制ができること(大阪社会医療センターに期待します)

早い発見が大事

西成区保健福祉センターの三沢さんも、「感染が広がるのを防ぐには、早く見つけることが大事です。半年に1回の健診を定例させたいです」と。レントゲン室での健診は、センターなどで月3回行なわれています。毎回40〜50人が受けています。分館3階でも1日10人くらいレントゲン健診を受けているそうです。

とくに、今年8月に特捜の従事者健診を行ない、650名が受け、1名が結核と診断されました。

「結核で入院したら長期になる」と

さらに次の3つを提案してくれました。



半年に1回、結核健診を受けよう

DOTSが有効

三徳薬は、大阪市西成区の委託を受けて、おとしの12月からDOTSを開始しました。看護師を6名のスタッフが服薬支援を行なっています。

毎日、大阪自衛隊あいらん相談室などに通っている拠点型の患者さんは20人前後。訪問型は10人前後です。

今年9月末までの集人数は、拠点型が89名で中断者が1名、訪問型は45名で中断者が1名、計134名で、中断者は2名だけです。

DOTSの担当者は「3ヶ月から1年くらい毎日薬を飲むのは実はたいへんです。生活の安定、心の安定が必要で、スタッフと患者さんの信頼関係があつてこそ、最後まで服薬してもうかがえるのです」と訴えます。

元気に働くためには予防が大切です。もし感染しても、長期入院せずに結核は治せます。

半年に1回の健診で、結核を早く発見し、治療を始めましょう！

思ってた入院をいやがる人や、途中で自己退院してしまう人がいます。

そこで、西成区保健福祉センターは、4月から西成区ワンルームマンションを3室確保しました。「結核対策」で生活し、定期的な通院とDOTSの利用ですべて何人もの人が、結核を治したそうです。

除染求人に関するお知らせ

除染作業は放射線被曝を伴う仕事です。人を雇うには、安全対策ほか法律で決められている規制が数多くあります。

これらが守られていないと、将来、重大な健康被害に結びつくおそれ

投稿

名月や悠々なるの、深む秋、ライトアップ

『名前はタンポポ白自給のタンポポ君は、そうに眠っていましたが、真白のメラミン樹脂下駄箱、下から三股、ていねいのていねい、身体を奥に入れ、前に掛け出し、今は丸く、君、まき、まき、まき、のハンサムな君の顔、まるで狸の顔を足、へんを顔、おかしいね、枕がわ、れては、何とかなら、白猫の、可愛い、タ、

センターだより

第535号
2019年12月15日発行
(公財)西成労働福祉センター
大阪市西成区萩之茶屋1-3-28
☎06-6641-0131

結核の発生率が全国平均26倍のこの地域で、長年にわたり、結核予防についての取り組みをされている【公益財団法人 大阪公衆衛生協会】事務局長の井戸さんに、お話をうかがいました。

年に2回は無料の結核健診を受けよう！



大阪公衆衛生協会
井戸事務局長

結核は早期発見 早期治療がポイント

地域での結核の状況

難しく、うつしたり、うつされたりする病気にうつ井戸さん。30年前と比べると結核の発生率は、4分の1以下に減りました。とはいえ、行政や病院、住民の意識の変化など努力の成果だと思っています。それでも結核を減らすためにはまだまだです。結核になってしまった地域労働者の特徴は、無理して我慢したこと、深刻な状態になるまで放置してしまっただけです。みなさんとにかく関心をもってもらうこと、知ってもらうことが大事だと思っています。



こんな症状が続くと要注意

結核かなと思ったら すぐに医療機関に受診を

典型的な症状があっても我慢したり、見過ごす人が多いです。少しでも結核かなと思う場合は、医療機関にかかることが一番大事です。結核菌は空気が乾燥するところではすぐに乾きますが、せまいところ、人が密集するところでは、本人が知らずに感染させてしまうところに何よりも注意が必要です。地域には、感染しやすい環境が多いので注意が必要です。

結核健診を受けよう

センター周辺では大阪市の結核検査が月に3〜4回無料の検査を行っています。発病の検査からも、半年に1回結核健診を受ければ、たとえ発病していたとしても深刻な状態の前に発見できます。治療も公費で助成されますし、住むところがない人の場合には、入院での治療が無料で受けられます。結核は早期に確実な治療をすれば完治できる病気です。

無料結核健診

12月17日(火)
11:30~13:00
萩之茶屋南公園(三角公園)

12月24日(火)
15:30~17:00
阪堺電車沿い
(萩之茶屋地域本部)
健診場所は都度異なります。
詳しくはセンター窓口まで。

誰でも健診が受けられます



結核にかからないために

ずっと昔に結核に感染していた人が、高齢になったり、病気がかかると免疫力が低下することで発病することがあります。日頃から、バランスの良い食事・十分な睡眠・適度な運動など生活習慣に気を付けましょう。くすりさえいりますが、少しでも結核と疑った場合には医療機関を受診して検査を受けてください。元気な人も定期的に検査を受けて自分の状態を確認しましょう。

インフルエンザ流行注意！

インフルエンザになると、38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛等全身の症状が突然現れる、のどの痛み、鼻水、せき等の症状も見られます。症状が重く、高齢者では重症化することもあります。予防接種を受けることで、重症化や合併症の発生を予防し、インフルエンザによる死亡を5分の1に、入院期間を半分にまで減少することが期待できます。予防接種には3千円程度の費用がかかります。

予防のために、普段から健康管理をし、十分に栄養と睡眠を取って抵抗力を高めましょう。人が多く集まる場所から避けてきたときには、手洗いを心がけましょう。また、アルコールを含んだ消毒液で手を消毒するのも効果的です。インフルエンザウイルスは、温度が60℃以上になると感染力が下がるので、加湿器の使用や濡れタオルを干すなどの対策をとって予防を心がけましょう。

高齢者対象

格安または無料で予防接種

市と委託契約を結んだ委託医療機関
対象者

大阪市に住居を有する方があり、①65歳以上の方 ②60歳以上65歳未満の方、心臓・じん臓、呼吸器の機能、ヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能に障がいがある方(身体障害者手帳1級・2級) (世帯主) 自己負担額 1千円以内の予防接種費用(委託医療機関にお支払いください)

(1) 生活保護受給者の方
(2) 市民税非課税世帯の方

問い合わせ先

大阪府 健康局 大阪市保健所感染症対策課 感染症グループ
電話: 06-6664-7106



“薬を飲み忘れるのは 正常な人間” 訪問型DOTS事業

特定非営利活動法人HEALTH SUPPORT OSAKA 常任理事兼事務局長

井戸 武實さん

ひろば
トック

私たちは、大阪市西成区のあいりん地域（釜ヶ崎）で結核を中心とした健康支援活動、人材育成事業、日雇労働者・ホームレス者の実態把握調査などを実施しています。

結核は世界最大レベルの感染症の一つで、日本でも年間二万五〇〇〇人が発症し、罹患率は一九・四（人口一〇万対）です。都道府県ワーストワンの大阪府は三三・七、大阪府は五二・九と全国の約三倍ですが、あいりん地域では六五三・三と、約三三倍にもなっています。

私は四〇年間、大阪府庁や保健所で診療放射線技師として保健行政に携わってきました。その経験を買われ、当NPOの事務局長兼職員への就任を要請され、これまでの経験が生かせ、結核対策が引き続きあいりん地域でできることに喜びとやりがいを感じ、関わって三年目に入ります。

「CR結核健診事業」の受付問診業務（大阪市から受託）は毎月三回、あいりん地域で場所を定めて、生活保護受給者、日雇労働者やホームレスの人々を対象者に行っています。CR結核健診は、即時にデジタル画像で医師が結核の読影診断ができるので有効です。二〇〇八年度の受診者数は四四五四人で、六二人の患者（一・四％）が発見されました。全国の前健康診断での発見率〇・〇〇八％と比べ、実に一七五倍です。

「訪問型DOTS事業」（同）のDOTS（directly observed treatment, short course）は直訳すると「直接監視下短期化学療法」で、「薬を飲み忘れるのは正常な人間」という認識から、服薬しやすい環境づくりに重点を置いています。私を含めNPOの保健師が、通院がむずかしい在宅の結核患者さんを毎日訪問し、目の前で服薬確認を行うのです。居所訪問を拒む人は、毎朝、最寄りの地下鉄の駅入口に来てもらっています。

結核と診断された人たちは最初、「身内に結核は誰もいない」と病気を受容できず、結核の認識も「孫に会えない」「仕事ができない」「仲間と気軽に会えない」という程度で、服薬を拒む様子も見えます。結核への差別的な処遇の歴史を知ってか、保健師らの訪問を



いど たけひろ

1945年、和歌山県生まれ。診療放射線技師。1966年から大阪府の保健所で結核対策業務および医療法による医療監視員業務に従事。1991年から9年間、大阪府保健衛生部保健予防課結核係主査として大阪府全体の結核対策に従事し、府下の病院・診療所などに在勤するすべての医師に結核の基礎から臨床、対策にいたる研修を企画実施した。2007年より現職。

拒否することもあります。しかし、私たちが訪問のたびに彼らを気遣い、彼らの健康についての相談事を一緒に考え具体的な解決方法を示し、また指示内容は禁止事項を少なくし、身体的苦痛のとり方や、疾病観察のワンポイントアドバイス、確認の仕方を伝えるうちに、少しずつ彼らも変わっていきます。

ある肺結核の五〇歳代男性は、「友人と会うまでは絶対入院しない」と言います。そこで地元の社会医療センターで抗結核薬の処方を受け、当NPOで宿泊費と食事代を毎日手渡してDOTSを行い、六日後に入院しました。

六〇歳代男性の場合は、結核ではありませんでしたが、口元が歪み、よだれを垂らしているのが気になり声をかけました。滑舌も悪く、「症状が出て一〇日経つ」と言うので社会医療センターに同行受診したところ、脳梗塞と診断されました。

別の六〇歳代男性は、右手の火傷の傷口が化膿していました。火傷は日雇い業務中のごとで「労災適用を求めたが、雇用主から『仕事のこととしないでくれ』と頼まれ、日当をもらって帰ってきた」と言う。日雇労働者の不安定さが見てとれます。

また別の六〇歳代男性は、結核検診で「右肺腫瘍の疑い」となり、社会医療センターで肺がんと判明、大学病院へ転院しました。二か月後、「明日手術するが、身寄りがなく不安なので医師からの説明を一緒に聞いてほしい。保証人にもなってほしい」と頼まれ、同意しました。

あいりん地域の健康問題の根本的原因是貧困にあります。その解決のためには、住民、企業、行政、NPO、医療機関や研究機関が協同して、地域の貧困問題に立ち向かわねばなりません。また、健康支援だけでなく、個々人の生活全体に目を向ける必要があります。SOSが発信された時にそれを迅速にキャッチし、適切に対応し支えられる存在になると、ここに公衆衛生活動の原点があると考えます。

セミナー・イベント報告2 第7回ストップ結核パートナーシップ関西

外国生まれの結核患者の増加とその対策を考える 「第7回ストップ結核パートナーシップ関西 ワークショップ」の報告



大阪公衆衛生協会 事務局長

井戸 武實

大阪府に奉職して40年にわたり放射線技師として結核対策に従事。退職後はNPOを立ち上げ、あいりん地域における結核対策、DOTSを支援し、2013年から現職。

欧米などの高所得国では結核は徐々に制圧され、今では主として低所得国出身の移民からの発症例に置き換わってきています。かつては「国民病」と呼ばれた結核ですが、わが国でも同じ傾向がみられます。外国人住民の増加に伴って、高蔓延国出身の外国人患者の割合が増加しています。大阪は日本中で最も結核罹患率が高いことで知られていますが、同時にホームレスや貧困者の結核対策に対する先進的・積極的な取り組みでも有名です。外国人の結核の現状はどうなっているのか、彼らが結核を発症した場合どのような対応が必要なのか、従来の結核対策で不十分なものは何なのか、プレイヤーとして誰が鍵を握るのか…。

大阪公衆衛生協会ではこれらの問いかけを共有し、問題解決のモデルづくりを目指して、2020年1月18日、2月

15日の2回に分けて、「ストップ結核パートナーシップ関西」ワークショップとして踏み込んだ講義と議論を行いました。特筆すべきは、このワークショップが大阪府と大阪市の共催となり、行政の積極的な関与と後援を受けて行われたことでしょう。今後、包括的取り組みを強めていこうという関係者一同の熱い思いが伝わり、「大阪モデル」の確立が大いに期待できるものであったと思います。2回のワークショップの様子をまとめて報告します。

1月のワークショップは行政、保健師、医師など結核対策に実際関わる関係者に加え、日本語学校、技能実習監理団体関係者約200名が参加しました。出入国在留管理局と在留外国人の問題に詳しい弁護士による基調講演のあと、外国人の結核問題と対策における多セクター協力

の重要性についての啓発が行われました。

2月のワークショップでは主として日本語学校、技能実習監理団体関係者を対象として結核基礎知識の教育を行うとともに、団体内で外国人結核患者が発生した場合にどのような対応をしたか、するべきかについて情報交換と提案が行われました。

会場は二度ともグランフロント大阪タワーA21階(株)オカムラ 関西支社「Kizuki LABO」で、株式会社「オカムラ」にCSR(企業の社会的責任)の一環として無償提供いただきました。



写真1 全体的様子(第1回)



写真2 講義風景(第2回)



写真3 パネルディスカッション(第1回)

釜ヶ崎の
赤ひげ先生

— 本田良寛伝 —

《4》

社会的要因

本田良寛先生は済生会今宮診療所長に就任して以来、大阪市大医学部の協力でこれまでほとんど手の付けられていない簡易宿泊所の環境調査や住民の健康管理など社会医学の立場から調査を進めた。そして「釜ヶ崎を良くするために政治を動かすためには政治を動かす、アパートを建て、総合病院もつくる。そんな夢を実現するためには科学的なデータがどうしても必要」と痛感していた。

実際、「今宮診療所通院患者の社会医学的実態調査」によると、来院患者の1位が「不慮の事故」、2位が「結核」だった。しかも大阪で発生する結核患者の7割、性病患者の6割を釜ヶ崎地区だけで占めていた。そして3位は「高血圧」、4位が「肝障害・アルコール依存による精神・神経障害」と続く。この調査の結果、分かったことは「病気の原因は、生物

実態調査し結核撲滅へ



無料で結核健診を行っている西成区保健福祉センター分館

「上から目線はあかん」

い階層が生じた。さらに成には性病患者も多く、この地区の患者の老化は自然年齢よりも早くやつてくる。日雇いの労働は、単純肉体労働なので老化も早い。老人病が起り、

「当時、大阪市にも性的に梅毒になられた方もおられました。梅毒で初期高熱があった、本田先生はその初期でもたいたら治るといふ人を入院させないといふこと。本田先生は本当に日雇いの労働者の身になって治療にあたっていました」

自身も罹患

中平さんは良寛先生が結核の罹患に見落とされ、あつてはいけないと熱心にエックス線フィルムの検査結果を見ていたこと算を度外視した献身的な

献身的に活動

1966年、良寛先生は大阪文化賞を受賞した。その理由は「愛隣地区の診療所に常勤医師のいないことを知ってその任に飛び込み、物心ともに恵まれぬ人々のため探

学的な要因より社会的な要因が重大」ということだった。

1970年代に釜ヶ崎で医療実習した経験がある天願勇医師はこうリポートしている。

「高度成長が大阪万博ムードを醸成していたが、片方では貧困のため、適切な治療が受けられない。実態調査」も行った。西な経路で罹患する。先天先生は作業スポンを



「本田先生の志を引き継いで診療させていただいております」と話す齋藤院長

医療活動を続けている」と評価された。実際、地区の病人、患者は目に見えて減少し、厚生の実をあげて環境衛生の向上に良い影響を与えていた。

また、良寛先生は長年にわたって各種の衛生実態調査を断続的に実施して、その調査研究も発表していた。

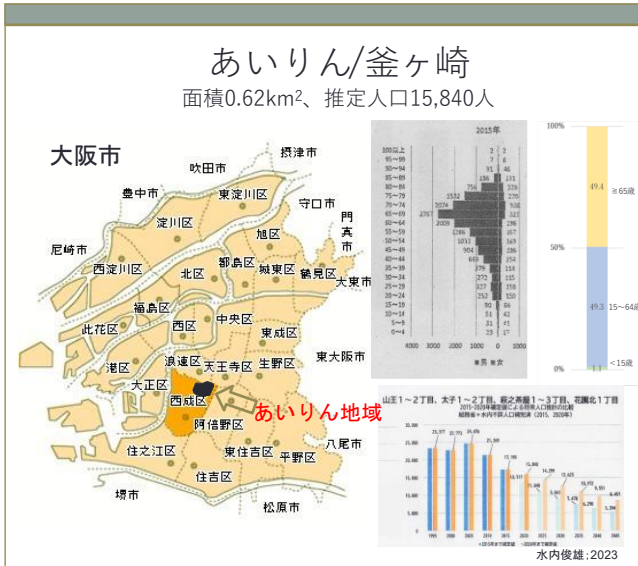
そして80年には「今宮診療所通院患者の社会医学的実態調査」「愛隣地区での売血者、性病などの実態調査」などの業績で吉川英治文化賞を受章。

(大山勝男)

資料 6

あいりん地域における結核

社会福祉法人 大阪社会医療センター附属病院 内科 工藤新三



全国、大阪市、あいりん地域における
新規結核患者数、結核罹患率（10万人対）

| 年 | 全国患者数 | 全国罹患率 | 大阪市患者数 | 大阪市罹患率 | あいりん地域 患者数 | あいりん地域 罹患率 |
|------|--------|-------|--------|--------|---------------|---------------|
| 2000 | 39,384 | 31.0 | 2,468 | 95.0 | 420 | 1536.5 |
| 2005 | 28,319 | 22.2 | 1,545 | 58.8 | 204 | 700.5 |
| 2010 | 23,261 | 18.2 | 1,265 | 47.4 | 155 | 600.8 |
| 2015 | 18,280 | 14.4 | 925 | 34.4 | 96 | 446.5 |
| 2020 | 12,739 | 10.1 | 578 | 21.0 | 48 | 237.6 |
| 2021 | 11,519 | 9.2 | 512 | 18.6 | 38 | 188.1 |

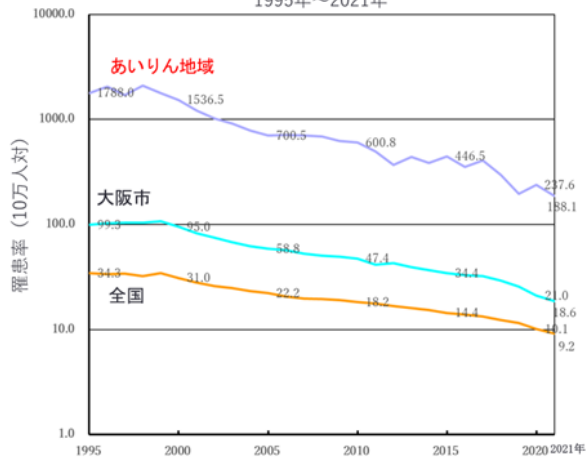
結核予防会 結核研究開発センター
大阪市の結核2022 p44 西淀区の結核対策

アジアの結核罹患率（10万人対）

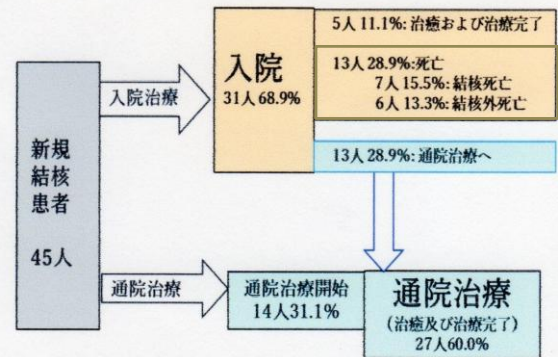
| | | | | | | | |
|---------|-----|-------|-----|--------|-----|----|----|
| バングラデシュ | 181 | ミャンマー | 120 | インドネシア | 158 | 中国 | 41 |
| ネパール | 94 | タイ | 100 | フィリピン | 282 | | |
| インド | 140 | ベトナム | 80 | 韓国 | 41 | | |

2021年 WHO estimated TB incidence rates
<https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/tuberculosis>

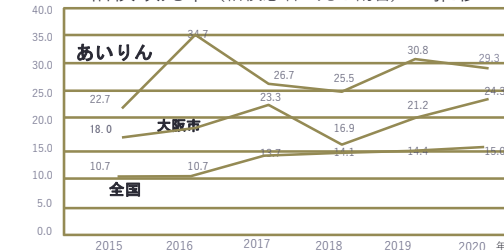
結核罹患率の年次推移
1995年～2021年



2019年 あいりん地域結核患者の流れ



致死率（%） 結核致死率（結核患者の死亡割合）の推移



あいりん地域の結核致死率の推移

| 年 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 |
|-------|------|------|------|------|------|------|
| 結核患者数 | 88 | 72 | 86 | 55 | 39 | 41 |
| 死亡数 | 20 | 25 | 23 | 14 | 12 | 12 |
| 致死率 | 22.7 | 34.7 | 26.7 | 25.5 | 30.8 | 29.3 |

大阪市の結核 2022
大阪府編版コホート検討会に基づく治療成績

あいりん地域の結核のまとめ

- 結核罹患率は2000年から明らかに減少し罹患率が1536.5から188.1（87.8%減）に低下した。しかし、地域の患者数は依然として非常に多く罹患率はアジアの開発途上国とほぼ同じである。
- 大阪市全体との比較で、検診発見の割合が高く（34.9% vs 19.2%）、ホームレス（24.4% vs 2.0%）及び無保険や生活保護受給者（59.1% vs 23.3%）が多い。
- 結核対策の中心は胸部X線写真による検診、抗結核薬の服薬支援（DOTS）、潜在性結核感染に対する積極的治療である。これらの対策が進められ、この20年で罹患率が著明に減少してきた。さらに今後も強力に推進すべきである。
- 致死率（結核患者の死亡割合）が大阪市や全国に比べ有意に高く有効な対策を検討する必要がある。
- 福祉行政部門、医療機関及び地域の患者支援団体との協力を一層密にしチームとして結核対策を強力に進めることが重要である。

「ストップ結核パートナーシップ関西」12回の記録

大阪公衆衛生協会ほか

第1回 ワークショップ

基調講演：「神戸市における外国人の結核とその対策」

○と き 2014年3月11日(火) 9:30～17:00

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86380/>

第2回 ワークショップ

基調講演：「サンフランシスコにおける State-of-the-Art の結核対策」

○と き 2014年12月13日(土) 9:00～18:00

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86381/>

第3回 ワークショップ

テーマ：あいりん地域の結核の現状と将来の展望

○と き 2016年3月12日(土) 13:30～17:00

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86382/>

第4回 ワークショップ

テーマ：「大阪あいりん地域の結核対策の進捗状況」

○と き 2017年3月18日(土) 13:30～17:00

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86383/>

第5回 ワークショップ

テーマ：「大阪あいりん地域の結核対策の進捗状況」

○と き 2018年2月24日(土) 13:30～17:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86384/>

第6回 ワークショップ

テーマ：「長期滞在外国人の結核対策」

○と き 2019年1月26日(土) 13:30～17:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86385/>

第7回 ワークショップ I

テーマ「日本語学校生及び外国人技能実習生のための結核対策を考える」

○と き 2020年1月18日(土) 13:30～17:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86386/>

第7回 ワークショップ II (第8回に読み替え)

テーマ「日本語学校生及び外国人技能実習生のための結核対策を考える」

○と き 2020年2月15日(土) 13:30～17:30 8回:

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/86386/>

第9回 ワークショップ

テーマ「これからの結核対策と新型コロナウイルス感染症対策」

○と き 2022年3月19日(土) 13:00～16:00

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/87612/>

第10回 ワークショップ

テーマ：「低蔓延国であり続けるために市民とともに学ぶ」

○と き 2023年3月25日(土) 14:00～16:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/91048/>

第11回 ワークショップ

テーマ：「ネパールに学ぶこれからの日本の結核対策」

○と き 2024年3月16日(土) 13:30～16:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/95716/>

(結核予防会のネパールにおける結核検診活動広報動画含む)

第12回 ワークショップ

テーマ：「日本の結核対策—過去から未来へ—」

○と き 2025年1月18日(土) 13:30～16:30

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/100655/>

「ストップ結核パートナーシップ関西」第5回ワークショップ（2018年2月24日）

テーマ「大阪あいりん地域の結核対策の進捗状況」

講師 大阪はびきの医療センター臨床研究センター長 橋本章司「QFT 検査および結核発病マーカーを用いたあいりん地域の結核対策への試み」講演風景 於あべの貸会議室リンク大阪



（写真撮影：井戸武實撮影）

「ストップ結核パートナーシップ関西」第7回ワークショップⅡ（2020年2月15日）

テーマ「日本語学校生及び外国人技能実習生のための結核対策を考える」

於「オカムラ」共創空間 グランフロント大阪タワーA21階 (株)オカムラ 関西支社「Kizuki LABO」
全体講義とグループ討議風景（井戸武實撮影）



「ストップ結核パートナーシップ関西」第 11 回 ワークショップ (2024 年 3 月 16 日)

テーマ「ネパールに学ぶこれからの日本の結核対策」

ワークショップ後の懇親会会場で井戸武實は詩吟「^{が び さんげつ}峨眉山月の歌（李白）」を熱唱!





〔写真と動画提供：今田光三氏（大阪防疫協会理事長）〕

「ストップ結核パートナーシップ関西」第 12 回 ワークショップ（2025 年 1 月 18 日）

テーマ：「日本の結核対策—過去から未来へ—」

於大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール

「ホームレス者に対する結核対策を振り返る」

演者の逢坂隆子(元ヘルスサポート大阪理事)は、「私が大勢の方の前で話すのは多分これで最後になると思います。」と切り出され、ホームレス者に対するヘルスサポート大阪の活動を熱く語った。会場は終始なごやかな雰囲気にも包まれ、会場のどこかに井戸さんがいるようだった。オンライン参加者も多数あった。



（写真撮影：三浦康代）

逢坂隆子先生の講演風景

VI. 思い出のアルバム



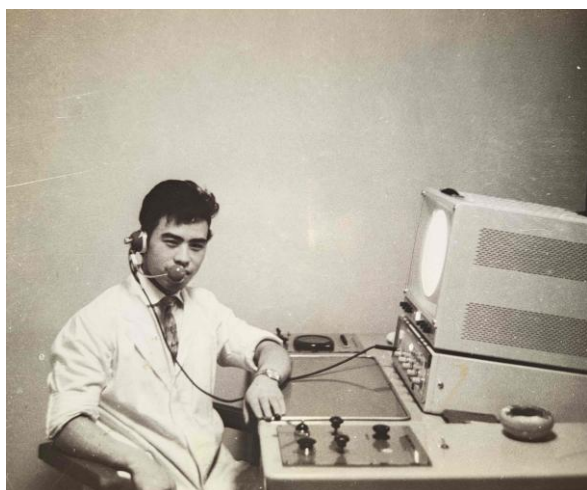
故郷で母と弟 2 人で（1961 年）



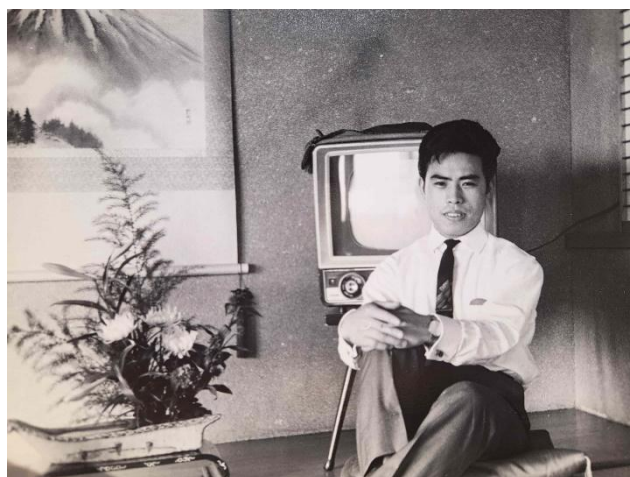
高校修学旅行（1963 年）



玉置病院で(1961 年)



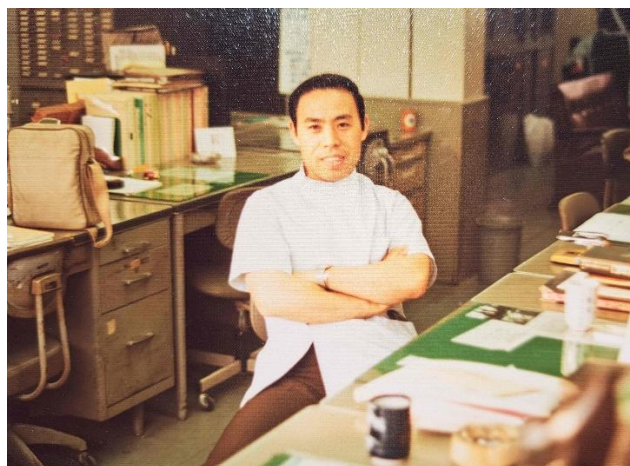
湯川胃腸病院で（1964 年頃）



1964 年頃



大阪府泉大津保健所で（1981 年頃）





結婚式 (1967 年 4 月 30 日)



妻と (1967 年頃)

京都で (1966 年頃)



千の風に～
千の風になって
あの大きな空を～
吹きわたっています



スカイダイビング (2014 年)



←大阪公衆衛生衛生協会が1982年に受賞した
第34回保健文化賞の盾(井戸武實が保管)

「受賞祝賀会会場正面で金色に輝き、深い理解と励ましをもって見守ってくれた盾"衛生の女神 Hygieia"に、私は祈りにも似た気持ちで"明日の大阪公衆衛生を守り給え"と心から願った次第である。」事業部幹事堀井富士子(大阪府門真保健所長)

(出典：土肥四郎，受賞記念式典パーティに参加して，大阪公衆衛生，1983：47，23-24，より抜粋)



読売新聞社より大阪府医療功労賞授与(2012年) 右は記念品の時計と温度計 背景は妻静香氏の手芸作品



↑「偶然、本ページにたどり着きました。感激です。2023年4月2日(日)大東市民会館(キラリエホール)で開催第47回全国吟詠コンクール大阪府東連合大会 一般三部優勝記事です。そして詩吟を通して多くの吟士の方々と出会えたこと、大会運営の関係者の皆さまに感謝申し上げます。」(「Shioyan のぎんじゃ控え室」というブログにあった井戸武實の投稿文と写真、左は賞状)

「私が子どもの頃から、父は詩吟ではトロフィーを次々に持って帰るので、家族は置き場所がないと言い、今となると何とも可哀想な反応をしていました。」 山森晶子(思い出のアルバムの写真提供)

編集後記

追悼集の編集は2024年12月から開始し、2025年3月に無事に完成しました。

井戸さんとゆかりのある方に手探りで連絡すると、井戸さんの訃報をまだご存じない方も結構おられました。悲しみをこらえながら一晩で追悼文を書いてくださった方もおられました。「井戸さんには大変お世話になったから」と、お仲間を紹介してくださった方もおられました。

その一方、井戸さんといっしょに結核対策等に取り組まれた方の中には、ご高齢でご体調をくずし、残念ながら追悼文を辞退された方もおられました。今回、さまざまなご事情で執筆できなかった多くの井戸武実ファンや同志があちこちにおられると思います。

編集をする過程で、井戸さんのことがいろんなところからつながり、さらにインターネット等で調べうちに、井戸さんの言説や井戸さんにまつわるエピソードを多くの方と共有し、ぜひともデジタル版で後進に伝え残したくなりました。そこで、作成委員会が林田雅至先生（大阪大学名誉教授）に、本追悼集の大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive)（大阪大学総合図書館）への収納をお願いしましたところ、ご尽力を賜りました。

今、ここに無事に収納し、本追悼集の編集にご賛同、ご執筆、ご協力いただきましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

そして、編集にご協力いただきましたご遺族より、「父がこの追悼集を見たら、きっと感激して泣いてしまい、ありがとうと言いつける姿が浮かびます。」とのお言葉をいただきました。

ふり返れば、井戸さんは大阪府退職後も、あいりんの結核対策に身を捧げ、井戸さんの活躍は日本が結核の中蔓延国から低蔓延国に移行した時期とちょうど一致しています。まだ課題は残るものの、井戸さんはこの上ない人生の達成感を感じながら、2024年5月6日、人生絵巻を閉じられたのかもしれない。

まだ悲しみから抜けきれない2025年1月18日、井戸さんの4人のご遺族（妻・長女・長男・孫）が、「ストップ結核パートナーシップ関西」第12回ワークショップに参加されました。会場は大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールで、ハイブリッド形式で開催されました。終始なごやかな雰囲気にも包まれ、会場のどこかにまるで井戸さんがいるようだと言者の先生方も感じておられたようです。

「ストップ結核パートナーシップ関西」は2014年から大阪公衆衛生協会が毎年、いろいろな会場で開催していましたが、大阪公衆衛生協会解散後、第12回からは主催事務局が大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座・公衆衛生学教室に変更となりました。井戸さんのいない2025年のワークショップのテーマは「日本の結核対策—過去から未来へ—」でした。診療放射線技師であり、NPO法人HESOと大阪公衆衛生協会の事務局長でもあった井戸さんの弔いも兼ねてのテーマとなりました。会場のどこかで見ておられたであろう井戸さんも、ワークショップが盛会に終わったことに安堵されたと思います。

ワークショップ後にご遺族より、「お世話になった先生方に直接お礼を申し上げたかったのと、父の人生に触れられる1日になると思い参加させていただきました。発表のスライドなどに、父の写真と

名前がたくさん出てきて、胸がいっぱいの日となりました。家族でワークショップに感謝をしながら、しみじみ父のことも話し食事をしました。」といううれしいお便りをいただきました。

そして原稿締め切り日直前に、今田光三氏（一般財団法人大阪防疫協会理事長）より、2024年3月開催のワークショップ後の懇親会で詩吟を熱唱する井戸さんの動画が送られてきました。井戸さんの写真や動画を見て、井戸さんは亡くなられてもなお、皆を明るくさせる方だったんだと。

多くのことを、身をもって教えてくださった井戸さん、やすらかに・・・

三 浦 康 代

編集・監修

三 浦 康 代 元奈良学園大学保健医療学部教授

執筆者一覧（五十音順）

| | | | |
|---------|-------|------|-------|
| ありむら潜 | 有馬和代 | 今田光三 | 海老一郎 |
| 逢坂隆子 | 河崎洋充 | 工藤新三 | 黒川渡 |
| 黒田研二 | 清水多實子 | 下内昭 | 白井ころろ |
| 高鳥毛敏雄 | 高野正子 | 田中義則 | 中村安秀 |
| マ　　一　　コ | 松元清美 | 三杉隆文 | 三浦康代 |
| 山田尚実 | 山本　　繁 | 山森晶子 | |

井戸武實追悼集作成委員会

高鳥毛敏雄（代表）関西大学社会安全学部・研究科教授

| | | | |
|------|------|------|-------|
| 有馬和代 | 工藤新三 | 下内昭 | 白井ころろ |
| 高橋峰子 | 橋本章司 | 林田雅至 | 藤川健弥 |
| 松田武彦 | 三浦康代 | 安本理抄 | 山本香織 |

編集協力

今田光三　　三杉隆文　　山森晶子　　よもぎもち
公益財団法人 西成労働福祉センター

—表紙の説明—

写真上：井戸武實が2016年頃からはじめたフェイスブックのカバー写真「大阪城」とプロフィール写真（2015年3月8日撮影）（写真提供：山森晶子）

写真右下：井戸武實が2023年に作成していたエンディングノートより抜粋（写真提供：山森晶子）
「大切な思い出」の欄に「人生に悔いなし!!書き切れない!!」と表現

井戸武實の歩みと追悼集

2025年3月発行

| | |
|--------|--|
| 企画 | 井戸武實追悼集作成委員会 代表：高鳥毛敏雄（関西大学社会安全学部・研究科教授） |
| 編集・監修 | 三浦康代（元奈良学園大学保健医療学部教授） |
| 出版・発行所 | ストップ結核パートナーシップ関西 <stoptb.kansai@gmail.com> （大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座・公衆衛生学内） 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2 電話 06-6879-3911 |